

彼女が死んでも、物語は続いていく

HAL2001

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大好きな作品が、不本意な終わり方をしたので、scene123.
「毒」までに出揃った情報を元に、「夜風景」という女優のキャリアが
どのように終幕したか？ という物語を「柊雪」視点で語っていきま
す。ある意味、メタ的な要素を含みます。
なんとか「完結」しました。

目次

人魚姫の原石	1
本物の証明	6
契約書は悪魔的	11
エキストラドロップキック	16
町人A、主役を食らう	20
ジョハリの窓	25
偶像の天使	29
12個の椅子を巡って	34
即興の殺し合い	38
天使の仮面を盗むには？	43
双子、襲来!?	47
彼女は可憐に嘔吐する	51
創られた美しさの価値	55
舞台の上の麒麟児	59
表現のダイビング	63
女子三日会わざれば刮目して見よ	68
修羅と雪	72
ブルカニロ博士は登場しないし、答えない	76
カーテンコールのその後	81
「普通」の文化祭	85
新宿ガールの初期衝動	90
二つの恐ろしく、素晴らしき座組	94
天使が悪魔に変わる時	98
偶然の霹靂	102

変身の代価	106
開戦の火蓋	113
正と負の芝居の攻防	119
視点の逆転	124
演技の崩壊	131
天使を見つめる顔	137
呼び方の違い	144
両方の仮面	149
黒い思惑	154
千秋楽と打ち上げ	159
広告と商品価値	164
女優業と監督作	168
オーデイションでの奇策	173
終わりの始まり	179
時系列とまらない物	185
マクガフィン拳銃	190
悪人になる覚悟	195
劇的でなければならぬ	199
偽装工作と裏切り	203
終幕はあつげなく	208
編集に命を賭ける	212
黒から天へ	217

人魚姫の原石

映画監督が、女優を殺した。もっと詳しくいうと「監督」黒山墨字が「女優」夜風景を殺した。私はその一部始終を「撮影」していた。この「撮影」は黒山墨字作品の映画撮影のクライマックスシーンのためであって、この映画のラストには殺人という行為がどうしても必要だった。だから、私は殺人という重い犯罪行為に協力してしまった。映画を完璧なものにするためには絶対には「女優」夜風景の死は必要条件だと理解してしまったのだから。

夜風景という「女優」の物語はこの「撮影」で終わってしまった。彼女のこれから約束されているだろう成功や地位や未来は黒山墨字の傲慢な決断で、全て水の泡になって消える。けれど、私はその泡になつて消える人魚姫のラストのような「儚さ」を撮らなければならぬ。彼女のラストアクトを無駄になど出来ない。してはいけない。

この物語は5年前以上前の阿佐ヶ谷芸術高校で、あのど下手くそなドキュメンタリー映像とも言えない「映画」を撮った時から始まっているけれど、分かりやすく説明するためにこの部分はカットさせてもらう。ともかく私は高校時代に黒山墨字の下で、映画というものに真剣に向き合っていた。

先生は一年で、非常勤講師を辞めてしまったけれど、私には個人用の名刺と連絡先を教えてください、何かあった時にはかけてきてても良いと言ってくれた。二年生からの先生のいない学園生活はある意味平凡だった。ごく普通の映像の勉強をするだけの日々だった。今思えば、程々に楽しくて、程々に暇で、程々に幸せだった。

ただ、それが急変したのは私が三年生になって直ぐの時だった。急にお母さんが病気で倒れ、あつという間に日常が音を立てて終わってしまった。闘病期間は三ヶ月なかった。悪性の癌で、検査した時にはフェーズⅣになっていたらしい。初めから助かる見込みがなかった。簡単にいうと、運がなかった。この時、私にはあるアイデアが脳裏に浮かび、先生の連絡先に電話をかけた。内容はこうだ。

「母さんが病気でもうすぐ死んでしまう。だからその瞬間『までを』カメラに収めたいんです。

力を貸してください」

人は一生で一度しか死なない、そんな希少な、絶好のタイミングの被写体が、目の前にいるのに、それを機材がないなんていう馬鹿げた理由で「撮影」出来ないなんて嫌だった。先生は協力してくれた。この時、黒山墨字の実力が本物だと実感させられた。世界で評価されている映画人から演出・構成・脚本の作り方を真摯に指南してくれて、高価な機材の貸し出しもしてくれた。先生は私がどう見せたいか？ 私がどう感じて、どう表現したいか？ という私の考えを真剣に受け取り、一緒に悩んで苦しんで足掻いて、答えを探してくれた。共同制作者としてはこれ以上の人はいないと思うのは当然だった。

ただ、先生は「柊、お前が撮影するんだ。俺みたいな他人が撮ったんじゃない。病気で死にかけてる母親を娘の視点から撮るからこそ、そこに価値が生まれるんだ」そう強く断言した。

私の拙い撮影でも、それはノンフィクションである事の証明でもある様に映ったし、倫理的に取り扱い事が難しい「死」というものをその当事者だから表現が許された。結局、映画撮影の機材貸し出しと映画の作り方は先生が色々示してくれたけど、監督・脚本・演出・主演等々は自力でなんとか行った、映像科だからこそクラスメイトのみならずが真剣に手伝ってくれたのも大きかった。

あの、高校入学して直ぐに撮ったドキュメンタリー未満の対話映像も素材として、効果的に使えたのは大きかった。素人が本当に嗚咽を漏らして、本音で語り合って泣きあっている場面は貴重だ。母の葬式の後、私は寝る間も惜しんで一心不乱に撮りまくった録画素材を編集して、なんとか作品が出来上がった。正直自分では、出来が良いのか悪いのかよく分からないが、やり切ったという実感のみが強く感じ

られた。

その日、先生にこの作品を見て貰うため、連絡先に記載してあったクラウドサービスに録画データを送り、念のために住所にも録画データの入ったSDカードとお札の手紙を送ったら、住所に物理的に届く前に電話がかかって来た。荒々しい口ぶりから手紙を読んでいない事は明白だった。

内容は先生らしい無茶だった。俺はこの作品にクレジットされるような事はしていない。というクレジットの削除依頼と本題の、もし誰かにこの作品の思いを理解して、共感して欲しいと思うなら、日本映像協会主催の「学生」向け映像フェスティバルに、この映像を送り付ける、どうせ「学生」向けだ。当然最終選考ぐらいまでなら残るから。

私は先生というプロの手を借りて作ったのだから、私の名前で参加するのは少々ズルい気がしたが、まあ規約上、制作の中核メンバーが「学生」であれば良いからという事と多くの人に自分の撮った物を見て欲しいという欲望が最終的には勝って、応募することにした。

ただエントリー欄で知ったが、あくまで「学生」のコンテストで、専門学生や大学生も応募可能だった。というか、そっちがメインだった。流石、随分とハードルの高い事に挑戦させるなあとは思ったが、ダメで元々だと思いきエントリーした。

意外にも順調に一次審査、二次審査、最終選考に勝ち残り、学生映画としては割と長い90分以上の内容だったが、題材の反則的内容が受けた様で、そのフェスティバルで高校生特別優秀賞、審査員特別賞、そして高校生で初の最優秀賞の三冠を成し遂げた。ちなみに審査員席にある黒山墨字の文字を見たときは笑ってしまった。後で聞いたら、忬度はしていないし、俺の名前がクレジットで出たら面倒だから消せと言っただけだと語ってくれた。あの人の性格上、忬度もクレジットの件も本当だろうけれど、事実上の推薦だった事はありがたく

思っている。

ただ、母のこの闘病によって母子家庭だった私は金銭的面で、苦しくなつて、大学には進学しないことに決めた。そもそも大学に進学しても先生の言うように、映画が作れるわけではない。独自に映画を作りたいなら別の方法がいくらでもある。そう思つて就職の道を選んだ。

それから二年が過ぎて、今はとある映像関係の制作会社で勤務している。この会社に入った経緯はあの時取った賞のおかげで入社する事になった……。そう黒山墨字直々に、ウチで働けという強引な誘いを受けてスタジオ「大黒天」で働いている。正直、この経緯は流石、先生というか本当に強気で、ちよつと断れる雰囲気ではなかった。今の仕事は映像関係の業務が基本で、制作の名の下に本当に多くの雑務が回ってくる。というか、この零細スタジオは私が仕事を取つてこない、まともに機能していない。黒山墨字にお金を儲ける社会性を期待する方が間違いだと気づいたのは入社して、一週間掛からなかった。まあ夢の映画監督と呼ぶにはまだまだ遠いが、やりたい事をやっている実感はある。ただ正直に言えばこの二年で、まともな休日があつた気がないので、割とオーバーワークな気がする。黒山墨字の下だから働けているが、他の人の下だったら絶対に辞めている自信がある。

ただ、辞めない理由は簡単だ、先生とはもう呼ばなくなった相手、墨字さんの事を尊敬しているからだ。それにもう一つ、自身の映画論について語ったり、作り手が作品について語ることを無粋だと思つている墨字さんが、私には明確にある野望を打ち明けてくれたからだ。

「俺にはどうしても撮りたい映画がある。そのためには『芝居をしないで、自然体で役に成れる役者』を探しているんだ。まあ全人類探しても、いないのかもしれないがな」その時の墨字さんの声のトーンはどこか不可思議だった。

一度そんな人物に出会った事のあるような核心めいた口調で、語った後にあえて否定したようだった。まるで、今ではその出会った人物では撮影できないような口ぶりだった。

この不可思議な核心を耳にしたら、私はどうしても黒山墨字が撮りたいという映画を観たいと、いやもつというなら、その映画を撮るのを手伝いたいと思ってしまった。そうこの人は基本的に、夢を語るのが上手い人なんだ。

後にして考えれば、この時言っていた役者は、墨字さんの15年前の監督作「たんぽぽ」の主演女優「環連」の事を言っていたのかもしれない。もしくは、日本を追いやられた「王賀美陸」だったのかもしれない。

けれど、墨字さんが見つけ出した人物はその人たちとも引けを取らない天性の怪物だった。役者という生き物を人間の形にするところという風になるという原石の塊だった。

その人の名を「夜風景」若干16歳にして、黒山墨字を本気にさせた少女。

ただ、この出会いは結果だけ考えれば、不運だったのかもしれない。なぜならこの出会いがなければ、そうすれば、「女優」夜風景は死ななかつた筈だ。

しかし、この出会いのおかげで、黒山墨字の偉大なる快作は誕生することになる。私は、その「撮影」を協力することになり、ある視点から見れば共同制作者で、共犯者になった。

本物の証明

その日も私は雑務をこなしていた。また墨字さんが、土壇場で仕事をキャンセルしたという。いつもいつもあの人はこういう厄介事を私に後始末させるんだ。私がどれだけ頑張って仕事を持って来ているかまるで分かっていない。

あの恐い顔つきと体格も慣れてしまえば、流石に文句ぐらいは言えるようになる。スタジオで、ある映像を見ていた彼に、私は怒鳴り散らした。このままでは私の給料にだって影響が出るからだ。

ただその日は何時ものようなはぐらかすような口調ではなく、まるでとても大切な宝物を見つけた子供のようないきなり口調で、私に不思議な事を言った。

「いつか必ず歴史に名を残すだろう、役者の原石……そんな才能を見つけたらどうする?」

そんな夢みたくない話をはぐらかすためにいったのかと思うと、どうやらある映像を食い入るように見ながら真剣にいつているようだ。そうして今日、これから撮影なのにごどこかに出掛ける準備をしている。止めようとする、ニヤリと笑って

「原石を磨きに」

と言っただけのけた。結局、撮影スタジオ前で、現地合流する事になって、その「原石」とやらを連れて来るらしい。突然すぎて、少しパニックになるが、ある意味、いつものことだ。

ただ、この時はいつもの範疇を優に超えた言動だった。初めて彼のいう「原石」と出会った時、墨字さんは勝手に持ってきたらしい。もちろん「原石」というのは比喩表現だから、実在の人物を強引に誘拐・拉致してきたということだ。

この印象的すぎる出会いが女優「夜風景」との出会いだった。

この後、私はこのヒゲ野郎と共に、とにかく平謝りをした。ここでも墨字さんは強情で、なかなか謝らないから彼の頭を無理に押し付け、とにかく誠意を見せようとしたが、当然のように彼女からは嫌がられた。彼女は流石に、場所がちゃんとした大きなセットが組み立てられ、カメラや照明や映像を撮影しようとしたのではなく、役者としてスカウトしたかったという事は理解してくれていた。

でも、明らかに墨字さんに嫌悪感を抱いていたし、怒ってもいた。ある意味、いや至極当然だ。どうやら、学校への登校中に強引に連れてこられたようで、本当に拉致で訴えられたら負けるかもしれない状況だった。墨字さんは彼女を「金の卵」だといって、私にフォローも求めたが、どう考えてもこんな状況で、演ってくれるはずがない、流石に無理だ。

そうして、流石に付き合いきれなくなったのか、夜風さんは適当な理由を付けて帰ろうとする。それがごく自然なあたりまえの行動だ。ただ、それを墨字さんはこう言って引き留めた。

「あーあ、せっかく、お前を主演にCM撮る予定だったのにな」

そう墨字さんは、明らかに彼女に聞こえるように呟いた。その「CM」という言葉に彼女が反応を見せた瞬間。墨字さんは大人げなど全くない本気での「煽り」を披露した。

めったにないチャンスの前に、ビビったのか、要するに腰抜けなんだろう、帰れ帰れ自称役者（笑）だのとよくもまああんな事を言えるものだ。

そういった煽りに流石に乗せられて、彼女は「私は役者よ!! 演つてやるわよ!!」と完全に口車に乗せられていた。私は根本的解決は全くしていないんだけどなあ……と思ったが、取り合えず、目の前の仕事に集中することにした。

CMの内容は新発売のシチュウのウェブCMだった。コンセプトは「父の日にシチュウを」内容は主人公の少女は初めて一人でキツチ

ンに立つ。仕事から帰ってくる父親のために、慣れない手つきで料理を作っている。喜ぶ父親の笑顔を思い浮かべながら、味見をして終わり。

というまあ、ありふれた企画で、そんなに難しくない内容だ。そんな企画にいくらか暴言を吐く墨字さんと割と緊張していない受け答えをする夜風さん。

とりあえずテストを撮ることになった。あの黒山墨字のいう「金の卵」が何を見せてくれるのか期待しながら、カチンコを鳴らした。カメラに映し出されたのは、とんでもなく手早く、野菜を刻み、的確に炒め、フランベさえする姿だった。

当然すぐにカットが掛かり、墨字さんが大声を荒げて真剣にやれよ!! と言っているのに対して、夜風さんは真剣よ!! 味見してみる!! とこれまた頓珍漢な事を言っている。

まるで、ダメだ。この子は芝居というものを分かっていない。どうしよう、今この場にクライアアントだっている。ウチがこの役者を配役したのは信用問題になる。そんな事を考えていると、墨字さんは一呼吸おいて、彼女にこう尋ねた。

「お前『芝居』を何だと思っている?」

夜風さんは少し考えた後「思い出すこと?」そう言った。その瞬間から空気が変わった。

そこからの墨字さんの指示は彼女にとっては明瞭だったのだと思う。「分かっているなら、早く演れよ、初めて親父に料理を作った日思い出せ、カチンコの合図と共に過去に戻り、カチンコの合図と共に現実に戻ってくる。それがお前の芝居だ」出会ってほんの少ししか、経っていない相手に力強い口調で断言した。

少し間を置いて、緊張した声で「私、父親に料理を作ったことないの、戻るべき過去がないわ……」そう言った彼女は不安そうな顔をしていた。

墨字さんは少し考え、諭すようにこう言った「この際相手は誰でも

いい、初めて手料理を作った日を思い出せ、俺が撮りたいのはお前の愛情だ、誰かのために努力するお前が見たいんだ」

その返答は「カレライスだったわ」という一言。この時の眼差しはとてとても綺麗で、墨字さんは本番に移って大丈夫だからさっさと撮るぞと言った。この時、先ほどの失敗をした彼女が、完全に場の空気を支配していた。本番の撮影が始まった。

先ほどまでの卓越した技術はどこに行ったのか？ そこには本当に初めてキッチンに立った少女がいて、誰かのために、拙い技術で、真剣に料理する姿があった。とても不器用で、包丁で指まで怪我をして、それを誰かを思つて笑つてごまかした。少しずつ出来上がっていくシチュウーを見て私は、墨字さんが正しかった事を知った。

「一体どんな、半生を過ごせばこんな人間になれるのか、この子は『本物』だ」

ラストの味見をする横顔は、その場の全員を魅了した。当然これでも OK が出た。ただ、シチュウーは本当に焦っていたから、別撮りになった。

結局その場で、ギャランテイの話や契約内容の話もしなければならぬから、夜風さん、いやけいちゃんはウチの事務所に所属する俳優になった。その帰り、今朝、事実上拉致されたの車に揺られる最中に、けいちゃんはずっとそのCMに使われる素材を見て微笑んでいた。カメラの前で初めて演じたんだ。当然かもしれない。

そうして、けいちゃんはポツリと「……うん驚いたわ、私つて思つたより、綺麗なのね」そう心情を吐露した。それを相変わらず子供っぽい墨字さんはからかって、運転中の車の中で二人は大暴れした。

その日、墨字さんから、ある連絡があった。

「夜風が今日、失敗した最初のテイクから、OKがでた最後まで映つて

いる所『全て』とにかく集めておいてくれ。クラウドと物理媒体にもバックアップを多重にしておいてくれ。それと今後、夜風が変だと思いう行動や言動をした瞬間も撮影しておいてくれ、多分使うことになるから」

この命令は私はプロモーション映像の一つだと、私は勝手に思っていたけれど、全ては黒山墨字の映画作品の素材にするためだとは知らなかった。黒山墨字の作家性はある人間の「日常」を切り取って、一つの映画作品に仕上げてしまうことだというのにも拘らず……

契約書は悪魔的

今日は、スタジオ「大黒天」で初めて俳優が所属する様になった日だ。いくらウチがズボラな経営をしていると言っても、契約の書面はちゃんと交わさないといけない。コレはウチのスタジオの利益を守る為でもあるけど、「俳優」夜風景を守るものでもある。ただ、当然の様に墨字さんが「広告出演契約書」や「映像作品出演契約書」や「芸能事務所所属契約書」なんかの事務的な書類を書いて、用意してくれる訳がない。ああそうだ、もちろん全部、私がしないといけない。私以外に人員がいないんだからしょうがない。

いや、アレでこういう事務的な能力がないから出来ないのなら、まだ我慢できる。本人の適性の問題だから、ある意味仕方ない。でも大まかな書き方のレクチャーも、ダメだしや、追記事項の記載も片手間で指示してくる。そう、出来ないからやらないんじゃないやなくて、面倒臭いからやらないんだ。ああ、本当にいきなり溜まつてる有給申請を急に出して、困らせてやろうか!!!

しかも、墨字さんのせいで「広告出演契約書」に関しては事後契約になってしまふから、心苦しい。ちよつと、真面目にトラブルになったらどうしようか？ まあただ、けいちゃんがくる時間までにはなんとか、契約書の束を用意出来た。唯一気になる点は、墨字さんに追記で色々記載するように言われた「芸能事務所所属契約書」についてだ。

スタジオ「大黒天」で、撮影した映像に関する契約上の取り扱いだ。お堅い文章で、書いたけど、要約すると夜風景の映像はスタジオ「大黒天」が映像の所有権と編集権を有するというものだ。もちろんそれに対する拒否権の行使も記載してあるが、かなりこちらに有利な記載の仕方だ。ただ、コレをわざわざ記載してあるのは、墨字さんが夜風景の映像をなんらかの形で撮るという意味だ。私はその事実になんか少しくわくした。

その後、あらかじめ約束していた時間にけいちゃんは制服で歩いてやってきた。正装として、学生服を着ているのか、ただ単に学校の帰りなのか分からないが、とにかく来てくれてホッとした。最悪、墨字

さんのあの言動を後になって思い返して、全て無かったことにされても文句が言えないからだ。ともかく、私は少し緊張して、契約手続きについての解説を始めた。契約上での主な注意事項と事務所所属になる事での制約、それと最も大事な「広告出演契約書」の事後契約についてのお詫びだ。

初めのうちは、けいちゃんも書面を見ながら、相槌やいくつかの簡単な質問をして、割と順調に話は進んでいたが「広告出演契約書」の話が出た瞬間、目の色が変わった。

「あの時、撮った映像って完成したの？」

墨字さんが完成した旨を伝えると、けいちゃんは用意していた契約書にザっと目を通して、全てにサインをして、朱肉を私に用意させて、契約書全てに拇印を推した。「これで、契約の話は終わったでしょ。あの時の完成映像を見せて」と墨字さんに、詰め寄った。

そんなに、今すぐに見たいのかと私は驚いたが、墨字さんは気だるげにスタジオのPCを立ち上げて、あの時の完成映像データを見られるようにセッティングした。即座に、そのPCの前を陣取ったけいちゃんは、食い入るようにあのCMを見始めた。すると、墨字さんは私に「とりあえず、今の夜風の奴を撮影しとけ」と変な指示を言って、何かの雑誌を読み始めた。

一時間半後、けいちゃんはあのCMをずっと見ている。一度も目を離さず、PC用の椅子で体育座りをして、永遠とリピートしている。正直、怖い。墨字さんはこうなることが分っていたのだろうか？ともかく、微動だにしない被写体を撮り続ける私の右腕は一時間半の撮影で、ちよつと腕がミシミシ言っている。どうしよう。墨字さんに撮影の続きをお願いしようと思ったら、横から何かを運んでくる音が聞こえた。墨字さんが、三脚を持ってヘラヘラ笑いながら近寄ってきた。そうして「代わってやろうか」と厭味たらしく言ってきた。

三脚での撮影から一時間半後、計三時間のリピート再生をし続けて

いる。微動だにせずだ。これは流石に、声をかけることにした。しかし何度も呼びかけても、返事はない。イヤホンをしている訳でもない。というか、さつきまで、私が勝手に撮影していたのにも絶対気づいていない。これは集中力が凄いというか、ただただおかしい。本当に貞子よりも怖い。

墨字さんに言っても「初めての映像作品だからな、嬉しいんじゃないの」というが、いやいやとつくに嬉しそうって領域超えてますって……

「黒山さん」そう突然三時間ぶりに言葉を発して、こう問いかけた。

「この映像の中の私、どこか変じゃない？」

私には質問の意図が分らなかった。CMの彼女は全然そんなことなかったし、クライアントさんの評判も良かったし、けいちゃん自身も綺麗って喜んでたのに何で？

墨字さんはその質問がどうも嬉しかったようで、笑ながらどう変に見えたかをけいちゃんに聞いた。「それが、分からないから聞いたんですけど……」すこしムスツとしてそう言った。

この後、すぐにバイトだからと言って帰って行った。あの子はやっぱり天才だからなのか、ちよつと本気で変だと思う旨を墨字さんに言うと、こんな言葉が帰ってきた。

「あいつは変どころか真つ当だよ、手前の芝居の未熟さに、無意識に気づいてんだ。ありやすぐに化けるぞ」

墨字さんはいつものとても怖い顔をして、ニタニタと笑っている。思わず通報したくなるような顔つきだ。ただ私は「監督」黒山墨字に向かってこう言った「最近、ずっと楽しそうですね、今、活躍してる役者では演じられない、ずっとずっと探し続けてやっと見つけた原石ですもんね。あの子ならいつか「あの役」を演じられる、そう信じてるんですよ」

照れくさそうに「そのために作ったスタジオだからな。あいつを速攻でそこまで成長させてやる。よし、鉄は熱いうちに打つか！」と言った時の声は伸びやかで、つい嬉しくなって「はい」と返事してしまった。

ちなみにその成長の為に、適当に仕事入れといてくれと頼まれてしまった。また私任せですか、そうですかそうですかと対応した。まあ、このくらいは仕事の内だと割り切って、けいちゃんのスタジオ用の「夜風景」のプロファイルを作成しようと、今日サインした契約書を参考にPCを使って作っていったが、ある当たり前の事にふと気が付いた。あれ、けいちゃんて「未成年」じゃん。

至極当然の事として、芸能プロダクションが「芸能事務所所属契約書」を作る場合、その未成年者の保護者の同意が必要になってくる。たしか民法第五条だったかで、未成年者が保護者の同意を得ないで行った契約行為は取り消すことが出来るはずだ。

面倒だが、仕方ない。今日の契約は法的拘束力を持たないから、再度契約を交わさないといけない。その件を墨字さんに報告すると「だから？」と此方の方も見ずにそう言った。いや、流石に契約はちゃんとしないと駄目だろうと言うと、墨字さんが夜凧家の惨状を語ってくれた。まず、父親が蒸発していて連絡が取れず、母親とは死別していて、まだ小さい双子の兄妹がいること、親類には頼れなくて、だから今はバイト三昧だということ……

故に、「芸能事務所所属契約書」をちゃんとした保護者を付けて、契約することそのものが、不可能だという事だった。ああ、だから墨字さんは真面目に取り組まなかったのか、もしかしたらけいちゃんも形式としてだけというのを理解しているから、あんまり真剣じゃなかったのかもしれない。

そのあと、墨字さんは貞子よりも、もつともつと怖いことを言ってきた。「ちなみにあのウェブCMも契約がされていない条件で、やっているからこれが、外に漏れたら、再度撮り直して、違約金はウチにくるだろうなあ」

とんでもない爆弾発言を放り込んできた。あのウェブCMのお金は自転車創業のウチには欠かせないものだし、それでいて、もうOKの出たCMをこちらのミスで、トラブルにでもなったら、このスタジオは潰れるのは確実だ。違約金を払える体力なんて当然ない。そうならば当然給料も出ない。失業保険で暮らしている私が目に浮かぶようだ。

ああ、ごめんけいちゃん。「社会人」として接する私をどうか許して。ただ、形式だけなのに、何であんな色々追記で、記載するような真似をしたんだろうか？ そんな事を少し頭に過ったがこの問題は私の中で、考えないことに決めた。

エキストラドロップキック

とりあえず仕事の依頼として、名前のある役とかじゃなくていいから、適当にエキストラでも取ってこいと言われた。まあそれならそんなに難しくはない。実際エキストラとして、出演して儲けを出そうとするならば、難しいかもしれないけれど、ほとんど交通費しか振り込まれないような仕事なら、この業界にいれば腐るほど求人がある。目的があくまで経験を積むことなら、そんな求人はすぐに見つかる。とりあえず私は、エキストラの求人締め切りが目の前だった、ネットプライム配信用の時代劇ドラマに応募することにした。

けいちゃんの第一声は「すごい」だった。都心から約一時間車で走らせた先に、広大な敷地にまるで、江戸時代の景観の建物がずらりと立ち並んでいるんだ。時代考証にもきちんに対応した、木造建築はタイムスリップしたような感覚になるのも至極当然だと思う。

ただ、その後の発言から、また墨字さんがなんの説明もせず、連れてきたのが分って、本当に身勝手な人だと再確認した。ただ、まあエキストラなら、そこまで怒るような事でもないかとも思った私もいた。

舞台が時代劇ということも合って、現場で用意されていた着物にけいちゃんが着替えることになった。これが本当に可愛い！ 初めて着たという着物は本当に良く似合っていて、とにかくこの「被写体」は撮らなければ損だと、急いでスマホでありとあらゆるアングルで、撮影した。ちなみに何か墨字さんが、ロリコンかどうかの話になっていたが、あの人はナチュラルにセクハラをするけど、子役には興味を示した事はないから、多分違うと思う。

そうこうして、今日の仕事内容の話が始まった。今回はあくまで、私達がけいちゃんのマネージャーとしてついてきてるといふ事を教えていると、墨字さんが本当に余計な事をけいちゃんに吹き込み始めた。監督は偉そうにすることが仕事の「他者依存」だとか、演出は大体、監督の座を狙ってる「ユダ」だとか、撮影は勝手に妄想を絵にしやがる「犯罪者」だとか、録音は役者の盗聴する「イカれた奴ら」だ

とかといって、完全にふざけてる。

ここで、素直にけいちゃんか、この人のいう事を真面目にメモっているから、本当に困ってしまう。しかも信じかけてるのが怖い。まあ、監督という職業に関しては訂正は入れたけど、割と私も偉そうな「他者依存」とそう思ってるけど……

まあ、おふざけも度が過ぎるといけないから、とにかく今日演ってもらおう事を説明する。

『エキストラ』 群衆通行人、主人公達の後ろで隠れている、その他大勢の人達、決まった台詞もないのが普通。でも、その背景で自然なりアリティを作るために、必ず必要な人達」

けいちゃんは私の言った「必ず必要な……その他大勢」という言葉を噛み締めているようだった。

墨字さんは焚きつけるかのように、エキストラは、やれ売れてない役者の仕事だ、有象無象の一人だ、そんなのは不服か？ と何故か煽っている。まあ、端役というか、出演者の中では最も格下なのは事実なんだけど……

ただ、墨字さんが何故そんな事を言っているのか、本当に分らないような不思議そうな目で「たとえば、その他大勢でも、台詞がなくても『向こう側』の住人でしょう、役者であることに変わりないのに『不服』なんてことないわよ、ありがとう」と役を取ってきてくれた事に、ごく当たり前のように、感謝の気持ちを伝えた。

墨字さんはふつと笑って、コイツ、からかいがないあとかほざくので、鉄拳制裁を加えて置いた。

少し時間がたって、スタッフの人がエキストラの人達に説明を始めた。「今回の場面設定は、江戸時代の町の大通りの往来です。一人の少女が、毛鞠を追いかけ、つい、大名行列を横切ります。それを咎め

られた少女は、その場で切り捨てられます」

そこにそのカットのメインである二人が「もちろん切ったふりです。安心してください」「よろしくお願いします」と挨拶をする。軽い冗談で、場が少し温まるようだった。

「皆さんは残酷な光景を前に何もできない町人です。とりあえずなんかそれっぽくお願いします」少しやる気のない指示が来たが、まあこのくらいの方がエキストラ初挑戦には良いのかもしれない。

そんな事を考えていると、撮影テストのセッティング中に、芸能関係らしい男達が墨字さんの方を見て、見覚えがあるのだの、どこかで見ただ顔だの、柄が悪いだの言っていて、腹が立った。この業界の人なら墨字さんの顔ぐらい覚えておいてほしいものだ。そうしたら急に「柀、よく見てろ、面白いもん拌めるから」と墨字さんが言った。けいちゃんとはいえ、ただのエキストラの演技シーンなんかで、面白いもん拌めるってどういう事だろう。

そうして、テストカットが始まった。別に見どころはない。江戸時代の庶民が大通りを往来していて、途中で蹴鞠が転がって、少女が追いかけて、運悪く大名行列を横切って、悪役が少女を切り……

切りかかろうとした瞬間、悪役がエキストラの見事な「ドロップキック」を食らった。

場面は完全に凍り付いて、監督も、カメラマンも、スタッフも、他のエキストラも、時が止まったようだった。ただ唯一墨字さんの笑い声が、大きく響いている。拌める面白いもんってコレの事を言っているの？

それでもエキストラの演技は終わらない「大丈夫？」という少女への優しい口調での語りかけがソレを表していた。少女は「はい……でも私、殺される役」と言ったあと、直ぐに泣き崩れてしまった。

ここでようやく、エキストラは「夜風景」に戻って来たようで、「ご

めんなさい、間違えました」と謝った。けいちゃんは完全にあの瞬間、あの空間、あの大通りに没入していた。

カメラマンは「間違えたところじゃないよ?」と困惑した口調で、言ったと思うと、周囲の制作スタッフは直ぐに慌てたように監督に「ス、スミマセン! あいつすぐ外してきます!」とけいちゃんを外そうとしている。

コレ、斡旋したウチに、迷惑料の請求とか来るんじゃないかと私が、あたふたと慌てていると、なにかに感心したかのような口ぶりです。とりあえず、そのままがいいよ」と監督が口にした。すると直後「すいません、私、女の子を見殺しになんてできないわ、何か他の方法ないんですか?」と食い入るウチのエキストラの姿があった。

周囲のスタッフが当然「エキストラが、何を」と言いかけているそばから、その言葉をさえぎるように監督自らが立ち上がって、こう言い放った。

「ないよ、役者にとって台本は絶対だから『少女を見殺しにする人間になる』それが君の仕事だよ」と淡々とだけれど、強い信念を持って言うてのけた。

そんな光景を目の当たりにしていた墨字さんは『他人を演じろ』良い勉強の場だろ?」とまるで、こうなることが分っていたかのような口ぶりで、言っている。いや、他所の現場であなた……メチャクチャじゃん。と思ったけれど、あの迫力の演技はやっぱり凄かった。でも、この仕事取ってきたの私だから、絶対に後で方々に謝りの連絡をしないといけないと思うと、こっちも「ドロップキック」を食らった気分になった。

町人A、主役を食らう

開口一番に「納得、できないわ」と本当に怒った声で、私たちに向かって言い放った。念の為に「何が……かな？　けいちゃん」と一応尋ねてみることにした。

彼女の言い分はこうだ「女の子が目の前で、殺されようとしているなら、助けるのはどうぜんでしょ！　そんな当たり前の事をしないのは、私に変な人みたいじゃない！」というものだった。理屈自体は通るけれど、明らかに自分がエキストラだということを分っていない。とりあえず、相槌は打ってみたけど、どうしようか？

周囲からは、先ほどの言動のせいで、明らかな陰口が聞こえて来る。こつちに、聞こえてくるように喋っているのは腹立たしいけど、彼らの心情も正直分ってしまう。

そんな声に「私に変なの？」と少し怯えたトーンで、けいちゃんが尋ねてくる。私はかなり言いよどみながら、何とかフォローした。ちよつと、個性的だのなんだのと言っていると、墨字さんが力強く「変じゃねえよ」と言っただけで続けた。

「もし、あの場面に、本当に立っていたら思わず、手が出ちまうその感情はわかる。ただ突っ立っている、他のエキストラより100倍真つ当だ。だが、それじゃあ「江戸時代の町人A」じゃあねえ！　いつものお前だ。「町人A」になれない限りお前は役者じゃねえ、素人だ」その発言で、再度、火が付いたようで、けいちゃんはやる気になつたようだ。ただ、素人と言われたのが相当悔しかったのか、墨字さんにロリコンだのなんだのと言って、再度口喧嘩になってしまった。

改めて、テスト撮影の準備が始まった。エキストラは並べられて、どうやらまたけいちゃんに、陰口を言われているようだが、気にしてはいないようだ。

準備が整い、テスト撮影のカチンコが鳴った。その瞬間、切りかかろうとした悪役にまたけいちゃんが、身を乗り出して『「ダメ」』と大声で止めに入ろうとする。ああ、さつきと同じことが起きちゃう。

ただ、さつきの蹴りのお返しとばかりに、模造刀が振られるが、寸での所で回避して見せた。傍から見れば凄い運動神経だが、この運動神経でまた同じことが起きたらと思つた矢先、少女の前で身を挺するように、手を広げて座り込んでこう言つた。

「お願い……！ この子を助けて！」と余りに真剣に懇願した。

その後、当然カットがかかり、撮影は一時中断となつた。向こうの方で、監督達が集まつて、どうするか話し合つている。まだ、処遇が決まっていないのが不思議なくらいなのだけど、それはともかく、本当にとんでもなく、けいちゃんが落ち込んでいた。自分がした事がどれだけ、迷惑をかけたことなのか分つていて、役者としてちゃんと出来ると思つていた自分を恥じていたようだった。

それでいて、もはや周囲の人達は陰口というよりも、何故自分から場面を壊しに行ったのにこんなにも落ち込んでるのか、分らないという事を言い合つていた。行動原理が不明な不思議な者を見るような目で、彼女のことを見ている。

しかも墨字さんはそんなけいちゃんを煽りに煽っている。役者じゃなくて、素人さんだとか、どうだこうだ言つてる。本当に落ち込んでいるようで、全く反論しようとしなない。

少し時間を置いて、けいちゃんは語りだした。「体が勝手に動いてしまうの、あの子の姿が妹と重なつて、どうしても見殺しになんて出来ない！ したくない！」

その真剣な語り口から、私はある合点がいった。ああ、そういうことか。あの三時間のCM映像を食い入るように見ていた理由は、自分が演じていたのが、役と違つたから。けいちゃんはきつと体験したことが、ある過去しか演じられないんだ。つまり自分自身しか演じることが出来ない。だからあの時「父の日」に「娘の顔」ではなく、亡き母親を思い出しながら「姉の顔」をしている自分に違和感を覚えたんだ。これはどうすれば良いんだろうか？

そんな疑問を覚えた時、墨字さんがどうすれば演じられるか？ と

いうのをけいちゃんに教え始めた。

「お前は、最初から何か、勘違いしてんだよ、あのガキは、お前の妹じゃねえ。お前の家族は、今この江戸の町にいて、普通に暮らしていて、お前の帰りを待っているんだ。あそこでアイツに逆らってみろ、お前だけじゃねえ、最悪一族郎党、お前の兄弟まで、皆殺しだぞ、なあ、夜風、もつと世界を、他人を、自分を知れ、それがお前の役者の仕事だ」

それはある意味、簡単な話だった。というか演技をする者ならごく自然にしていること、自分と演じている役を別に考えて行動すること。誰だって出来るような技術。しかも、時代劇というある意味、別世界で、エキストラで、自分を演じるという事の方が、難しいような事だ。

ついに本番が始まった。私は流石に、もう外されるだろうと思っていたけれど、何故か、けいちゃん混みでの流れになった。周囲のスタッフも何故なのか、ざわめきが起きているが、とにかく始まった。

私は心配で、主役の演技そっちのけで、ただのエキストラである「町人A」を見ていた。いや、見ざるを得なかったという方が正しい。その顔つきは本当に、今まさに良心の呵責に苦しみ、それでも逆らうことなど出来ない、一般庶民の悲哀の表情をしていて、主役を睨み、歎き、耐え忍んでいた。ふと、視線を左腕の先の方に向けると、何かが滴り落ちてくる事に気づいた。「血」だ。きつと、あまりの感情の高ぶりから、強く握りしめられた拳に爪が食い込んで、血が滴り落ちてくるんだ。

「カット!! カット!!」と監督が声を荒げている。撮影はまた止まった。今度は何故止まったのか、分っていない人も多くて、何故「NG」が出たのか不思議がっていた。中には、けいちゃんが、何もしていないのにとという者までいた。

スツとけいちゃんは、切られて倒れた少女に近づいて、少女の顔を優しく撫でながら「ごめんね」と涙ながらに囁いた。周囲がその様子

を見て、まさか模擬刀が、子役に本当に当たったんじゃないか、本当に死んだんじゃないかと困惑し始めた。

すると子役がパチつと目を開け、小さく「あの……」と言い、けいちゃんの反応に困っている様子を示した。当然、周囲はホツとして、生きていることの安堵と死んでるわけなんかないと冗談を言い始めた。ただ、何人かにはアレが、芝居だったという事が信じられなかったようだ。

そしてけいちゃんは「ああ……そうか、これお芝居だものね」と現実を思い出し、ニツコリと笑って、胸をなで下ろしたようだった。

カットをかけた監督が、その仕草を見て、咄嗟に「町人A」の名前を尋ねようとした瞬間。墨字さんが走り出した。「上出来だ！ 帰るぞ！ 夜風、お前はもう用無しだとき」そう言っ、無理やりけいちゃんを抱きかかえて、スタジオ「大黒天」の車がある方に向かった。私もこれは不味いと思い、即座に車のキーを取り出して、動かせるように、いや逃げ帰れるように車を移動させた。セツトの中の大通りを運転するのは、流石に怖い、逃げ帰れないのも怖い。

監督が墨字さんに向かつて、駆け寄って何か尋ねていたが、即座に車に急いで、乗り込んで来た。墨字さんは「すまん監督！ 埋め合わせは必ず!!」と言っていたが、絶対に、埋め合わせをする気はないだろうなあとは思った。とにかく、セツトの中の舗装されてない道をなかなかの速度で走らせるのは流石、墨字さん、常識といったものが欠如している。

ただ私は、とりあえず、この現場でのお詫びを送らなければならぬ、けいちゃんのいま着ている着物も返さなければいけないと考え、どうしよう、違約金が発生すると思うと頭が痛くなった。そもそも、エキストラの違約金なんか聞いたこともない。

ただあの、少女を見殺しにするけいちゃん、いや「女優」夜風景の不条理に立ち向かえない自分の不甲斐なさを、唇をぎゅつと噛み締めたあの表情を、他人を見捨てる悲しみから強く強く握りしめた拳か

ら血が垂れていく姿はとても美しかった。

ジヨハリの窓

車で、事務所に帰るまでの一時間弱の移動中、その間けいちゃんは一言も喋らなかつた。まるで、さつきまでの芝居の世界を未だに漂っているような、あの「見殺し」にした感情がまだ残っているような、そんな雰囲気、ただボウッと窓の外を眺めていた。

事務所に帰ってから、着替えを済ませたら直ぐに、まるで吸い寄せられるように窓際に移動して、外を眺めながら、何かに対して考えを巡らせている様子だった。その横顔はとても綺麗だけれど、少し不気味にも見えた。

墨字さんはそんなけいちゃんを見て、「とりあえず、カメラを回しとけ、ありやあ長くなる」と言つて、ノートパソコンで何か操作し出した。私はその指示はちよつと冷たいんじゃないかと思つたけれど、結局従う事にした。今度は三脚を用意して、撮影を開始した。正直言えば、この横顔は撮つておきたい気持ちがあつた。まあ、外部に漏らすような物でもないし、事後承諾でも問題ないかという気持ちで、撮影を開始した。

とりあえず、前みたいに私が撮影のために、その場に入らないといけないわけではないから、先ほどの現場に謝りの連絡を入れ、勝手に持つてかえつてしまった衣装一式の返却の手続きをしていたら、その光景を見ていた墨字さんが「黒山墨字の名前を出していいから、監督に埋め合わせの連絡をしたいと言つていと伝えてくれ」とちよつとあり得ない事を言つてきた。

ああ、やつとこの人にも社会常識というモノが、身について来たのだと感心していると「それで、ウチの馬鹿役者が、反省したいというから、あの飛び蹴りをしたシーンと身を挺したシーンと最後のNGになつたシーンの録画データを送つて貰うように頼んでくれ、三時間は反省させる為に、アイツに見せたいから」と続けた。

感心した私が、馬鹿だった。この人はただ単純にあの録画データが欲しいだけなんだ。そんな横暴は許される筈がないと思つたが、「監督」黒山墨字の名前と埋め合わせするという事実は案外強力だったよ

うで、割とすんなり要求が通ってしまった。ただ、あの役者について、話ができるならという条件が付いてきたが……とりあえず、約一週間後に話し合う事に決まった。あまりにも、上手く話がまとまり過ぎて、驚いてしまう。今回のエキストラの件も、ただ無報酬になっただけで、簡単に話がまとまってしまった。時たま、黒山墨字という人のネームバリューの大きさに驚いてしまう。普通、こんな要求は通らない。これで、仕事を真面目にこなしてくれれば、ウチもだいぶ経済的に楽になるのに……

そんな事務手続きをし終わっても、まだけいちゃんは外を眺めている。それから随分と時間が経って、結局あれから三時間、夕暮れになった窓辺から、まだ動こうとしない。

もう、流石にほっておけない、墨字さんに相談を持ちかけようとするけれど、適当に眺めが良いから見てるんじゃないか？　なんてふざけた事を言うから、そんなことじゃなくて、ショックだったってことぐらい分って下さいよ、それで一緒にフォローしましょうよ！　と持ちかけたけれど、アイツはあれくらいで、ショックを受けるタマじゃないと言いきられてしまった。

違う、そうじゃない、エキストラを外されたことじゃなくて、もっと根本的な問題について、そう、けいちゃんの芝居での集中力は本当に異常だ。きっと彼女の目には、お芝居の世界が現実と同じように変わりなく、見えてるんだ。だとしたら、あの時のあの、悲痛の感情が、今もまだ抜け切れていないと思う。けいちゃんの演技は多分「メソッド演技」という演劇法に分類される筈だ。それは五感を駆使して「過去の感情の記憶」からリアルな感情、演技を引き出すもの。それは時として、演技を圧倒的なりアリティを持って表現される武器になる。

ただ、その「代償」に役作りのために、自己の内面を掘り下げる必要がある。自分自身の過去の体験を思い出すとき、過去のトラウマを精神的な負荷を引き出して、結果として情緒不安定になることもある。これは諸刃の剣なんだ。

私は言いたくはなかったけれど墨字さんに「不眠症に、薬物依存、ア

ルコール依存、役者が役に溺れていって、心が壊れていくのは珍しくないって、分ってるでしょ……」と何とか気持ちを絞りだして伝えたら「うん、だから？」とまるで、気にしていないかのように言っただけだ。流石にコレには頭にきた。

私はこの怒りを出来るだけ抑えて「いくら自分の夢のためだからといっても、あの子が壊れても良いと思ってるなら、本当に許しませんよ」と精一杯のこの感情を伝えた。

墨字さんは、目線を逸らしながら、何かを思い出すように、自分の審美眼を信じるように「ったく、だから言ってるんだろ……あいつは、そんなタマじゃねえよ」と呟いた。

そんな時、突然けいちゃんが話しかけてきた。今の会話が聞こえていたのだろうか？ そう思ったが、どうやら違うようで、窓の先を指さして不思議なことを言い出した。

「あの学生服を着て、二人で歩いてる男女、きつと両思いなのよ、でも距離感的に、お互い素直になれないんだわ、あのスーツを着て、走っている人は、きつと取引先に遅刻しそうなね、多分よく上司に怒られてるんだわ、あの人は、下着だけ着て、のぼり旗を付けて……一体何を考えているのかしら？ 全然わからない、聞いてくるわ」と、窓の外にいる人達の心情を読み取ろうとしているようだった。私は急いで、いや変な人には声かけないで、危ないから、と言って聞きに行こうとするけいちゃんを止めたが、アレ、シヨックを受けている様子は全然感じてない。もしかして、私の勘違い？

何とか聞きに行くのを止められた、けいちゃんはこう続けた「黒山さん、この世界にはこの窓から見ただけでも、本当にいろんな人がいるのね……私は、今日のような経験をしたことがない。そんな役を、人間を、理解もできない。だから演じられるはずがない。演じたくもない、そう思っていた……そう思っていた筈なのに、黒山さんのあの助言で、私は台本通りの少女を『見殺し』にする人間になっていた」墨

字さんは、ああ、とうなずく。

私は「けいちゃん、それはあくまで、お芝居の中の話で気にすることな……」とフオローを入れようとしている最中に、けいちゃんは割り込んで喋り出した。

「私、知らなかったの、今まで『昔の自分になる』ことを『お芝居』と言うんだと思って、勘違いしていた。だから、知らない、分らない感情は演じられないと思っていたの、でも違った、だって私は、私がこんなにも『酷い人間』なんて、今日の今日まで、まるで知らなかったから、私の中にはまだ私の『知らない私』が眠っているんだわ」と言っ
てのけた。

墨字さんはニヤリと笑って「正解だ、夜風『メソツド演技』だけが、お前の武器じゃねえ、お前はまだ自分が何者かを知らない。芝居を通して、それを探せ、探し続けろ、俺が手伝ってやる。今日からそれが、お前の芝居だ、夜風」と楽しそうに言った。

ああ、墨字さんの狙いは、初めからコレだったんだ。それは「ジョハリの窓」という概念、人には「公開してる自分」と「隠している自分」がある。それと共に、「自分は知らないが、他人は知っている自分」と『誰にも知られていない自分』という四つの窓がある。

その最も気づきにくい一つの窓をけいちゃんは今日、開けたんだ。けいちゃんはこれでもう止まらない。彼女はもう「芸術家の本質」に目覚めたんだ。自分を通して、役を、他人を探求する「不知の知」の喜びに……

ちなみに、後でけいちゃんに今の今まで、カメラを回していた事に気づかれて、物凄く拗ねられた。墨字さんが、自分を「俯瞰」するために必要だからと言っていたが、この時は聞く耳を持たなかった。これは、ウエブCMの時も撮っていたことは、言わないでおこうと私は勝手に決意した。

偶像の天使

スタジオ「大黒天」の外観はかなり特徴的で、前衛アートのような建築と一階部分が割と昔ながらの「黒の湯」というお風呂屋さんで構成されている。一度見たら、なかなか忘れられないような建物だ。この物件の持ち主は一階で銭湯を営む夫妻の物なのだけれど、多分利益が出ないだろう値段で、銭湯を営業しているから、どうも立地や建築構造含め、趣味でやっているんじゃないかと思う。実際、ウチのスタジオそのものは二階から上のかんりの広さを使っているのに、本当にこの値段で良いのか？ と疑問に思うような値段で借りられている。まあ、この物件を借りているのは墨字さんだから、やはり「監督」黒山墨字の名前のお陰なのかとも思うとやはり凄い。

ちなみに、何故ここを選んだかという事を昔、聞いたことがあるのだが、仕事場の徒歩一分圏内に銭湯があるのが、クオリティ・オブ・ライフ（QOL）を飛躍的に上昇させるとかなんだか言っていた。つまり、まるところ、自分が銭湯好きなだけらしい。やっぱりさっきの考えは、無しだ。まったく凄くない。

ある日、けいちゃんが学校帰りに、双子のレイちゃんとルイくんを連れてやってきた。なんだか深刻そうな顔をして、相談があるという。それなら、墨字さんが銭湯で聞いてやるとかなんとか言い出して、結局一階の「黒の湯」にみんなで行くことになった。まあ、当然混浴ではないから、話を聞くのは私だった。

驚くことに、相談内容はCMでの「お金」についてだった。まあ、そこは事後承諾になったから聞きづらいのかと思っていたら、受け取れないという物だった。余りに高額すぎるし、あの時に、演じたのは「父親」を思っただけでシチュエーションを作る芝居ではなく「弟妹」を思っただけで演技だったからという理由だった。

本当に、この子は妙に達観していたり、プライドが高かったり、物を全く知らなかったり、本当に変な子だ。それに、CMでのギャラは正当に仕事した証だし、高額といっても6桁に届くような額じゃない。流石に、そんな非常識な対応は絶対に出来ない。此方も仕事とし

て行った以上、正当なお金は納めてもらわないと、そこに「責任」が発生しない。そもそも来月にはネット配信が決まっているのに、いまさら此方から取り消しなんて契約上できない。ということ言った。

そんな、現状を見かねたのか、レイちゃんが至極もつともな事を言い出した。

「ゆきちちゃんの言う通りだよ、お金貰つときなよ、お姉ちゃんは真面目すぎるんだよ、最近だつてカフェのバイトクビになって、今は新聞配達の仕事だけなんでしょう！」

それに、けいちゃんは元氣なく、返事するが、追撃するように「最近、お姉ちゃんだけ、ご飯のおかず一品少ないでしょ！」と昔のドラマのような貧乏話を繰り返して、けいちゃんは明らかな嘘で「そ、そんなことないわ」と返すが、どうしても分かりやすい「演技」は出来ないのかと思つてしまった。

隣の男湯から、墨字さんの馬鹿でかい声が届く。

「夜風!!」あれを『商品』として、満足して買った、奴らつまり会社がいるんだぞ！ お前はそいつらに『価値のないものを売ったから金はいらねえ』つて言つてるのか！ ケジメと責任の付け方、間違えてんじゃねえよ、夜風！」先ほどの会話はどうやら丸聞こえだったようだ。にしても本当に声がでかいし、うるさい！

その後も壁越しの大声は続いた。墨字さんは「お前だけが、演技が上手くできなかったから辛いのか？ 悔しいのか？ お前に、あの時あんな芝居しか、演じさせられなかったのは監督の俺だぞ、コラ！

俺たちは、そういう汚くて、納得できない金で、生きていけないといけねえんだよ！ その納得できない金は、歯食いしばつて、使えよ！
それが『プロ』つてもんだ、わかつたかな？ 『素人』さん!!」と言つている事は割と真つ当なのだけれど、その言い回しや煽るような態度が、物凄く鼻についた。

それに、流石にけいちゃんは怒つたのか「ちよつとアイツ、沈めてくるわ……」と言つて、その恐ろしき運動神経を使って、男湯と女湯の間の壁を本気で乗り越えようとしている。いや、四メートル以上はある壁の天辺に指がかかつて、身を乗り出す事に成功したようだ。そ

の卓越した運動神経もそうだが、裸を見られることにあまり抵抗がなさそうなのは、頭に血が上っているからだと思いたい。

けいちゃんは「分かったよ、次からちゃんと演るから早く、仕事させてよ!」と言うが、それに笑いながら「そろそろ、自分の仕事は自分で持つてこい!」と大声で墨字さんが答えた。

すると、さすがに、このお風呂屋の店主が乗り込んで来たようだ。「うるさいんだよ! 黒山! 家賃上げるよ!」とコレまた大きな声で聞こえてくる。それに墨字さんが「ごめんなさい、もうしません」と謝っているのも聞こえてきた。流石のあの人も大家さんには逆らえないようだ。本当に、いいぎまだ。

ただ、けいちゃんは「自分で、仕事を持つて来いってどうするのよ……!」と悩んでいるようだったが、レイちゃんはボソッと「お姉ちゃん、最近楽しそう!」と呟いた。

お風呂から出た後、すぐ上にあるスタジオに移動した。いま、けいちゃんはそこで、私が「買ったのではない」猫の口元を模した可愛いらしい絵柄のマグカップで、お茶を飲みながら、私の説明を聞いている。ちなみに周囲では墨字さんが、子供達と遊んでいる。撮影機材を壊さないか心配だ。まあ壊すとするなら、墨字さんの方なのだろうけど。

さて、私が喋った内容は、ある意味役者なら、避けては通れない道「オーディション」についてだった。

流石のけいちゃんもそれが、どういうものか? くらいは知っていた。彼女曰く、スターズで、受けたことがあるらしく、自信満々だったけれど、なぜか落ちてしまったから、なんだか良く分からないモノで、難しいと捉えているらしい。流石に、難しいとは思ってるんだと少し安心した。

それを聞いて、私は解説を続ける。殆ど基本的な事柄の説明で、簡単に要約すると、「役者」という職業は基本的には「オーディション」によって、他の「役者」さん達と競い合って「役」を勝ち取って「仕事」を貰うという話だった。

けいちゃんは、前向きに「オーディションを受けたい!」

CM

の時みたいにあの人のコネで、お仕事もらうのはムカつくし！」と素直に意気込んでくれた。

その前向きさに、優しく返事をした後、後ろを向いて呆れながら、仕事道具で遊ばないと「三人」を叱った。

墨字さんは完全に、遊び遊ばれている。いやまあ、あの厳つい顔で、子供受けが良いのはある意味凄い。たしか、どこかの評論家が子供に懐かれるのは良い監督の証拠だと言っていた気がする。いや、この人の場合、単に精神年齢が低いだけか……

そんな、墨字さんが急に真面目な顔をして「ちょうどいい、テレビをつけてみる夜風」と言った。テレビでは、ちょうど映画「デスアイランド」制作発表記者会見が開かれていた。確か、原作が漫画で、なかなかの売れ行きのデスゲーム物だったと思う。

なんでもない制作発表記者会見、そこに、急に「彼女」は現れた。客席から、突然登場した「彼女」は、カメラの端々を飛び回って、幼く、無邪気で、いたずらで、それでいて可憐であった。それが、いかに、観客を魅了するか、理解しているからこそできる振る舞いだった。

自分自身の役割を、研鑽された技術を、スターズの戦略で作り上げられた、可愛らしさの象徴のような存在、天使のように、という言葉が陳腐にならない美しさが、そこには在った。

偶像の天使「百城千世子」

舞台上上がる僅かな戯れの時間で、その場にいる人々、全ての視線を釘付けにした。

そんな、驚くべき光景が、今まさに、テレビで放送されていた。それを食い入るように見ているけいちゃんに、墨字さんが煽るようにこう言い始めた「スターズ『女優』百城千世子、まあ今一番売れる若手『女優』だな、お前達の世代の代表格だ、夜風、コイツをどう思う？」そう尋ねた。

可愛らしい子供達は、それぞれに率直な感想を言っている。まあ夜

風と呼ぶのだったら、この子達も反応するだろう。ともかく、けいちゃんはこう言った。

「一瞬で私達を夢中にさせた、綺麗、とても綺麗……なのに顔が視えない」と相変わらず独特な言い回しで彼女について述べた。

私はハタと気が付いた。あ、墨字さん、この映画にけいちゃんを送り込む気だ。流石に私はいかにそれが困難か、いくら実力があっても、スターズから引き抜いてきたけいちゃんはオーディションに出しても、意味がないことを伝えようとしたら、その言葉を遮ってけいちゃん、いや夜風景という『女優』が「私、この人に会ってみたい」と自らの意思を示した。その言葉に墨字さんが「ああ、俺が手伝ってやる」と真剣に答えた。

面倒な事になったけれど、夜風景という『女優』が自らの意思を示したのなら、仕方ないかと妙な諦観を覚えた。

ちなみに、後日、CMによって入ってきたお金で、みんなでお洋服を買いに行った。女優さんなら、ファッションに気を使えないといけないという建前で行ったけれど、真の目的はけいちゃんという着せ替え「人形」で遊ぶことだ。この子は、絶妙にダサイ服を着ても様に成るから面白い。ただその光景を見ていた、墨字さんが本気で、センスのいい服を見繕ってきたから、逆に引いた。あのヒゲで、センスがいとかキモイ！ それと、反則的にかわいい子供用の着ぐるみ姿のパジャマが目に入った。見つけた瞬間、猛烈プッシュして、買わせた。なんなら自分用のお揃いも買った。かわいい。

12個の椅子を巡って

とにかく本気になったのなら、オーディションについての下調べくらいはしなければならぬ。まずこの作品は、原作が漫画である「デスアイランド」という無人島に漂流した、生徒たちが、最後の一人になるまで殺しあうという分かりやすいデスゲーム物。

制作は全面的に大手芸能事務所「スターズ」が主催の映画。原作から人数を分かりやすく24人名に絞って、設定通り学生が演じられる若手俳優を起用するらしい。そのうちの半分、12名は「百城千世子」を含めた「スターズ」の俳優が起用される。残りの半分、12人は一般のオーディションが開催される予定らしい。

謳い文句として、「スターズ」は、まだ見ぬ才能を求めています。私たちと一緒に、映画をつくりませんか？ というモノだ。勿論これは、映画の宣伝を兼ねているのだろう。大々的なプロモーションの一つに過ぎない。

しかも、デスゲームという役割の関係上「スターズ」の俳優達の引き立て役になるだろう事は明らか。でも、この規模のエンタメ大作に「名前」が出ることはとても大きなチャンスではある。自分の元に、回ってくるチャンスを利用するのは当たり前、利用できるなら、なんでも利用するぐらいじゃなきゃ、この業界じゃあ、何者にも成れない。

墨字さんが言うには、けいちゃんは一度「スターズ」の数万人規模の新人俳優オーディション、その最終審査まで残っているらしい。だから、彼らが重要視する容姿やカリスマ性、清潔感に関しては、まず問題ないと考えて良い。故に、一次審査の書類審査と二次審査の短時間の映像審査まで、なら十中八九、通過できると言う。ここまでの理屈は通っている。

ただ、問題なのは「スターズ」主催だという事、その最終審査で落とした相手を、此方に引き抜いたという事。それだけで、真正な評価はしてくれない可能性は高い。書類審査の段階で、弾かれる方が普通だと思うが、墨字さんがその点に関して「大丈夫だ、俺が何とかしとく」という。いや、なんとかってなんだよ……となったが、逆に言

えば、落ちる場合は一次審査の書類審査で落ちる。それなら、コストはあまり掛からないと割り切っておこう。

だから、問題は三次審査の演技審査だと聞いたときは驚いた。それは最も得意なのでは？ という疑問が素朴に湧いた。ただ、その後に墨字さんがけいちゃんに言った問いはかなり衝撃的だった。

「お前、今までで、一度でもいいから、一人で芝居を『まとも』に演じられたことがあったか？」けいちゃんは少し考えて「ないわ」と真顔で言った。私は反射的に「え、ないんだ!？」とかなり驚いてしまった。

墨字さんは何故かその答えを聞いて少し微笑みながら「役者を俳優を天職だと思ってる、いや信じてるのはお前だけじゃねえ、みんな死に物狂いで来るんだ、今までの演技通りでいいと思うなよ、夜凧」こう言った。

約一週間後、スタジオで墨字さんとけいちゃんの事を事務作業をこなしながら、待っている。先日の時代劇の監督に、埋め合わせをする二人で出かけたのだ。私が付いていなくても大丈夫か、心配だ。特に墨字さん。

ちなみに、一次審査の書類審査は落ちるなら、落とせと、スタジオ「大黒天」所属である事が、しっかり分かるように、事務所としてきちんと送っておいた。これで、落ちたら、ガツカリするだろうけいちゃんの前で、誰かさんが「大丈夫だ、俺が何とかしとく」って言った事をイジリまくってやろう。

そんな事を考えていると二人が帰ってきた。表情から察するに、なんとかはなつたようだった。二人から話を聞くと、どうやら飛び蹴りを食らわせたしまった、俳優さんも同席していたらしく、どうにか穏便に済ませられたらしい。まあ、墨字さんがけいちゃんに首輪をしていなかったからなら、言っていたから常識的な謝り方ではなかったのだろうけど、深堀すると面倒なだけだから、スルーしておいた。

ただ、墨字さんがあの監督から聞いた情報からすると、デスアイランドの書類選考はもう殆ど終わっていて、落とされているなら事務所所属の人間にはいわゆる「お祈りメール」という落選通知が届いているそうだ。

どうやら、本当に「何とか」したらしい。一次審査で、アリサ社長に落とされて、当然と思ってたので、一体どんな不正をしたのかを聞いたら、特には何もしてないらしく、ただ真正に評価するように「お願い」ただけだそう。いやいや、どんな「お願い」だよ。まあ、これで誰かさんをイジれなくなっちゃった。

それで、二次審査の短時間の映像審査、これは難しいモノじゃない。ある程度、顔立ちが整っているように映っていて、書類審査に書いてあるプロフィールが一致して、ちゃんと日本語が発声出来ていれば、落ちることはないだろう。

ただ、その程度のモノを墨字さんが、ちゃんとした撮影機材を用いて、けいちゃんを撮り始めたから、驚いた。殆ど、ただの自己紹介、名前と年齢と出身をいうだけ、それに意気込みを言っしまえば、終わりのもの凄く短い動画。

それを二人して、何度も何度も、真剣に撮影している。極端な話、私に丸投げするような、15分もあれば、充分すぎる仕上がりになるようなモノに、異様なまでの執念を持って行っていた。その光景は、あまりに異様だった。既定の30秒程度の映像にどうして、そこまで拘るのか、分らない。何テイクも何テイクも行い、そこでの表情や声のトーンや意気込みを、少しずつ変化させている。

極端なまでのオーバーな演技やあえて、NGが出るだろう演技にまで、手を伸ばして、帰ってから、殆ど休まず、ぶっ通しで、撮影を行った。終わった頃にはテイク数は優に数百になっていただろう。何故そこまで演ぶの？　なんでそんな事をしたのか？

けいちゃんに聞いてみたら「今日会った監督さんと俳優さんに教えてもらったの、自分に求められている芝居とは、何を演じるべきかとは、そういう事を考えて『理性』で芝居をするものだって、それが私は『本能』で芝居をしてる。だからその力がコントロールできるよう、頑張ってみたの」と言った。そして、明日からも頑張ると言っ、帰っていった。

その後、墨字さんから大量な録画データを受け取ったが、採用とされていたのは何故か、3テイク目のモノだった。

流石に意味が分らない。そう聞いたら「お前さあ『お願い』をする前に、努力をするのは当たり前だ、それに3テイク目で、駄目なら一億テイク目でも駄目だから、ソレなんだ、夜風も了承ずみだ」と軽く言つてのけた。

ああ、そうか、この人のいう『お願い』はこういうモノなんだ。私は、誰かさんの事を誇らしく思った。

約三週間後、けいちゃんは当然のように三次審査まで、勝ち進んで、いよいよ今日、演技審査。そわそわしながら、事務所で数時間待っていると、けいちゃんが沈んだ声で電話をかけてきて、上手いかなかつた事を伝えてきた。

私は、ただただ聞いてあげる事しかできなかった。自分の事じゃないけれど、自分の事以上に悲しくなった。助けになつてあげれない自分が嫌になつたりもした。

ただ、数日後、ウチの事務所宛てに通知が届いた。何故か「合格」だった。そうたつた、12個しかない椅子を彼女は勝ち取つたんだ。私は、本当に嬉しくなつて、けいちゃんに急いで、受かつた旨の電話をかけた。この時の彼女の声のトーンは変だつた。事実を受け止められないというより、評価された事が悔しかつたようですらあつた。

即興の殺し合い

私は、ノートパソコンにある、合格通知をみて、ただただけいちゃんに凄いなあと、本当に12人にの枠に選ばれちゃうなんて思ってた。そして、けいちゃんに事務所に来てもらって、映画「デスアイルンド」の出演契約についてと合格通知のお祝いをしようとしている。勿論、お祝いが主な目的だ。ただ、墨字さん曰く、この映画の監督と知り合いらしくて、こんな事を言っていた。「まあ今の夜風じゃあ、落ちてもおかしくないと思ってたよ、手塚の奴、思ったより酔狂だなと……」意味深な事を言うが、どういう意味かは、すぐに分かった。

ガチャッと急に事務所のドアが開き「デスアイルンド受かったって……私が……？ 本当に？」と けいちゃんが、肩で息をして入ってきた。私はそう、電話で話した通り、通知が来てたのと喜んで迎えて、墨字さんも「ああ、よかったな、これで千世子と会えるぜ」と微笑んでいる。

ただ、どうも緊迫した声で、「黒山さん、私このままじゃダメだ、どうすればいい？」と受かったのにも関わらず、そんな事を言って、けいちゃんはオーディションで起きた事を語ってくれた。

語り口は訥々と、だけれど何処か妙に迫力のある言い回しだった。三次審査まで、勝ち進んだのは500名もいて、たった12人の枠を求める役者ってこんなにもいるんだと感じたらしい。そして、まとめて四名ずつのオーディションをすることになって、番号順的に同じグループになった人達が、とても仲良く接してくれたという。内容は巨大な無人島のセットで行われて、そこでの芝居だった。設定は、原作漫画と同じ、修学旅行中の飛行機が、嵐にあって、海に不時着して、無人島に漂流したクラスメイト4人が、目を覚ますところが始まり、ただし、エピソード、即興劇で、この状況に応じた自由な芝居をするというものだった。

「ただし、制限時間5分以内に、四人が殺し合いを始めるように演じるという強烈な縛り付きで……」

それで、無人島に漂流した経験なんてないからそんな「殺し合い」の展開についてはみんなに任せるしかないって考えて、それで落ちても仕方ないと割り切って、自分にできるたった一つのお芝居、未経験の「私」を想像したの。それで、修学旅行中の機内が大きく揺れるシーンを思い浮かべた後は「頭が、体が、勝手に」動いていた。

クラスメイトの悲鳴、飛行機の窓の向こうが、海水で満たされる。浸水して、もの凄い、水の力で、方向感覚を失って、いつの間にか意識がなかった。

そして、周囲の雑音というか人の声が聞こえて、間が覚める。どうやら、何処かの海岸、ああ私「生きてる……」と思った。それで、周りにはクラスメイトの3人が、無人島に流されたって言ってる。私には何故此処が、無人島だと断定できたのか分からなかった。もつと、奥の方に人里があるかもしれないのに、周囲の足跡を見るに、たいして歩き回っていないのに、どうして、無人島だと知っているの？ クラスメイトの人達は、目的地とそこからのまでの航路、フライト時間を逆算すれば、無人島が多く点在するエリアだとか、飛行機の上からもこの島は無人島に見えたとか、いうけれど、あまりにも自信ありげに無人島であることを断言しているから、みんなで口裏をあわせて、私を騙そうとしているみたいだった。みんな黙って、顔を見合わせて、どうかしたようだった。

クラスメイトの一人が本気で、怒りだしたり、別の人が私のことを変だとか言うから、私は無人島の奥へ逃げ出した。途中で、転んでしまったけれど、来ないで！ と叫んだら、一番大柄のクラスメイトが、すべて自分たちがやった、みんな殺した、残るはお前だけだなんていうから、私は咄嗟に、木の枝を引きちぎって、彼に殴りかかろうとした。そうしたら、あの怒っていたクラスメイトの子が私を取り押さえ、こんな事を言ってきたの……

「なんで、こんな滅茶苦茶できんねん、みんな……みんな必死やろうに、真剣なのに、人の気持ちがあるにわからんなら、役者なんかやめちまえ！」とその子が泣きながら怒鳴ってきた。その時ようやく

「私」はああ、これが「演技」だった事を思い出したの……

と、けいちゃんはその経緯を教えてくれた。確かに、これは、墨字さんが言うこの監督「手塚」さんが酔狂だといったのも理解できる。この話が本当ならそれはエチュードではないし、演技というには、余りに逸脱したものだ。私は、とりあえず、話が聞き終わったら、映画「デスアイランド」の出演契約についての注意事項をプリントしたものを渡して、本来はこの後大々的にするお祝いのお話を一応切り出した。

契約の注意のプリントに目は通しているが、正直、生気が感じられないし、お祝いは後日にしようかと思っていたら、墨字さんが本当に強引に食事に連れていくとか言い出した。殆ど強引に連れて行ったから、けいちゃんに弟妹のことをお願いされて、仕方なく、迎えに行った。いや、子供たちは可愛いからいいんだけどね。

とりあえず、事務所近くの感じの良い雰囲気のレストランで待ち合わせだった。そこでけいちゃんは項垂れながら「役者じゃなかったら、一体私は、一体何者なのよ……」とボヤいていた。それに墨字さんが適当に相槌を打って、飲め飲めとボトルをコップに傾けている。

私は咄嗟に、「コラアア！ 高校生に何してんじゃー！」と怒鳴った。ただ、よく見るとお酒のボトルとは別に、「ORANGE」と橙色のラベルがしてあるボトル物もあった。流石にお酒を飲ませている分けではないようで、安心した。

それで、みんなに席について、子供たちが色々言っている「お姉ちゃん、映画出られるってほんと？」と可愛く尋ねたり、やつぱり気になったのか「というか、何飲んでるの」と尋ねて、けいちゃんが「オレンジジュース、一緒に飲もう。黒山さんが、奢ってくれるって」と言っていた。「まあ、なにはともあれ、お祝いをしよう！ 結果オーライだよ」と私が言うのと、割と楽しそうに出来上がっている墨字さんが「柎、こいつ雰囲気で、泣き上戸になるぞ、もっと飲ませようぜ」と完全に揶揄っていた。まあ、今日の此処の食事代はどうやら、墨字さんらしいので、このくらいなら可愛いものだ。

そうして墨字さんは「でもまあ、今後の課題が、明確になって良かった」

たんじやねえか？ 欠陥だらけのお前の芝居に足りないもの、その一つが自分を『俯瞰』する力だ」と言った。

けいちゃんは「フカン？」という言葉の口に出して、言ってみたが、漢字が思い浮かばないようだ。それに続けて「幽体離脱みたいなものだよ、演じてる自分を外から、外部から、見下ろし、コントロールする技術だ」と墨字さんは説明した。

その言葉にけいちゃんは少し考えて「酷いわ、私本気で相談してるのに、宗教勧誘するなんて」と言っただけで子供達も「クロちゃんまだおぼけ、信じてるの？」だとか「もしかして、まだ、トイレ一人で行けてないの？」とか、テーブルの料理を食べながら言っていた。かわいい。

墨字さんは大人げなく「夜風家、この連中」とか言っているけれど、一応フオローするように「まあ荒唐無稽な話に、聞こえるかもしれないけれど、役者さんにはそういう技術、空間認識能力があるんだよ、ほんとに」と私はやつと来たビールをぐびぐび飲みながら言った。そんな私を見て、けいちゃんが「雪ちゃんまで、酔っ払い？」と話を信じていないようだった。

墨字さんは、この場での説明は難しいと思ったのか、話を切り替えた「まあ所詮俺たちは役者じゃないからな、お前に教えてやれることは少ない。役者なら、テクニクは役者から盗んで来い。そのために、お前には「デスアイランド」を受けさせたんだ、「スターズ」のトップ俳優達が、大体みんなこういう技術に秀でている。そういう教育を受けさせられてきてる。だからこそ、今やつらと共演できるのはデカイ、特に『桃城千世子』あいつのテクニクは異常だ、盗みがいがある」そう言った。けいちゃんも真剣に聞いている。

「今回のことで、自分に足りないもんが自覚できた、それをその技術を、得たいと思えるようになった、悔しいんだろ、未熟な自分が、役者を名乗れないかもしれない自分が、それだけで、もう十分な戦果だ、夜風、今回の現場で、盗めるものは全部盗んでこい、無念さ、悔しさ、不甲斐無さ、探究心、全部飲み込んで演じてこい、その感情がお前を役者にする」そう言っただけで墨字さんはちよつと、カッコよかった。

ちなみに、みんなで全ての食事を済ませて、レジカウンターで、支

払いをする墨字さんをけいちちゃんが、凄い「尊敬」した目で見つめていた。いや、現金で、諭吉含めた複数枚のお札を出した事が、そんなのかなか……とこの子の金銭感覚が怖くなった。

天使の仮面を盗むには？

今日は映画「デスアイランド」の顔合わせの日だ。誰が受かっているかは、墨字さんもけいちゃんも知らない。あの日の500人のうち、誰が選ばれたのかは謎だ。個人的には、けいちゃんが迷惑をかけたという人達、それでいて、優しくしてくれたという人達が、受かっていたら嬉しい。ただ、それよりスターズの面々が顔を揃えて、集まるということは、勿論、あの星アキラや主演の「百城千世子」に会うということだ。正直、けいちゃんのやる気は、あの天使を目の前で、見たいというモノが幾分かあったので、どんな感想を持って、帰ってくるかは気になるところだ。

事務所に報告に帰ってきたけいちゃん曰く、あのオーディションで、同じグループだった人達は皆受かっていたらしい。これは、けいちゃんが「暴走」したのが、怪我の功名になったのだと思う。まあ、良かった。ただスターズの人達はとても忙しいので、顔合わせには殆ど来れなかったらしい。しかし唯一「百城千世子」は少し、遅れては来たものの、やってきて、もの凄い存在感だったと言っていた。佇まいや表情、発声どれをとっても凄い人だったそうだ。

カメラの前以外でも、あの天使の姿だったというのは、未恐ろしいモノがあるが、それよりも恐ろしいことをけいちゃんが言い出した。その場で、あの「百城千世子」に、自分の演技を見てもらった旨を伝えられ、凄い映像だった、迫真だとか、どうやってやってるのか？と尋ねられ、本音を漏らしてしまったらしい。

簡単に言うと「俯瞰」という事を、幽体離脱という言葉を用いて聞いたから、本人からも笑われて、周囲からも笑われて、謝りながら「いいあの時テレビで見た印象と今の印象がどちらも綺麗だと伝えた後に」「どちらのあなたも、顔が見えない、まるで人間じゃないみたい……」と言ってしまったらしい。

その時、「百城千世子」はけいちゃんに「あなたの芝居はちゃんと人間だったよ、私と違って」と切り返してさらに「幽体離脱が何のことかは分らないけど、こっそりアドバイス、私たち『俳優』の使命は、観

客を『虜』にすること、素顔晒して、ありのままの自然体を演じることを『人間』と言うのならだつたら、私は『人間』じゃなくていい」と微笑みながら、優しい口調で答えてくれたらしい。それが、けいちゃんには天使の「顔」が一瞬だけ、とても怒っているように見えたという。

凄いい、恐ろしい体験をしたというか、そんなこと言ったら、降ろされても文句言えないなあと思うけれど、けいちゃんは何処か、他人の最も「本質」的な部分を見抜く才能がある気がする。まあそれは普通、口に出したらいけないような事が、殆どだから誰も言わないんだろうけど……

さて、そんな件を墨字さんと二人で聞いていたら、墨字さんが幽体離脱の解説というか「俯瞰」というものについて、教えると言いだした。

後日、けいちゃんをスタジオのある部分に立たせて、目を瞑らせた。勿論何故そんな事をするのか、墨字さんに尋ねて「なんの稽古なのか？ 稽古なら普通は台本を読んだりするものなんじゃない」かと文句を言っている。それに墨字さんが「とにかく、文句を言わず、いいからさつさと答えろよ、何が見える？」と尋ねた。

それに、訳も分からない様子で「何を言っているの？ 何も見えるはずないでしょ？ 目を瞑っているんだから」とけいちゃんは真面目に答えている。それに墨字さんが「分ってるよ、その状態でもし目が開いていると想像して答えてみる」と指示した。

それにけいちゃんが「あ、チンピラが見えたわ」と悪ふざけをして、それに「オイ、誰がチンピラだ！ ちゃんと想像しろバカ娘！」と答えているが、本質的にはそれで問題がないので、私は冷静に「ちゃんと想像できてるよ」とツッコんだ。

流石に漫才をしてるわけではないから、墨字さんはこう続けた「まあ、その要領で答えろ、お前の背後には何が見える？」と問いかけると、少し小首を傾げながら「えーっと、資料をの並んだらラックに、デスクとチェア……あ、そうそう、何故かマトリョーシカも並んでた、あれどこで売ってるの？」と続けた。

それに墨字さんはニヤリとして、「そうだ、今、お前の目玉は、お前の背中に付いている、次は、その目玉を天井に移動させてみる、何が見える？」と問いかけた。

けいちゃんはパツと、目を開け、視線を上に向けた。表情から察するに、何かを掴んだようだ。

その反応を見て「よし、この視点が『俯瞰』だ。まあ幽体離脱はものの例えだ、人前で口にする奴らは笑えるだろうよ、だが人間は皆この視点を大なり小なり持つて生きている『私は、彼にどう見られているんだろう』『この服似合ってるかな』とかいう風にな」と言い、さらに続けた。

「その視点が、お前にはほぼ完全に欠けているんだ、まあ此処までくれば、一周回って才能だな。お前の視点は一箇所しかない、その顔に着いた両目だけだ。客観的に自分を俯瞰できないお前が、自分をコントロールできないのは当たり前だわな、当然、千世子は違う、奴は、自分の目玉を使ってない、捨てたも同然だ、その代わりに自分を俯瞰する複数の目玉を選んだ、客観的な美しさだけを追い求めた、自己の視点を排除した、そうだな、お前の言葉を借りるなら『綺麗なのに、顔が視えない』だ。まあ、プロフェッショナルだな」と言っただけだ。「アイツの行動原理は『作品』のため、ひいては『大衆』のため、そのために自分自身を、完全に『商品』として割り切つて生きてきた、まだガキのくせにな、そりゃあお前みたいな野生児と共演させられたら、怒りたくもなるかもな」墨字さんは諭すように、事実を述べた。

その事実を聞いてけいちゃんは、少し戸惑いながら「黒山さん、前に『天使』から技術を盗めつて言つたよね……千世子さんも私にあれば『芝居』じゃないって……私も千世子さんみたいにその『商品』になればいいの」と少し怯えながら聞いた。

墨字さんは「なりたいたいのか？」と問いかける。

それにけいちゃんはハッキリと「私は、もつと……知らない『自分』を演じたい、もつと自由に……」と主張した。

その答えに墨字さんは「でもそれじゃあ、共演者を泣かせ、作品を壊しかねない、いつもの暴走だ、夜風このままいけば、多分そうなる、

分ってんだろ、じゃあどうする？」と言うと即座に「私は、私のまま『天使』みたいになる」とけいちゃんは断言した。

その言葉を聞いて「だから盗めつつてんだ、全部吸収して、取り込んで来い、夜風」と墨字さんはそう言った後、けいちゃんは元氣よく頷いた。

私は「衣装合わせ」が済んだら、すぐ泊まり込みでクランクイン……これは一気に忙しくなるな、けいちゃん……って、あの子達はどうかするんだろう？ と当たり前前の疑問が浮かんだ。結局、あの子達は私が、面倒を見ることになった。仕事としては、流石に通常業務外ではあるが、スタジオに所属して、けいちゃんの面倒を見る以上、コレは仕方ない。

けいちゃんの所の双子の子供達を預かる時に、流石に、この仕事で得られるギャランティの内から生活費に当たる部分は貰ったからコレも、今日から仕事だ、ちゃんと「責任」が有る。

けいちゃんが、映画の撮影で約一か月、いなくなるというのは、子供達にはやはり悲しいようで、弟のルイクンの方は割と別れ際に割とぐずって、けいちゃんも少し泣いていた。そりゃあ、この年頃の子には辛いだろう。私が、すっかりしなくては、だって墨字さんは当てにならない。こんな常識からかなり外れた人が、当てになるわけがない、こんな大人を見本にさせてはいけない。

そうこの時、私は強い使命感から、けいちゃんが帰ってくるまで、この子供達を守らなくては、とそう思わせたのだが、結局ずるずるとスタジオ「大黒天」が終わる日まで、私があの子達の面倒を見ることになった。大変だったけれど、楽しかった。良い思い出だ。

双子、襲来!?

けいちゃん映画の撮影に出て行ってからスタジオ「大黒天」は騒がしくなった。それは映像関係の仕事の量が、増えたとかじゃなくて、夜凧家の双子の子供達、ルイちゃんとレイちゃんの面倒を見るために、この小さな事務所としては、忙しくというか、騒がしくなったという感じだ。

しかし、スタジオ「大黒天」には最低でも彼らが暮らせるだけの物理的な居住スペースは、割とあったので、着替えや日用品なんかもとりあえずは持って来て、置けるだけのスペースも用意した。だから場所的にはあまり問題はなかった。もちろん学校の送り迎えや食事のお世話なんかは、どうしても発生するから、私個人としては時間的拘束はまあ増えてしまった。ただ、墨字さんの仕事の世話をするよりは、幾分か、精神的安定感は違う。勿論、此方の方が安心して行える。

まあこのスタジオは結構立地が良くて、私自身も仕事場に寝泊まりすることが、とても多かったので、けいちゃんが撮影で、出かけてる間は結局、家に帰った事がなかった。それで、特には困りはしないのであまり問題がない。ああ、仕事中心の日々だと実感してしまう。本当に、今借りている、アパートは物置になっている。恐らく、今月のガスの請求額は基本料金だけな気がする。

それはある意味、この事務所の真下にあるの銭湯のお陰で、割と苦労なく、暮らせてしまっているのが原因だ。また事務所にはある程度の家電類の設備もあるので、割と手の込んでいない料理なら作れてしまうのも暮せて行ける要因だった。

これによってか、子供達の方は高い順応性を見せてくれた。夜凧家の子供達はホームシックのような事はあまりなかった印象で、かなり私に懐いてくれた。これがもし違うナイーブな気質の子供だったら、本当に大変だったなと思う。この子達は今いる状況というのを、かなりしっかりと認識できていて、この年齢にしては本当によく教育が行き届いていた。

実際に自分達でも、ご飯を食べる際に、ちゃんと挨拶が出来ていた

り、食べた後には自分の食器は自分で洗うなど、本当に教育が行き届いているのが実感できる。更に言えば自分の事は自分でするという大人でもなかなか出来ない行動をこの年齢で、ある程度出来ているのは単純に凄い。もちろん、年相応な面も多いのだけれど、かなり精神的に大人だと言える。

あと意外な事に墨字さんは案外面倒見が良いことにも気づいた。まあ単純に遊び相手になってるだけではあるのだけれど、子供嫌いではないし、子供と適度に接する距離感をよく理解してる。正直に言えば、当てにはしていなかったが、私がない時間や食事を作ってる時間に、目を離していても、その間に危ない真似をさせないような、配慮はきちんとできる分別はあるようだ。元教職の経験ゆえだろうか？

また、どうやら食文化圏が結構違うようで、私の作るものは比較的美味しいと言って食べてくれる。栄養バランスを考えての、一般的レベルの物はまあ作れる程度なので、普通だと思っただけけれど、夜風家の食事というのはかなり変わっているようで、聞いてると、どうやらけいちゃん自体は料理は上手に作れるそうだが、食材がその腕前に伴っていないらしく、いかに安く作れるか？ をメインに、子供が食べやすいものを……というのが在るというのが、間接的にだが伝わってくる。本当に苦労してるんだなあ……と自分の子供時代も思い出しながら、そう感じてしまった。

それと銭湯に行く時は基本的に墨字さんが、弟のルイくんの面倒見てくれるから、案外ちゃんとしてるなあと思っていただけだけれど、墨字さん曰く、週5で行っていたのが、週7になっただけだ。特に問題がないとの事らしい。前に仕事場の近くに、銭湯があるのが「QOL」を上昇させるとか言っていたけれど、本当にお風呂が好きなのだと、再度認識させられた。でも、少しはエライ……

そうして、あまり問題がない状態で過ごしていた、ある日、テレビで「デスアイランド」公開に関しての予告宣伝のようなものが流れた。基本的には主演である「百城千代子」ちゃんをメインにした内容なのだけれど、その背景にけいちゃんが映っているらしい。子供たち

がものすごく反応している。私はその反応を受けて、けいちゃんを探そうとするが、なかなか見当たらない。

そうしてると子供たちがビシツと、画面の端の方を指差す。確かにけいちゃんだ。いや、こんなピントも合っていないのに、よく見つけたものだ。

そうして口々に「お姉ちゃんが一番かつこいい」だとか「うん、一番美人さんね」とか言っている。墨字さんも「何やってんだよ、録画してねえじゃねえか」と文句なのか文句じゃないのかよく分らないことを言っているが、当然そのような事態には対処してある。すでに「デスアイランド」というキーワードで、テレビの録画機器に自動録画するように設定しておいた。実際に、現在の映っているこの画面もきつちり録画済みだ。故にそのような心配は無用だ。

この後、当然のようにこの映像は、スタジオのテレビで「30回以上」再生されることになる。

途中で、夏休みに入った事も相まって、流石に夏休みの間は大変になるかもなあとぼんやり考えていたが、それほど大変ではなかった。さすが夜風さんところの子供達と言うか、ウチにあるプロジェクターで、映画を見せていれば、本当に熱心に観てくれる。

子供ながら、その審美眼は流石という感じだ。誰が、どのような演技をしていたかだとか、このストーリーは少し無理があるかだとか、このカメラワークがどうだとか、あの伏線の張り方はまあまあだとか、なんかシネフィルのような事を簡単に言い出すからちよつと怖い。いや、まあ私も全く他人の事は言えないのだが……

それになかなか子供達の趣味も面白く、レイちゃんの趣味が結構大人っぽいのも、ルイくんのウルトラ仮面に対する考え方もなかなかユニークだ。子供がどのような風にも物事を見ているか？ というのを知れるのは、かなり面白かったりする。

ただ、自分のことは自分でしているというのが本当に良く出来すぎている。この年齢にしては本当に教育が行き届いているような気がする。いや、本当に行き届き過ぎてる。

途中から、どちらかが面倒を見ているのかわからなくなった。スタジオ

才の掃除を毎日のようにこなすようにしたり、私が担当している部分の掃除に関して口出しをしてきたり、もの凄くしつかりしている。いや流石に、毎日掃除することはないと思うのだけれど、という事を私も墨字さんも思っていたらしく、なんとか伝えようとするが、ルイクくんが「お掃除戦隊双子レンジャーなので」と言って軽くあしらわれてしまう。

ようやく帰ってきたけいちゃんに、出会えた時は本当に助かったと思った。この子達、日に日に、私たちに厳しくなっていく。いやこれが悪さをして、手に終えないだとか、そういうことならまだいいのだけれど、掃除や洗濯や家事なんかについて、至極真つ当な事で、言い負かされてしまうので、大人としてもはや何とも言えない状況になってしまう。夜風家、恐るべし……

ちなみにけいちゃんが持って帰ってきた、お土産は凄まじく痛いT シャツばかりだった。さすがに、これを着る勇氣はない。なんだ、その「I♡RYUGO」とかい奴……

ただ、これらを後に普通に着こなしている、けいちゃんは流石「女優」さん、何を着ても似合ってしまう。悔しいが、かわいい。

彼女は可憐に嘔吐する

事務所に帰って来てから、けいちゃんは「百城千世子」が出ている映像を片っ端から、見まくっている。そして興奮したように、子供たちに「見て見て、千世子ちゃん、綺麗だね!」と同意を求めするように、何度も何度も繰り返している。それに「わかったってば、お姉ちゃん、もう少し静かに」と注意さえされている。

それでもけいちゃんは「お姉ちゃん、千世子ちゃんと一緒に芝居を……」という事を何度となく、子供たちに本当に楽しそうに繰り返している。よっぽど、撮影が楽しかったのだろう。見ているこっちとしても喜ばしい、ああ、かわいい。

ただ墨字さんは「……帰ってきてから、ずっとあの調子だぞあいつ、ちゃんと成長してきたんだろうな」と訝しんでいる。その言葉が聞こえたのか、けいちゃんは「黒山さん、なめてもらっては困るわ、私こう見えてカメラに隠れて、嘔吐したんだから!」と自信満々に言ってきた。

その言葉に、少し黙り込んで「終、解説を頼む」と墨字さんが言うが、当然私には意味が分らない。結局、嘔吐についてというか、撮影全般が、どうだったかという話になった。

けいちゃんは、ある意味、自信満々に、撮影の日々について語りだした。

まず初めに喋り出した内容は、何といっても自在に演技してのける「百城千世子」の圧倒的な演技力についてだった。自在に涙を流すのはお手の物で、それでいて、何処から自分が映っているのか、カメラがどう自分を映しているのか? ほぼ、完全にカメラ位置、画面サイズ、アングルを把握しているから出来る芸当だったという。

千世子ちゃんには見えていたんだ、自分がどこからどう見られているのかというのが、本当にカメラに視点があるように、これが「俯瞰」という技術なのか……とけいちゃんは感じ、現場で見れば、一朝一

夕で身に付くような簡単な技術ではないことは明らかだったそう。

他にもスターズ役者は素晴らしかったらしい。例として挙げるとウルトラ仮面のアキラくんはスタントマンを使用せずに、一気に急斜面を3メートルは駆け登った。その方が、より良く撮れるからという理由からだ。とにかくスターズの役者人が入ると、撮影が本当にスムーズに進んで行くのが実感でき、これがプロというものだ。このを見せてつけられるオーディション組という構図だったみたいだ。

それでもけいちゃんはできるだけ稽古に「俯瞰」する視点というのを持って、なんとか努力してみることにしたという。相手からどう見られているか？ というのを一緒に受かった、武光くんという人に頼んで、スマホを用いて、自分を撮影して、それがスマホの画面でどう映っているかを何度となく、確認して、視点を意識するようにした。

理由はけいちゃんとその次の日、あるシーンで台詞があるからだ。目の前で、初めて同級生が殺されるシーン。その場面を見た時にけいちゃんは「皆、逃げて！」と叫ぶ。それを何度か、一人で、その芝居を反復してみたのだけど、結論として「多分」本番で嘔吐することになるからと平然とけいちゃんは語った。

目の前で、同級生があんな殺され方をしたのだったら、どうしても吐いちゃうと何度想像しても、そうなってしまうみたいで、いくら我慢しても駄目だったらしい。だから何とかしたかった。そのために「俯瞰」の技術が必要だったし、利用できると思った、との事だ。

その本番のシーンで、使われる3台のカメラ、同級生を殺しているのを映すカメラ以外には、全体を映すカメラと私達を映すカメラ、その2つのカメラの位置、画面サイズ、アングル、ソレらに集中して望んだ。演じる自分を「俯瞰」して、視点を増やせ!!!!

「皆、逃げてー！」

本番でけいちゃんは上手く演じたという。理屈としては、どうしても我慢出来ないのが分っているなら、一度よろめき、カメラの外にフレームアウトして、そこで嘔吐すればいい。上手い具合に殺人の

ショックで、よろめいているように見せて、自然に立ち直したように見せれば大丈夫という理屈だった。これはどうかしてる。

嘔吐するという事実がどうしても変えられないのなら、映さなくていいようにフレームアウトすれば問題ない、これは上手く行えた。吐いてしまう自分がどうしても変えれないなら、不都合な事実は、芝居は、見せなければいいだけだ。そうかこれが「俯瞰」する芝居なんだとかなんか、凄まじいことを、狂人じみた事を言っている。

この後、役にのめりこみ過ぎて、本当に気分が悪くなってしまったのだけど、テイクとしてはOKが出たから良かったとサラツと語るのも怖い。その後、休んでいるときにお見舞いに、オーディションで泣かせてしまった関西弁の子、茜ちゃんとなんだかんだ仲直りができたので良かったと楽しそうに言っている。私の演技を素直にスゴイって言ってくれ、あの時、滅茶苦茶にしてみましたのに、本当に優しい子だという。本当に、優しい子だと言うのは事実なのだろうけど、おそらくそれは、けいちゃんの演技に当てられたのだと思う。

また別の場面、殺人犯役の子から逃げ出すシーンで、崖まで追いつめられるけど、下が川になっていから飛び降りるっていう展開。本来は、崖からは飛び降りないで、後から合成で作るのだけれど、カットがかからなかったから……飛び込んでしまった。

「俯瞰」の力をカメラにだけ意識していたら、役に成りきって、つい演ってしまった。これはどうやら、けいちゃんが演りすぎてしまったようで、この勢いのせいで、周囲の人も取り込みざるを得なくなったそう。ああ、周りがけいちゃんに毒されている。

そんな暴走はそれで、周囲に多少影響を与えるのだけれど、やはりこの話の中心に入るのはいつも「千世子」ちゃんだった。だって、あんなにもただただ「綺麗」でいられるなんて本当に凄い。恐ろしいとさえ感じるほどだったみたいだ。

故に、けいちゃんは最後のシーンが演じられるのか、どうか、心配だった。自分が演じるケイコという役は原作にはない、オリジナルキャラクターで、特に序盤は何も活躍はせず、場面に流されるだけの脇役的なキャラクターだ。ただ物語の終盤「千世子」ちゃんの身代わ

りになり、自ら死を選ぶという役だ。

だから、途中まで、ずっと悩んでいた。やっぱり自分は「千世子」ちゃんの身代わりに、死ぬという役を演じられないと思うから、だって自分は「千世子」ちゃんのことを好きじゃないから……と監督の手塚さんに打ち明けると、ある話をしてくれた。

この映画が、一体いくら制作費で作られているかについて、日本映画にしては莫大な約6億円という大金で作られていること、そしてそれだけじゃない、この映画の興行的成功は主演である「百城千世子」に、キャストやスタッフの時間と労力、宣伝コスト回収と期待、それらを彼女は、たった一人で、すべて背負っているんだ。ああも強く、美しく、可愛い、創られた「天使」に……まあ、彼女が「天使」ならそうだなあ、キミは「ブルドーザー」かなあ……なんて冗談を言ったらしい。

「だから演じられないなんて、言わないであげてよ、僕はもう……見飽きたんだ、あの完璧な『仮面』をさ……ねえ、あの『仮面』ぶっ壊してよ、そのために君をキャストイングしたんだからさあ」と『天使の仮面』を壊して欲しいと頼まれたそうさ。

これが流石に比喻だとは、理解できたようで、そのためにけいちゃんは、この演技のために千世子ちゃんの友達になろうと行動に移した。できるだけ友達になろうと必死になったのだけど、けいちゃんのやり方では友達にはなれなかった。この時、どうやって仲良くなるうとしたか聞いたが、ああ、それでは無理だというような内容ばかりだった。ある意味、けいちゃんらしい……

しかしその時、周囲の人から言われてようやく本当には彼女を「百城千世子」を見ていない事が分かった。「千世子」ちゃんはどういう「人間」なんだろう？ と根本的疑問が湧いた。

けいちゃんは、彼女を「俯瞰」して見ることにした。あの「天使の仮面」は何なのかを？

創られた美しさの価値

正直、このけいちゃんの話は他人だったら、信用できないレベルだった。あくまで、事実が大きく誇張した自慢話だと思ったと思う。けれど、この子が、そんな高度な嘘を私たちにわざわざ言う理由がない。しかも、後に映像として公開されている内容の裏話として喋って入るわけだから、裏付け出来てしまう。だからこそ、その語りは確かな質感を持って聞くことが出来てしまった。

話の続きとして「千世子」ちゃんと共演するシーン、監督から「今回は何も考えず、思いっきり演じてね、周囲に迷惑をかけるぐらいの迫力のある演技が出来ないなら、あの子に簡単に食われて終わるよ」と言われ、自分に出来る全力を出そうとしたらしい。だから「千世子」とちゃんと友達になれないのなら、他の友達を思い浮かべて、代用して「千世子」ちゃんを友達だと仮定して、想像しよう。そんなことを思いながら演じると「千世子」ちゃんが、ごく自然と友達として、接しられるように感じたらしい。

そう芝居は、ごく普通に演じられるようになって、台本通りの台詞を問題なく言えるようになって、普通の演技が出来るようになってきた……ただ、途中から自然に涙が出てくる。涙が出た理由は、役にのめり込んだ、演技のためじゃない。あの「千世子」ちゃんの被っている「仮面」が、崩れていって、そこにあったのは、いつものあの可憐な「天使の仮面」を無理して、つけ続けている「千世子」ちゃんので、それがあまりに可哀想で、泣いてしまったんだそうだ。

でもその納得の入っていないテイクで、撮った内容は結局OKが出てしまった。そのシーンと涙が上手く場面とマッチして、OKが出てしまった。監督のOKは絶対だ。逆らえる筈がない。

けいちゃんはそれには感情的に納得がいかなかったけれど、どうしようもないと割り切れたけれど、監督のあの発言「仮面」を壊すのは君だと言われていて、自分はブルドーザーで、あの「仮面」を破壊しないとならない。けれどそう簡単には上手くはいかない、そもそも「千世子」ちゃんと仲良くなりたくても、簡単にあしらわれてしまう。

そうこうしていると、どうもスターズ俳優陣の関係で、ギリギリだった撮影スケジュールが、台風という天候のせいで、乱れ始めたようだった。本来あった尺が、大幅に削られる。映画撮影には時間的制約があるから、ある意味仕方ない。そうして、削られるのはラストのけいちゃん「千世子」ちゃんのシーンだ。元々、オリジナルキャラクター、場面を削っても、原作的には問題ない。そう分ってるけど、まだ何もできていない。

そうした時に「天使」は舞い降りた。「千世子」ちゃんが、台風だろうと何だろうとこのシーンは取らなきゃいけない。どんなに駄目でも「三幕構成」くらいは守らないとお客さんは納得しない。そう味方してくれた。この時の「千世子」ちゃんはやはりプロフェッショナルだった。自分が売れる作品を作るためだったら、なんだったってする覚悟がある。この場の誰よりも、作品にプライドを持って挑んでいた。そう言って、けいちゃんに嫌でも、最後まで付き合ってもらおうと本当に美しく、可憐に言ってみせた。

その後の「千世子」ちゃんは役者として素晴らしかった。本来であれば大幅に遅れを取るようになるような撮影時間をその全力の演技で、とんでもないスピードで撮って行く。本来、8カットだったシーンを5分以上の長回しの長台詞で、1シーンに納めるような荒業を披露して見せた。とにかく時間短縮のために、役者の仕事の範疇を超えて、絵コンテまで読み込んで、理解し、演出家顔負けの実力で、一気に遅れを取り戻そうとしている。

そのおかげで、明日の最後のシーン「千世子」ちゃんのおかげで演じられる。これは、必ず成功させる。

けれど、天候というのは本当はどうしようもなく、コレはラストシーンを撮らないで、編集でなんとか辻褄を合わせるといふ選択肢もあったが、結局、台風の中で撮る…… という蛮行と言われても仕方ない行為に出た。ある意味、いや本当にギャンブルだ。

しかも、ワンカット長回しの一発録りで、物理的にも危険な撮影だが、やるしかない。この時「千世子」ちゃんは顔だけは怪我したらだめだよ、女優なんだからって冗談を言った。そんな冗談をいうような

イメージはなかったけれど、その後、続けて彼女は「大丈夫、全部私に任せて」といつものように「綺麗」に笑っている。

けいちゃんはあの時やっと「天使の仮面」の真の意味を知った。その「仮面」はあなたの映画への執着、そのものなんだと、自分は貴女を何も知らなかった、きつとその「仮面」はいっぱい努力と愛情を持って創られた「仮面」なんだと……何も知らなかった、その勇ましさを、その優しさを、その美しさを、その気高さを、何も何も……

最後の場面は大雨の中、台風の中、走り抜ける。私には途中から、また役と自分の間が分らなくなってきた。最後にこの映画のクライマックス、私は「ケイコ」に、貴女は「カレン」になっていた。だから貴女という大切な友達は必ず守ると誓って行動できた。

途中、あらかじめ指定された火薬が点火したのだけれど、「ケイコ」にはそれがもうミサイルのようにしか見えていなかった。だから必死になって「カレン」を守った。もう、これ以上だれも失いたくない。そう思えた。

だからこそ「カレン」が傷つくことが怖かった。だから、逃げている最中にへたり込んでしまつて、歩けなくなった。けれど「カレン」は「ケイコ」に向かって「大丈夫だ、行こう」と完璧な表情で、勇気づけて、導いてくれた。

そう、最後の最後の瞬間まで、私たちは逃げた。あの時の私たちはあの世界に没入して、楽しんでさえた。そんな時、あの台風だったから、川が増水したのだろう「カレン」が足元をすくわれ、斜面に流される。だから私「ケイコ」は咄嗟に、体が動いて、身を呈した。「カレン」に手を伸ばして、救い出しながら落ちていく、自分なんか見捨てていいから「行って」と大声で叫んだそうだ。

響くのは「ケイコ」という大きな声、それを聞いて、ああ、ちゃんと救えたと思つたという。

その後、なんとか監督が、何かあった時のために前もって、張り巡らされていた安全対策用のネットによって、けいちゃんはかすり傷程度で事なきを得たけれど、その日から高熱に襲われて撮影最終日ま

で、別で過ごすことになったらしい。

最終日によく体調が戻って、クランクアップを迎えたら、そうしたら花束が贈呈された。クランクアップした人に花束を贈呈するのが習わしらしく、寝込んでいたから、私のクランクアップが結局遅れたのが原因なのだけれど、最終日にもらった花束は本当に世界一美しかった。それと手塚監督から「ブルドーザー、お疲れ様なかなか面白い『天使』の画が撮れたよ」とお礼を貰ったとけいちゃんは語り終わった。

どこまで、規格値外の事をやってのけたのだろうか？ 本当に此処まで凄まじい事を……いや、この子なら演りかねないのが怖い。きっとこの話はある意味本当なんだろう。だから、墨字さんがニタニタ笑いながら、楽しそうに聞いているのだ。

そういえば、この間、墨字さんが「夜風にデカイ仕事持つて、来れそうだ」と私に言ってきた事がある。何なのか、この時の私は知らなかったけれど、あの仕事・演技は「女優」夜風景を大きく成長させるものになった。

舞台の上の麒麟児

ある日、墨字さんが「巖裕次郎演出：明神阿良也主演」のチケットを持って、それでけいちゃんに演劇を観てくるように言っている。

「チケットを貰ってな、2枚ある、行ってこいよ」と言うが、けいちゃんは「それより、次のオーディションを受けたのだけれど」と次への仕事への意気込みを言っているが、「まあ観劇も勉強だよ、これ持って行って来いって『千世子』あたりと」と言った瞬間、目が輝きだした。私としては何処で、そんなレアなチケットを誰から貰ったのかが、気になるのだが、まあ墨字さんもこの業界の人間だから、そういう事もあるのだろうと考えていた。

ただそれからしばらくして、スマホのLINEを画面ずつと見つめて「よかつたら、明日一緒に演劇に行きませんか？」と書いてある文章の前で、けいちゃんは固まっていた。私は「送らないの？」と聞く。「もし、断られたら、悲しくなってしまうことに、今気づいたの……」との事らしい。珍しく乙女チックな事を言っているが「アホか、早く送れ！」と墨字さんが横から割り込んできて、サツサと送信ボタンを推してしまった。

それに、唸り声をあげて「何するのよ、断られる時の私の気持ちを考えてよ、変態！」と言って「思春期か！ 半端に繊細になって、帰ってきやがって」とけいちゃんと墨字さんがじゃれ合っている。

それに子供たちが「お姉ちゃんって、携帯持ってたっけ？」と言っているが、私が「デスクアイランドの制作にスマホ会社が携わっていて、貰ったんだって」と答えた。流石に現代に固定電話しかないのは辛い……ウチで支給することになったかもしれないから、ありがたい。それにウチで支給すると完全に仕事用としてしか、使わないようなプライドがけいちゃんにはあるから、丁度よかつた。

その直ぐ後に「何か、届いてるよ！」と子供たちが言う。LINEの画面にはOKの可愛いスタンプが貼られている。ああ、本当に「千世子」ちゃんと友達になっっているんだ、良かったと思うのとけいちゃんが喋ったあの話の信憑性が増した。本当に凄かつたんだなあ……

今日、けいちゃん達が観に行つたのは劇団「天球」での演劇、舞台役者「明神阿良也」主演の作品。演劇界の重鎮の一人、舞台演出家「巖裕次郎」その人本人が、見出したのが「明神 阿良也」だ。今はまだ若手だけど巖さんのお気に入りで、いろんな賞を総なめにして、テレビではいふほど知名度はないかもしれないけど、とんでもない実力者だ。

そんな、舞台を見て返ってきた筈のけいちゃんが、全く生気のない状態で、子供達に遊ばれている。私は先ほど述べたような来歴を適当に喋つた後「舞台も凄かつたでしょ？」とそう聞くと「……うん」と小さな肯定が返ってきた。

そのなんだか気落ちした返事に「なんで、そんなにテンション低いのかなあ！ 私だつて『阿良也の舞台』見たかつたのに、我慢してチケット、けいちゃんの前で譲つたのに！」とワザと子供っぽく駄々をこねてみた。すると子供達は「デート」という単語に飛ぶついで、面白い反応をしている。「デート!? お姉ちゃんデートしてきたの！」と騒いでいる。

そんな「デート」という言葉には反応を見せずに、けいちゃんは悔しそうにしながら「……本当に凄かつたわ、そう『千世子』ちゃんのお芝居は画面の向こう側でキラキラ輝いてるって感じでしょう？ 綺麗すぎて手が届かない感じ「阿良也」くんは正反対だった……彼が泣くと悲しくて、彼が笑うと嬉しかった。観客と自分と役の境目がなくなる感じ、鳥肌が立った」と本当に打ちのめされたように語っている。

しかし、一気に口調が変わって「それなのに、実際会ってみたら、失礼なセクハラ男だったのよ、舞台の上では、あんなに素敵だったのに、騙された気分だわ」と手足をバタバタさせて怒っている。

私は、ああ、それで不機嫌だったのかあ……という感想を抱くが、本人に直接挨拶してきたんだ。それはそれですごいなあ……とも思うが、子供達は「お姉ちゃん反抗期？ あー反抗期かー」などと言って、けいちゃん「で」遊んでいる。

けいちゃんはそれでも辛かったようで「……悔しい、私にはあんな芝居できない……」と言っているが、そこに墨字さんが現れて「できねえじゃねーよ、するんだよ、お前に欠けてる物は『観客への意識』だ。映画はカメラが、役者に寄り添ってくれるからな、自分の内面だけに集中していても返って、それは武器になる。だが演劇はそうはいかない、阿良也のあれは全て役者に必要な能力だ」と墨字さんが大見得を切って登場した。

そんな偉そうなことを言っているが「……黒山さん、久しぶり？」とけいちゃんにあしらわれている。そんな言葉に墨字さんが「昨日も、一昨日も会ってるよね!」と割りマジ切れしている。多分、割と真面目に語ったから相手にされなかったのが悔しいのだろう。まあ確かに『観客への意識』の言い分に対しては私も、その通りだと思う。ただ、夜風家の面々は口々に、そうだっけ？ クロちゃんいつ働いてるの？ と本当に素っ気ない。

それにちよつと切れ気味に墨字さんは「お前に、新しい仕事紹介、してやんねーぞ!」と脅すような事を言うが、けいちゃんはそんな事お構いなしに「仕事、お芝居の! 私、オーディションを受けてないのに!」と目を輝かせている。

一枚の紙をけいちゃんに差し出して「良い鼻を持った演出家は、時にオーディションなんて必要としないもんだ、阿良也の芝居に近づきたいなら此処へ行け、お膳立ては進んである」そう墨字さんが言い終えると、けいちゃんは口元を少し緩ませ、「うん、行ってくる」と楽し気に言った。

ちなみに、墨字さんに何処に行かせたのか、何となく聞いてみると「巖のオッサンの所」とアッサリ言っただけだ。それって「あの『巖裕次郎』さんの所に行かせたことですか?」と言うと「そりゃあそうだろ、何のために観劇させたと思っっているんだ?」とあつさり言っただけだ。どうしようしながら「いやいや、そんな大御所にコネクションがあったなんて初めて聞きましたよ!」という「そりゃあ、初めて言ったからな」と返してくる。ああ、この人もけいちゃんと根本的には変わらない。変人の分類に入る事を思い出した。

いやはや、いつも仕事をせず外をブラブラしているから、パチンコにでも行っているのか？ と本気で問い詰めようかと思っていたが、恐ろしい所から仕事を取ってくる。この人は本当に謎が多い。未だに、自分の監督論や映画論何かについても殆ど教えてもらった記憶がない。

非常勤時代に、ごく一般的な映画論を教えてくれた事はあるけれど、あくまで主観の入っていない物だった。　　そういえばただ、一回だけ酔っぱらってる時の与太話として、先生とか師匠みたいな人物は入るんですか？ と聞いたときに、アイツは「そういうんじゃねえ」と本気目のトーンで言われたので、きつと「そういう人物」がいたのは知っている。

後に知ることになるが、この「人物」がいたから、巖裕次郎の最後の演劇に、黒山墨字は夜風景を出すことが出来た。ある意味、皮肉な話だ。

表現のダイビング

後にけいちゃんから聞いた話では「劇団天球」その現場では今までの現場と全く違っていたそう。そこでは役者同士がお互いの役者論について喧嘩し合っていて「表現」というものを本気で探求しているようで、さらにその中で「阿良也」くんは的確な指示をこなしているのが特に印象的で、存在感もかなりあったという。

そこで、けいちゃんは巖さんに初めて会った。値踏みされるように見つめられ「黒山さんから話が聞いているか？」と言われたのが「とりあえず行って来いとだけ……」と言われた通り正直に答えたそう。というか、挨拶も連絡もしてなかったのか、あの暇人……

そういうと「あの野郎……」と返し、阿良也くんが「ああ、新入りが来るっていうから、誰かと思えば、巖さん、鼻詰まってるの？ あんたの最後の芝居、この子に潰されるよ？」と悪びれもせずと言って、それに対抗するように「俺の配役に口出すのか、偉くなったなクソガキ」とこつちも言い争いになったそう。ただ、阿良也くんと共演できるといふ思いからけいちゃんは「私、一生懸命頑張りますから！」と素直に思いを伝えたらしい。

それに巖さんは「……公演は三ヶ月後だ、台本を渡す。演目は『銀河鉄道の夜』俺たちと一緒に、死への旅へ行くか『夜風景』……」と言われた。さらにその場で、いきなり主演の抜擢を受けた。あの「銀河鉄道の夜」における「カムパネルラ」だ。殆ど、台詞も一二を争うレベルだ。正直、信じられなかったというのも頷ける。

そしてけいちゃんをなぜ選んだのか？ を「劇団天球」のメンバーは納得できないようだった。ただその場は結局、阿良也くんが言った「役者を名乗る覚悟があるかどうかだ。言葉って重くて強い物だから、俺は言葉を軽く扱う奴が嫌いなんだ。もう一度聞く、夜風、お前は役者か？」という問いかけによって、試される事になったとのことだ。

結局その場で急に、エチュードを始めることになった。お題は「汽車」パイプ椅子二つ並べただけのセットの上で、けいちゃんは想像し

た。ただ今、汽車に揺られている。ただそう思って、演じた。そうしてごくごく自然に「役」に没入した。ごく普通に汽車に揺られていると話しかけられ、すこし吃驚したらしい。だって、周囲には「まだ、空席があったから」と、答えたらしい。ああこの辺の独特の感性は、やっぱり凄い物があると感じさせられる。

ただ、それではどうやら、上手くいったか、どうかは分らなかつたらしい。エチュードの共演者だった女の子はけいちゃんの芝居を評価してくれたけれど、その時の芝居は理解できるかどうかなのかという話になったとのことだ。おそらくけいちゃんのメソッド演技は評価できるけれど、それが、本番で通用するか、お客さんに伝わるのかどうかという話だったみたいだ。

巖さんが「できる、できないじゃねーよ、あいつ夜風を使うのか？使わないのか？どっちが面白い？」というとその共演者の女の子は「使う方です」と言ってくれたらしい。これでなんとか、とりあえずは参加が決まったとのことだ。

初日は見学だったが、そこで「表現」というものは何か？ということを見せ付けられた「喜怒哀楽」それをけいちゃんはうまく演じ分けられないとのことだった。

そこでけいちゃんは「表現」という物が、どういう物なのかよくわからなかつたと言って、自分の演技には「深さ」はあるらしいが「伝わりやすさ」が全くないらしい、ただ芝居はソコじゃないこと「表現」であることを理解してくれ、そう言う内容の話だった。

場所を移って、スタジオ「大黒天」で、けいちゃんは事のあらましを述べた後に「頭では分かっているの、阿良也くんの芝居は大げさなのに、リアルな動作から感情が伝わってくる感じ」というから私は「分かかってんじやん、それだよそれ！」と軽く答えてしまったが、その答えでは納得できないようで「そう思って、体を動かそうとすると何て言うか……」と言葉に詰まった所で墨字さんが「感情がついてこないんだろう」と言うといけいちゃんが「そう、そんな感じがするの」と答えた。

少し墨字さんが考えて「スターズのオーディションの時は？ どうやって涙を流した」と聞いた。けいちゃんは思い出すように「あれは初めてはお母さんのお葬式を思い出して、演じたいていたの……でもなぜかお葬式の時は涙が流れなくて、黒山さんにバカでも分るように演じろって言われたから、お葬式から家に帰った後、初めて涙が流れた時の感情を思い出して、涙を流したの」と答えた。成る程、自分の中にある感情のストックから、引き出したってということか……

その答えを聞いて「ま、そんなとこだよな、中には涙腺コントロールする奴もいるが」と墨字さんが、明らかに「誰か」の悪口を言うので、私が「パコン」という音が良く出るように叩いておいた。

そんなやり取りから、とりあえず説明するようにホワイトボードを引っ張って来て「役者やいろんなタイプがいるんだよ例えば」といつて墨字さんが、解説を始める。

「表現と感情」に付いてだ。上方向が表現の軸で、下方向が感情の軸。横が演じられる、役の幅だとのこと。

墨字さんが言うには「大体の役者つてのは下方向にはまあ10くらい、この程度しか感情を掘り下げられてね、その代わり最低限の10を表現しようと役を掴んで戻ってくる。夜風、お前はがつつり表現を掘り下げる、つまり100まで行くが、それを表現するために戻ってこない。普通の役者は海中10メートルを潜って演じるのに、夜風お前は100メートルを潜っちゃってる。潜っちゃって、それぞれを海上まで引っ張り上げないと演技じゃ通用しないんだよ」

その答えに、けいちゃんは「ほ、褒めてる？」と言うが「褒めてねーよ、デスアイランドの話だってそうだ！ 台本も読んだけど、ずっと死から逃げてるだけじゃねーか。あの手の衝動的で大胆な芝居以外はお前は下手くそなんだよ、ほぼ当て書きだったしよ」と墨字さんはバツサリ批判した。

それに付け加えるように「例えば千世子はお前とは真逆、あいつは敢えて感情を掘り下げないで、演じる上っ面の芝居だ。ただし、誰よりも自分の魅せ方を知っている。要するに千世子はこの精度が高すぎて、誰が見ても綺麗なんだよ。俺から言わせりゃクソだが、売れる

理由はよく分る」そう墨字さんが言うのと、けいちゃんが「千世子ちゃんを綺麗とかクソとかそんな目で見ないで」と理不尽に怒りだした。

墨字さんは「貶しても、褒めても嫌なのかよ、めんどくせえなあ」と至極真つ当な事を言い、その返答に私はこのホワイトボードに対して「うーん、そう考えると阿良也くんはけいちゃん寄りだよ、深く役を掴んで、それを丁寧に伝えてくれる芝居。しかも憑依型カメレオン俳優って言われるだけあって、役作りの幅が広い、それでいて感情をきっちり掘り下げ、それをちゃんと表現する技術を持つてる」と言いながらホワイトボードに書き込んでいく。それを見ながら「表現するための技術……」とけいちゃんが呟き、「ま、お前より一歩先をいつてるってことだな」と墨字さんが付け加えた。

私は、ちよつとそのホワイトボードをお前に愕然とした。話の流れ関係抜きに、墨字さんが描いたデフォルメのけいちゃんと自分の描いた阿良也くんの差が此処までだとは……子供たちが「体、大丈夫震えてない？」と言つてくれるが、「うん、大丈夫『絵心』がないだけだから……と何とか返した。

けいちゃんが「私に足りないもの、掘り下げた感情を表現するための技術……」と呟いた時に「技術なんて大げさなもんじゃねえよ、表現力なんて自然に皆で来てるもんだ」と墨字さんが言うから「え、みんな……私できてないけど……役者なのに」と自信なさげに返した。「できてるよ、人間誰しも本能的にできてる、忘れてるだけさ」と墨字さんが堂々と言い切った。「それどういう」とけいちゃんが言おうとしたときに、そこで突然、ルイくんが

「あー!!!」と叫び出し、話を割り込んだ。

そうして「ちよつとみんな静かに!」と言うが、墨字さんが「お前が、一番うるせーよ!」と突っ込んでいる。

ルイ君の視線の先にはテレビが映っていて「星アキラ熱愛か? 明神阿良也の舞台挨拶と現れたアキラさんですが、謎の美少女と」といつて熱愛発覚のゴシップ放送が繰り広げられていた。そこには何

故か、けいちゃんの姿があった。

私は「何、してんの？ けいちゃん」と言うと「あれ？ お前千世子と行ったんじゃないの」とからかうオッサンと「テレビ出演……お洒落して行って良かった」とトンチンカンな事を言う世間知らずと「そういう問題じゃないんだから……」と真面な感覚を持つ子と「ウルトラ仮面……」と憧れの存在の事実を目撃してしまった子がその場に揃っていた。

ああ、どうなるんだコレ……

女子三日会わざわざ刮目して見よ

結局あその後には報道から出たのは、星アキラくんがあ場所に住たのは、新たに巖裕次郎の舞台へ出る為だったという話になっていた。これはけいちゃんも知らなくて、寝耳に水だったらしい。どういう理由かは分らないけれど、スターズの戦略ということなのだろう。まるで、取って付けたかのような配役だけれど、けいちゃんの主演の理由の方がよっぽど分らないのでなんとも言えない。

それよりも、けいちゃんの感情表現の方が問題だ。どうすれば良いのか、ずっと悩んでいるけれど、あのヒゲはまるで相談に乗ってあげない。ただ、ある日に「考え事をするには、良い公園がある」と言つて、井の頭公園を紹介してただけだ。

それで、とある日に子供たちを連れて釣り堀に出かけた際にどうしてけいちゃんにそんな事を言ったのか聞いてみた。ちなみに子供たちは、いつ墨字さんが働いているか？ という素朴かつ絶対的な質問をしてきた。その答えは私も知りたい……

ただその答えは案外意外な物で、なんだかんだ言いながら教えてくれた「あそこは大道芸人みたいなもの多いだろう、それだけ観客が多いから都合がいいんだよ。映画俳優は直接観客を前にすることがないからな……」私は一体何の話をしているのか分からなかったが、墨字さんは続けて「夜風の芝居は多分、現実逃避の果てに生まれたもんだ。そこに現実を生きるための希望を見出したのは良いが、それじゃあまだ足りねえ、そろそろ思い出してもらわないと俺が困るんだよ……」と続けた。

結局良く分からない意図を教えてください、どうしようか悩んでしまふ。ちなみに、どうやって仕事をサボっているのかも良く分からない。なんだかんだ、業界人として色々首を突っ込んでいるらしいから、ノートパソコンやスマホで連絡は結構対応してのは見かけるがただ、今は待っている状態なのだろうか？ 私は「監督」黒山墨字の質的なマネージメント業務をこなしていたり、過去の映像データの管理や運用、それらを用いた単館系・ミニシアターでの上映についても

あるので、なかなか大変だ。まあ、子供たちはそこまで手がかからな
いけれど……

しかし、その言葉によってけいちゃんは一気に役者として成長して
行くことになった。どうやら井の頭公園で本当に、パフォーマンスを
したらしい、単純な新聞紙で作った人形劇だったけれど、それで何か
大きな物を得たようだ。自分の表言という物、その原体験にある演技
というのは、何だったのか？ というのを墨字さんなりに思い出させ
る手段として、このような方法を行ったみたいだ。

実際に、その人形劇は目の前で、子供たちに実践して入るところを
見たけれど、本当に上手だった。感情の抑揚や喋り方、そのキャラク
ターに成りきって、演じるという事においては子供向けの内容だった
としても、いや子供向けだからこそシツカリと感情を伝える技術とし
ては、分かりやすさが求められるから、伝わりやすい。

なるほど、理屈としては納得がいく。けいちゃんにこの件で話を聞
いたら、誰かに喜んでもらうため、小さな時にお母さんとした『いな
いいないばあ』が演じる事の始まりだと言っていた。けいちゃんらし
い素直で実直な答えだ。

ただこれは彼女の感情表現という前提の話だ。表現そのものにつ
いて、まず潜っていた所から浮上する「方法を思い出した」という感
じなのだろう。それではまだ始まりに過ぎないが、これでようやくス
タートラインには立っただけ「カムパネルラ」への挑戦が始まった。
「カムパネルラ」という役を自分自身で、会得するのは簡単な訳がな
い。物語的にも難しい役割で、どこか謎めいていて、達観している。
それでいて年相応の幼さを残した、その形容しがたい気品や美しさや
儂さ、また死者であるという自己を受け入れている存在、そんな難し
い役割を演じなければならない。

その為に、作品に没頭するということ、役を理解する事、どうい
う考え方の人物なのかを知らなければならぬ。ただ、その辺りから
阿良也くんは本気を出してきたみたいで、一気にけいちゃんの事を興
味を持ったみたいだ。どうやら阿良也くんはこの作品における答え
を「ジョバンニ」という存在を理解するために、けいちゃんを利用し

ようとしたらしい。どうも「ジヨバンニ」の境遇とけいちゃんの境遇をリンクさせて見ていたとのことだ。他人の感情を自分の物にする。そういった芸当を見せつけられたとけいちゃんは言っていた。

そうしているうちに、本当に突然「百城千世子」ちゃんが現れて、ふらりと遊びに誘って、色々とお掛けたらしい。お芝居を見に行く約束をドタキャンしたお詫びだというが、真相は分らない。この事をいきなりYahooのトップニュースで流れて来て知った時は驚いた。

ただこの辺りの出会いと衝突が、一気に話を大きく変えていった。正直に言うところの辺りの事を私はよくは知らない。けいちゃんは学校と稽古でほとんど顔を出さなかったから、私が単純にほんの少し見えていないうちに、一気に成長してしまっていた。

子供たちの学校の送り迎えの後、けいちゃんの稽古場に寄る時間があつたから、少しお邪魔して、巖さんにけいちゃんの日頃のお礼と墨字さんが迷惑をかけたというお詫びをしようと顔を出した時だ。偶然、けいちゃんの練習風景を見てしまった。そこには確かに一人の「役者」がいた。

何があつたのかわからない。理解できない成長速度だった。人ってこんなにも早く変わるんだ、変化するんだ。そう実感させられた。ただそれでもけいちゃんは、役から元に戻るといつものけいちゃんなので、本当に役に没入するというのは、何かを変えることなのだと感じてしまう。それがけいちゃんの芝居なのだ。そもそもデスアイランドの話だっけって見てはいないんだから、そうか、もう知っているけいちゃんではないんだ。

墨字さんが最初連れて来た時は、確かに才能の塊だとは思ったけれど、ここまで凄いとまでは思っていなかった。何をして生きていけばこんな風に、なれるのか分らない。ただ彼女がなぜあそこまで没入できたのかと言うと、自分自身にとつて知らない誰かを演じることがただ楽しいからというのが、そこにあつたからだと思う。ああ、これが墨字さんが見たかった風景なんだ。

こんなにも恐ろしく成長するんだと、あつという間に素人だったはずのあの子が、本物の「役者」に変わっている。それもトップクラス

に上手い「役者」だ。本当にあの「明神阿良也」と肩を並べる芝居と
いうのをほんの少しだけ垣間見てしまった。これは「百城千世子」
ちゃんと出かけたあの日辺りから、加速度的に変わっていったと巖さ
んが教えてくれた。強面で言葉遣いは少し怖いが、仕事には真摯そう
な人柄だ。ちなみに、墨字さんの事をいうと、多少小言を言ったあと
に「まあ、アイツの金の卵だ、大事に温めるよ」とボソツと言ったの
が印象深い。

そして稽古の日々は続き、ある日、役者の芝居人みんなと屋形船に
乗って帰ってきた日だ。楽しい宴会のはずだった。いや実際そう
だと思う。その日からけいちゃんは完全に変わっていた。今まで身
につけた空気が違う。張り詰めた糸のような、何かを知ってしまった
ような目をしている。どこか気まずそうだ。

後にして思えば、この時には、けいちゃんは巖さんの事を、病気を
知っていたのだろう。故に、それを昇華させる為に、推し堪えていた
のだと分かる。そしてそれは「カムパネルラ」を演じるために必要な
物でもあった。

修羅と雪

ある日、けいちゃんが珍しく事務所で「ご飯を食べたいと言ってきた。勿論、ウエルカムだ。皆で食べるご飯は美味しい物だから。そうして少し甘口のカレーを皆で、食べているときにテレビでこんなニュースが流れてきた「演劇界の巨匠・巖裕次郎さんが手掛ける舞台『銀河鉄道の夜』がいよいよ今月末初日を迎えます。岩尾作品はおなじみの明神 阿良也さんに加え、追加キャストに星アキラさんの参加も決まり、先日の熱愛報道の影響もあつてか、チケットはすでにソールドアウトが決まっています」と話題になっている。

それで私は「楽しみだね、けいちゃんの初舞台！ 稽古の方は最近どう？ けいちゃん？ ……？ おーいけいちゃん、おーいあれ？」呼び掛けても反応がない。子供たちが「お姉ちゃん？」と問いかけてようやくけいちゃんは「え、あ、何？」と驚いたように飛び上がった。

私は「何かあつたの？ 今日珍しく、事務所でご飯食べたいとか言うし……」と言うとけいちゃんは「…私、ううん、なんでもないと力なく答えた。

その光景を見ていた墨字さんが「夜風家、今日は泊まっていけ！」と言った。子供たちは喜んで、事務所のプロジェクターで、好きなジブリ映画を見ようとしている。微笑ましいが、けいちゃんは大丈夫だろうか？ その日は私は先に眠ってしまった、後日墨字さんに様子を聞いたら「まあアイツなりに悩む所があるんだとき。そつとしといてやれ」と言われた。後で考えると、この時にはこの二人は知っていたのだろう。

そうして、あつという間に月日は流れて行って「舞台銀河鉄道の夜」公開初日になった。

流石に見逃す事は出来ないから、私と子供たち二人と墨字さんの分、合計して四枚分のチケットを用意はしてあるが、墨字さんは用事があるから先に行けと言ってきた。せつかくのけいちゃんの初舞台なのに、そんな大事な用事とは何か、この時は分からなかった。

ちなみに正面のポスターを見て、星アキラくんが載っていたから、ウルトラ仮面が出ていることに驚くルイくんがいた、純粹だなあと
思ってしまう。

ただ劇場に入って、沢山の客席を見て、此処でやるんだと思うと急に身体がソワソワして来て「けいちゃん大丈夫かなあ、心配だなあ……」と呟いたしまった。

それをどうも聞こえたらしいレイちゃんが「ゆきちゃん、最近おかしさんみたい」となんだか胸に来る一言を言ってきた。

「えっ……だよね……私が、今が一番いい時なのによね……」と何と返して良いのか分らない事を口走った。最近、仕事は完全にサポートになってるし、恋人とかなにそれ、美味しいの？ って状態だ。私生活に全くハリがない……。

ただ待ち時間に、少しスマートフォンを立ち上げてた時、Yahooのトップニュースで「演出家、巖裕次郎氏緊急入院か？」という物が飛び込んできた。驚きと同時に周囲のざわめきが大きくなっていつている。どうやら本当のようだ。

その周囲の様子に「ゆきちゃん、どうかしたの？」とレイちゃんに喋りかけられ「えっあっ、何でもないよ」と解答したが、悪い考えばかりが頭に過る。このことはけいちゃん達はもう知ってるの？ 墨字さんの用事って、もしかしてこの事？ ていうかこんな状態で開演できるの、いやたとえ開演したとしても……すでに客席全体が混乱している……皆、お芝居に集中できる状態じゃない。

救急搬送、緊急入院、意識不明、そんな言葉が周囲からどんどん飛び込んでくる、この状態なら公演を中心にするしかないのではとすら考え始めた時。

そんな中、予定通り照明が落ちて、開幕と同時に「明神阿良也」が現れた。この時の彼の独白が、周囲を一気に舞台へと集中させた。圧倒的情感の発声と語り口で、物語へ引き込んで行く。弱々しい少年で、どこか物悲しい雰囲気を纏った彼の言葉は「ずっと一緒にいられると思っていた」という始まり。嫌でも今のこの状況をリンクさせながら、芝居をしている。

観客席が巖裕次郎の急報に混乱する中、彼らだって不安のはずだが、それでも巖さんの不在の不安を感じさせない要に、メタ要素さえ取り込んで、一瞬で会場を支配した。

そこから始まる芝居は、見事だった。この空気に負けないように、各キャラクターがシツカリと立った演出で登場し、見事に演じている。ザネリの道化つぷりなんか、この状況での最善手だとしかいいない。本当に素晴らしい。それでいて、場面ごとの引き込み方が美しい。そして川へのシーンからの暗転「どうして暗くなったの、続きは続き」とルイ君がそう聞きながら、レイちゃんが人差し指を口に当てている。私は「場面転換してるの、また始まるよ」とそういった。

そうして、また舞台がライトアップされた時に、不思議な少年がスモークと共に現れた。本舞台の主演ともいえる「カムパネルラ」といえる存在そう、けいちゃんだ。

「カムパネルラ」は確かにそこにいて、あまりに繊細で異常な没入感を見せる演技、気品さと子供らしさと妙な達観を兼ね備えた、不可思議な魅力を持つ少年、蠱惑的にさえ見える異次元の存在。そんなこの世成らざる者がそこにいた。

スモークとカムパネルラの存在にとらわれて気づかなかったけれど、本当に何て簡素な舞台だ。ただ四脚の椅子しか置いてない。こんなセットで、大丈夫なのか？ と頭に過ったその時、音が聞こえた気がする。車窓を開く音が……

演技として「カムパネルラ」が車窓を開けたのはわかる。けれど、それがあまりに綺麗で、その描写で何もなければ、実際の風景が広がるようだった。まさしく誰も見たことがない車窓が見えた気がする。

それからの少年二人の会話は凄まじかった、何も見えない何も無い空間に指をさして、情景を見事に描写している。それがあまりに説得力があるものだから、銀の空のすすきが風に揺れているのが、誰かが隠して置いた金剛石をいきなり引っ繰り返したような天の川の銀河の煌めきが、三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、天の野原いっぱい光っているのが見えようだ。

そしてこの汽車の煙突から煙が出てないのを見て、石炭を焚いていないからきつとアルコールか電気で走っていると楽し気に会話している。ああ、本当に不可思議な死への旅路を行っているのが感覚的に感じとれてしまう。演技があまりに自然だから、この異常な空間がおかしな説得力を作り出している。

舞台は本当に銀河上での鉄道の一室のように見える。実際に存在していない銀河鉄道は此処にだけは確かにあった。

そこから物語は着実に進んでいって、銀河の海で地層を掘り返している人の話、お菓子のような鳥を捕る人の話、本当の天上にさえ行けてしまう切符の話、どんどん話は進んでいって、そうしてある人物が舞台へあがってきた。

「あらここはどこかしら？ ……綺麗」そうして窓の外を見るようにしてある女の子が舞台上が上がってきた。なんだか、濡れているようだ。

「この汽車は銀河を走っているんです」そうジョバンニが答えると「素敵ね、ここに座つても」と感想を言いジョバンニ達の向かい席に座ろうとしている。「どうぞ」とカムパネルラが優しく返す。

「うん、あれ、髪が濡れている……どうしたの？」とジョバンニが聞くと「ああこれ、私達の乗っていた船が沈んでしまったの」とただ自分に起こった災難を無機質に答えた。

「……船？ ……それってどういう意」つとジョバンニが言いかけた時に、女の子は「先生も一緒なの、ねえ先生早く」と言っつて、誰かを招き寄せた。

ここまでの舞台を私は、一種の恐ろしささえ感じながら、鑑賞していた。ただ、この後の展開も何処までが演出なのか？ 分からない物になっていった。

ブルカニ口博士は登場しないし、答えない

そうして舞台にある青年が現れた。彼はあの女の子の家庭教師のようだ。ただその素振りは舞台の上で、誰が見ても彼だけは星アキラだけは、正に「普通」の演技をしていた。そこに銀河鉄道の車内があるように見えない。

あの溢れんばかりの今までの情感などなく、ただ単に台詞を喋っているだけの演技。気迫というものがない。いや、これが「普通」なのだろう。このような異様な芝居を求める方が無理なことだ。

「私たちは天へと行くのです、ごらんなさい、あのしるしは天上のあかしです。もう何も怖いことはありません、私達は天に召されるのです」ああ、なんて嘘くさい言い回しだろう。感情は確かにこもっている。下手なわけじゃない。ただ、真実に聞こえない。

それから彼が独白を始める。彼らがどのようなことになったのか、大きな大きな船が氷山にぶつかったこと、それで脱出用のボートに乗れなかったこと。自分たちが、誰かを押し倒して押しのけてまで生きようとしなかったこと。それが良いことだとは思わなかったこと、これで正しいと信じること……

正直、星アキラくんはただそう台詞を喋って、その場を一気に駆け抜けようとしたようにさえ感じた。

ただ、カムパネルラがそうさせなかった「具合が良くない様ですけど、大丈夫ですか？」と問いかけた所から「? ……どうぞ、かけてください」と言い出し、ジヨバンニも「本当だ、かけて休んでください」と言い、女の子も「大丈夫? ほら座って」と座るように促している。

それに答えるように青年は「で、では失礼します……」と言って着席する。

そうしてカムパネルラは「きつと……体が冷えたんですね……船が海に沈んだって」と言ってそれに答えるように、弁明するように青年は「はい……しかし救命ボートの数は限られていて、この子を助けるためにはみんなを押しよける必要があります。みんなを押しよける

て、この子だけを救うよりもみんなと一緒に天上へ向かうほうがこの子の本当の幸せだと思いました。だから私たちはこうしてこの汽車に……」と言ったところで、カムパネルラが割り込んできた。

「今はどういう気持ちですか？ もしその時、みんなを押しつけていればあなた達は今ここにいずに済んだかもしれない。残された家族も悲しい思いをしないで、済んだかもしれない。それでもそれでも自分が正しかったと思いますか？」と、ある意味とんでもなく無茶苦茶な事を言い出した。そしてこう言い放った。

「教えてください、『僕達』は本当に正しかったんですか？」

きつとずつと正しい答えを探していた、ザネリの為に死ぬことになったカムパネルラは、そんな答えが、この世に存在しないから苦しんでいる。故に捲し立てるように何が正しい答えか？ どうすべきか？ を必死になって聞き出そうとしていた。

青年は「ぼ、僕は……僕は」と言い淀み、そう言って数歩歩いて、観客に背を向けた。

そうして一呼吸おいて「僕は、僕は、何も分からないんだ、何が正しいのか？ 何が間違っているのか？ そういうことが本当は何もわからない。救命ボートの数は限られていて……この子を助けるためにはみんなを押しつける必要があります……」

そうして、彼が台詞を吐き出すたびに、観客はそれを聞くカムパネルラたちへと視線が集まっていく。先ほどまでの芝居と待ったく違う。まるで、主役を際立たせる為の影の芝居。彼が喋るたびに、主演の二人の表情に目が行ってしまふ。

「ただ僕は信じたい……本当の幸いに至るためにいろいろな喜びも悲しみもきつと、みんな神様の思し召しだと……」そう言い切った、彼はどこか伸びやかで、軽やかな演技を見せてくれた。途中から明らかに素晴らしい演技に変わっていった。

そうして、場面は進み南十字星の駅についた時「では、僕たちはここで下ります、さようなら」と青年は言った。その場の全員が「さようなら」と別れの挨拶を交わした。

さらにカムパネルラは青年に「ありがとう」と謝辞を述べると「……

こちらこそ」と青年は返して、ここで幕が降りる。暗転し、観客席は拍手が広がる。15分間の休憩が入った。

私はようやく、この舞台の感情の荒波から少し解き放たれて、ちよつと冷静になり子供たちの様子を伺った。

「ルイくん、ルイくん、おトイレ行かなくて大丈夫？　つて、どうしたの？　さつきから」とそこには涙ぐむルイくんの姿があった。

「も〜ルイ！　もう始まるよ、何で泣いちやうのよ」とレイちゃんが言うが、ルイくんは「ゆきちちゃん、ジヨバンニはまだカムパネラが死んじゃつてることに、気づいてないんでしよう？　なのに、これからお別れしなくちゃいけないでしょ、あんなに仲良しなのに……かわいそう」と　あまりにも本質的な事を言い出した。

……そう特に、子供が共感を覚えるのはきつとけいちちゃんよりもカンプネルラよりも、阿良也くんジヨバンニだ。物語の性質上、それは当たり前のように見えるけど、本当は当たり前じゃない。

純粋な少年を演じきれる「明神阿良也」の高い演技力のおかげで成り立っている。詐欺師に騙された人間が、相手の真の姿に気づけるはずがないように、人は本当に上手い芝居を目にした時に「上手い」ということすら認識・意識できない。

そう「明神阿良也」の序盤にはあまりにも自然で「上手い」とすら思わせない、その屈託のない純粋な人柄は彼が成人してることすら忘れる完全な子供の顔。

時間通りに幕が上がったその時、さつきと別人のような「明神阿良也」が現れた。子供のあの澆刺とした笑顔などない、覇気のない弱弱しい姿。

ガチャとドアを捻るような仕草をした後「母さん今、帰ったよ具合はどう？」そうさみし気に聞いた。ああ、そうか、ジヨバンニの家のシーン、回想に入ったんだ。

「角砂糖を買ってきたよ……うん牛乳に入れてあげようと思って……だめだよ、ちゃんと食べないと……わかった、じゃあ僕が先に食べるね」物悲しく、力なく、空元気を出して母親に向き合うジヨバンニの

姿があつた。

本来、物語の序盤にあるジョバンニと病気の母親との会話、それを今になって一人芝居で演じ始めた。先ほどまでとの演技トーンとはまるで違う。悲しみの芝居だ。

「母さん……僕、お父さんはきつともうじき帰ってくると思う……うん、今朝の新聞で、北の方の漁は大変良かったと書いてあつたから……きつと、うん……みんながそれを言うよ、父さんがラッコの上着を持って帰ってくるよって冷やかすよ、けれどカムパネルラだけは言わない……うん、カムパネルラだけは……」そう貧しさと僅かな希望と唯一信じたい友情を語ったほんの少しのシーン。ここで暗転。そして一気に回想が終わる。

場面は銀河鉄道に戻つて。そこにいるのは純粹で、なんと幸せそうな顔になっているジョバンニがいた。カムパネルラのいる時とそうでない時とでは感情の振れ幅があまりに大きすぎる。危うさを覚えるほどに、虚無と幸福、相反する感情が、鋭敏に研ぎ澄まされている。

そうして銀河鉄道に乗る少年たちの会話が再び始まった「ねえ、カムパネルラ」と楽し気に語りかけ「なに、ジョバンニ」と返し「僕たち、また二人つきりになつたね」と何の気なしに言つて「うん、そうだね」と答える。芝居事態は順調に進んでいると言うのに、なんなんだろうこの胸騒ぎは……

「ねえ、カムパネルラ、僕たちずっと一緒にいようね……カムパネルラ？ どうしたのさ、カムパネルラ、急に黙りこくつて変だよ、ねえカムパネルラ」とジョバンニが急に返事がなくなつたカムパネルラを問い詰める。ああ、ついに終わりが来た。カムパネルラの死を知らないのはジョバンニだけだからこそ、無垢な少年のその表情や言葉が切なく際立つ、今までである意味では存在感を感じなかつた少年が、最後のこの瞬間にきて圧倒的な存在感を持ち始めた。一人芝居その二つの顔を見せたことによつて……

ジョバンニは必死で話しかけている「カムパネルラ……返事してよ、カムパネルラ！」とそう言う「ジョバンニ……僕もう行かなく

ちや」とカムパネルラはそう言った。

「…………え？」と完全に動揺した少年の姿がそこにはあった。

ジヨバンニ、彼の芝居が涙を誘うのは銀河鉄道の旅を通して、乗客との出会いを通して、きっとカムパネルラの死に気づいているから、本当は気付いているのに、現実から目を背けるその醜い人間らしさに共感するから……

「カムパネルラ、い、行ってくて……一体、どこへ？」と本当に怯えたように聞き、そこから少しセリフが止まった。

「ジヨバンニ、さようなら」カムパネルラがそう言った瞬間、ジヨバンニがカムパネルラの腕を掴んだ。

「いやだ！」と大声で、拒否して、そのままジヨバンニに抱きついて泣き崩れた。

これは芝居なのだろうか？ あまりに迫真のその表情と動作に、作りの物のように感じられない。実際に「誰か」がいなくなる事を拒んだ演技。そして、劇場の誰もが、その「誰か」が今、本当に死にかけているのを理解している。これも演出なのだろうか？ そうして、もう微動だにしないで、30秒は経過した。どうしてもジヨバンニは動かないんだ。そう思いかけた時、ジヨバンニはようやく手を離れた。

カムパネルラは心底安心したように顔を上げて「…………ああ、よかった、僕は行くよ」そしてスモークが焚かれる。少しして、舞台にはたくさんの人たちと中心に「ジヨバンニ」が一人だけで立っている。当然「カムパネルラ」はいない。

舞台の周囲の人々は口々にカムパネルラが川に落ちたんだ、まだ見つかからない、もうずっと探してるんだけど、もうだめです。45分も立ちましたから……と悲しい現実を伝えている。

その光景を確かに見届けて、ジヨバンニは「僕、もう帰らなくちや」と呟き、舞台から、離れて、幕が下りた。

カーテンコールのその後

劇が終わったから、優しいカーテンコールが始まった。たくさんのお客さんが拍手していて、けいちゃんが動揺してるのが見て取れる。ああ、ようやく演技が終わったんだと思うと様々な感情が湧き出してきた、ボロボロと泣き出してしまった。けいちゃんがもう本当に大きくなって、頑張ったんだと思うと、自分で自分の親心が怖いと感じるほど泣けてきた。

「ゆきちちゃん泣き方怖いよ……」とレイちゃんに言われるほどだ。

ただ、その舞台が終わった直ぐ後に悲報が流れた。巖さんが亡くなった。自らが脚本を手掛けた舞台「銀河鉄道の夜」その公開、初日に膵臓癌で亡くなった。これは、実はごく一部の人間はあらかじめ持病があった事は伝わっていて、けいちゃんは知っていたらしい。

また、墨字さんもけいちゃん経由で知っていたとのことだ。私に話せる内容じゃないのは分かるけれど、よくそんな状況で頑張っていたのだと思うと、もう少し頼ってほしかった気がする。

舞台は巖さんを欠けた状態でも、予定通り続けられる事が発表された。そんな中で、巖裕次郎さんの葬儀、告別式が開かれた。3000人を超える参列者が見守るなかで、演出家「巖裕次郎」の出棺が行われた。そこには著名人が大勢集まっていて、日本のアーティストがほとんど集結しているみたいだった。

私たちも一応関係者なので、礼服に身を包んで訪れたが、けいちゃんとは途中から合流する事になった。劇団の皆との話し合いがあるのだろう。そうこうしているとルイクくんが「あ、見て見て！」と言って指を指した。そこにはウルトラ仮面がいた。星アキラくん。たくさんの取材陣から、インタビューを受けている。ただ内容が酷かった。

「お母様の星アリスさんと続いて、親子二代での岩尾さんの舞台に立ったわけですが、当時のお母さんの評価に対して、アキラさんは今回の出演に関してモネだという声が上がっています。そういった声が巖さんの舞台に与える影響についてどう思いますか？」と馬鹿な

インタビュアーが、場所と時間をわきまえない発言をしている。

ただ星アキラくんは「どうぞ、僕たちの芝居を見に来て下さい、そこで皆さんの判断に任せたいです」とだけ笑顔で言っただけのけた。

そうして、劇団の皆の方へ行ってしまう。周囲の雰囲気は、なんとも言えない様子になって、私はそのインタビュアーのしかめ面が拝めて、ちよつと嬉しかった。

その後しばらく待って、なんだか変な様子のけいちゃんと墨字さんと合流した。後で何が中であったのか？ 墨字さんから聞いた話では、プロデューサーの「天知心一」という人間といざこざがあったらしい。どうもけいちゃんの経歴を材料にしたスキヤンダル記事を掲載しようとしたらしい。墨字さん曰く「悲劇のヒロイン」というタイトルで雑誌のネタにしようとしたとのことだ。

だがけいちゃんが、それを突っぱねたそう。周囲に強引に自分の現状を確認させて、ペンを取り出してその記事に直接修正を書き入れたそう。私は不幸じゃないし、友達いっぱいいるし、かわいい弟妹はいるし、私服はオシャレだとかなんとか、その様子を見て、その記事は載せない事になったとの事だ。なんか本当にけいちゃんが強くなっていったのが感じ取れる。ただ、墨字さんがいうには「天知心一」という人物は別に諦めた訳でなく、ただ今回は引いただけで、けいちゃんになんらかのアクションは仕掛けて来るといふ。売り出すには良い素材だと思われたらしい。

結局その後、舞台銀河鉄道の夜はトラブルもなく全日程を終えた。舞台は全日満員となりその評価も高く女優「夜風景」の認知度は著しく上がり、舞台やテレビなどのオファーが毎日来るようになった。私はその対応に追われて、少しのノイローゼ気味だ。本当にスタジオ「大黒天」の電話をずっと鳴っている。

墨字さんは簡単に「もう電話線を抜いちゃえよ、どうせ全部断るんだ」と言っている。「はあ、もつたない、せつかくのチャンスなのに……」と私は愚痴を漏らす、墨字さんの言い分も分かる。

「仕方ねえだろ、夜風には普通の女子校生に戻ってもらうよ」そう墨字さんは言った。

このやりとりの一日前、スタジオ「大黒天」に久々に顔を出したけいちゃんに墨字さんが「仕事？　ねえよそんなの」と投げやりに答えた。けいちゃんは驚いた風に「……………え？　だつて雪ちゃんがいつぱい来てるつて、舞台が終わったから……………」と戸惑いが隠せていない。私は「それが、けいちゃん……………」と言いにくい事をなんとか言おうとした時、墨字さんが割って入って「オフア―は全部断ったよ、お前にもう芝居はさせらんねえ……………」と代わりに言ってくれた。

けいちゃんは何が何だか分からない様子で「何言つて……………」と狼狽えている。墨字さんはそんな相手に向かって「カムパネルラを演じて一か月、公演を終えて一週間、揺らぎに気づいてんだろ？　自分の中の違和感に……………」と核心を付いた事を言った。

「……………な、何のこと」と一応、その動揺を隠そうとしているがあまり意味はない。

「それを抜きにしてもだ、お前は成長した。突出した才能はハイエナを呼ぶ、この先お前にとつての壁は芝居だけとは限らない」と冷静に墨字さんが諭しても「そんなの関係ない！　私は役者なの、芝居をしてない」と私は……………」と初めは怒りを露わにしたが、それとは別に相手の言い分も理解をしようとしているのも伝わってくる。

「自分の定義を増やす、それが芝居を続ける条件だ」と墨字さんが唐突に言った。

「は？」と言われた意味の分らないとぼけた顔のけいちゃんに「課題だよ、お前をより強く、より幅広くするための」と墨字さんが言った。「でも、自分の定義を増やすつて意味が良く分からない……………」と言葉の意味合いに関しての説明を求めると「じゃあ、わかりやすくこうする。学校で役者じゃねえ『普通の友達』を作つて来い、それまでは役者稼業は休止だ」と墨字さんは割と不可思議な課題を出した。

この一連の理屈そのものは何となく理解できる。けいちゃんは完全に、カムパネルラを演じきった。ただ、それはメソッド演技的に、死者の存在を演じてしまったということ、明らかに、日常から乖離した空間に、感情を置いてけぼりにしてしまっているということだと思

う。実際に、けいちゃんの様子はどこか臆気で、精神的に不安定な様子はある。

ここで、また役者として精神的に不安定な役でも演じてしまえば、何処か大事な感情に大きな傷を残しかねないという判断だろう。

ただ、墨字さんのいう学校で『普通の友達』を作るといえるのは何なんだろうか？ これまた定義が難しいが、この問題の前提にけいちゃんに学校に友達がいないというのがあるのが、なんともまあ物悲しい。けいちゃんの性格的に、いないというより家庭と生活の事を考えて、遊ぶ友達を作らなかつたのだと思うと割と最近、涙腺が故障気味な身からするとかなりくる物がある。本当に友達が出来る事を願っている。

「普通」の文化祭

そうして、けいちゃんの大変な学校生活が始まった。正直、結構苦戦するだろうなあと思う。今のけいちゃんは半分有名人で、あの性格だ。そう簡単に『普通の友達』を手に入れるのは難しい気がする。面と向かって、友達になろうとか言えば成れるものだとか思ってた。でも、ちよつと不安。あと、適当に連絡先だけ聞かれて、簡単に渡してしまいそうな気さえする。ああ、大丈夫かなあ……とそんな事を思っていたある日、突然けいちゃんはこんなことを言い出した。

撮影用機材が借りたということだ。どうして、そんな真似に出るのか、残念ながら分ってきたのが悲しいのだけれど、とりあえず、今は使っていない備品は貸すことにした。

私はとりあえず撮影用の機材の使い方、初歩的なピント調整方法やシャッタースピード変更、絞り方に、録画ボタンの使い方その他もろもろを簡単には伝えた。

「うん、覚えたわ、ゆきちゃん色々教えてくれてありがとう！」とけいちゃんは大荷物を持ったまま元氣よく答えた。本当に撮影用機材一式を持って、学校に行くらしい。

「本当に、それで学校に行くの……大丈夫？」と私が聞くと「うん、平気！」とけいちゃんは多分体力的な意味合いで答えた。いや、どっちかっていうと学校での常識的意味合いで聞いているんだけど……

墨字さんがそんな様子を傍から見ていて「撮影用機材一式貸してくれて、映画でも取るつもりかよ」と墨字さんが冗談の口調で言ったら「そそそ、そんなわけないでしょ、学校の放送係？」になっただけ！ 映画部のみんなで、一緒に映画を撮ってお芝居も友達も出来て、一石二鳥とか持っていないから!!」とけいちゃんは自分の計画をほぼ全て言ってしまった。

とりあえず、まあ送り出すことにはなっただけれど、墨字さんに「……いいんですか、学校でお芝居するつもりですよ……けいちゃん」と私が言うのと「まあ、止めるって止めるやつは役所じゃねえしな……」と諦観を持って答えた。

私はやや衝動的に「そんな無責任な！今のけいちゃんにお芝居なんてさせたら！」と最悪の事を考えてつい感情的に言ってしまった。「……学校の友達と映画作り……それも有りか」とボソツと墨字さんが呟いたので、ちよつと驚いてしまった。まあ、少し冷静になれば、墨字さんの言い分も分る。きつと撮影機材を貸さなかつたら、別の方法で、例えばスマホでもなんでも使つて、実行するだろうし、止めようがない。むしろ、今、最低でも学校の誰かと撮影しているという事実は友人を作るという点に関しては確かに前に進んでいる。

そして何日かたったある日、テレビでは「デスアイランド」の特報がニュースになっていた。「来春公開の本作、映画オリジナルのキャラクターの『ケイコ』に扮する少女『夜風景』ちゃんについてはご存知ですか？今日は新人女優『夜風景』ちゃんについて特集を……」とけいちゅんのニュースが流れている。これは一つの媒体だけじゃない、ネットでもSNSでもたったひと月でこんなに話題になってる。様々な記事が話題になっているのに今「活動休止中」にちよつと悔しい。

「……あの野郎」と墨字さんはボソツと言った。この意味を聞いたらあの「天知心」というプロデューサーが、何か裏で工作をしていたようだった。

そのせいかもしれないが、学園祭でけいちゃんが自分たちで撮った映画を流すという情報が、SNSで流れてきた。私のような関係者のエゴサーチに引っかかるような物ではなく、普通に数万単位のリツイートがされた内容だ。結局、学園祭では「夜風景」の名前があまりにも広がりすぎたせいで、大勢の一般客が想定以上に訪れ、学校側の判断で、映画の放映は差し止めになったとのことだ。

ただそんな中、夜の時間帯になってから無断で屋上から、プロジェクトクターを使つて学校の壁面に、無理やり映し出して映画を上映したとのことだ。当然、大騒ぎになって、けいちゃん含め、映画部の四人は停学処分になった。三日間の停学だからまあ軽いものではあるんだけど……

事務所にて「はあくついにお姉ちゃん不良になってしまった」とレ

イちゃんが言い「不良かあ、お姉ちゃんカツチヨイイな……」とルイくんが感想を漏らしている。けいちゃんは弟妹たちのこの反応に、かなり不満そうな表情をしている。

「で、でも、ほら停学なんて、皆やってるし、普通よ、普通」とけいちゃんがなんとか取り繕おうとしている。それに私は「普通じゃないよ、誰だよ皆って」と私がつっ込んでいると「リョーマは停学三回目だって、ほら普通でしょ」と言うので「いやいや」と言うと墨字さんが「そういう俺も、昔停学くらったわ、普通に」と抜かした。

「ほら」とけいちゃんは指さしているが「ほらって、この人の普通を鵜呑みにしちゃダメだからね」と私がつしなめると「え？ どうして？」

だって『普通』っていっぱいあるんでしょ？」とそう言ってきた。ああ、なんだ結局墨字さんの思惑通りだ。ちゃんと大事な物を掴んで帰ってきた。

墨字さんは語りかけるように、確かめるように「夜風、役者は楽しいことばかりじゃないよな……」と言いきけいちゃんは何が聞きたいのか分らないという表情をして、とりあえず頷いた。

「キャリア四十年目の名優すら未だ、天職かどうか分からないと抜かす、そういう世界だ」墨字さんは諭すように言い「もう役者だけが前の定義じゃない、お前はどんな『普通』だって選んでいい……それでも本当に役者を」と言いかけた時「うん、選ぶわ！ 早く仕事をさせて」とけいちゃんは言葉を遮って急かす様に答えた。さすがに墨字さんも請求に返答するこの答えには少し黙った。

「黒山さんが何を心配してくれるのかは何となく分かるけど、進路調査の第一志望、私は私の意志で役者って書いたんだから」とけいちゃんはその答えに納得したのか墨字さんは「柊、あれ受けるぞ」と最近、けいちゃんではなく墨字さん当てに来ていた仕事の案件をけいちゃんを主演でやる様だ。

「久しぶりにお前を撮らせよ、夜風、一発かましてやろう」そう墨字さんが言っただけだ。ああ、また大変なことになるなあと思っただけだ、ようやく本気で再開すると思うとちよつと嬉しい気もする。

その後少しネットを調査したら、停学処分になった時のけいちゃんの映画が少し映像として残っていた。学園祭に来ていた誰かが、学校の壁面に映してる映像をスマートフォンかなにかで、撮った映像が流れていた。おそらくあまり良い機材じゃないし、夜間だということと途中からしか映像が入っていないのと、ガヤガヤとした状況で撮ってるから音質がかなり悪い。

ふと、これのマスターデータはどこにあるんだろうと思った。けいちゃんに聞くと、映画を作ることに夢中で、誰が管理しているかなんてそんなことは考えていなかったらしかった。当然、ネット上で公開するかどうかなんて想像すらしていない。さらに学校側に許諾を得ていないから、できないんじゃないかなとも言っていた。

そんな筈はない、ここから先は映像作家として後始末しないと気が済まない。まずこの録画データは完全に価値がある。学校側の許諾や問題に関しても、どのような契約基準で撮影していたか？ 何て言うのはさすがに、ちゃんとしたプロダクションが裏に動いていれば、本人達の撮影がした情報なら、権利はこちら側にある筈だ。

スタジオ大黒天のチャンネルでYouTube等の動画サイトにアップロードするかどうか別にして、データそのものは欲しい。できればちゃんとしたマスターデータは、けいちゃんの友達の物でいいから、その人のチャンネルでいいから、ちゃんとアップロードしてほしい。

せっかくのこういうデータを無駄にしまっては意味がない。宣伝価値とかそういうことではなくて、せっかくの作品を一生、他人には見れない形にしてしまうのは一人のクリエイターとして納得ができない。実際契約の関係で、そうなってしまっている作品の多さを考えると、さっさと情報が欲しい。

結局、けいちゃんの友達で、今回の騒動の火付け役となった映画部の吉岡くんという存在をけいちゃんから聞き出して連絡を取った。電話口での彼は、初めもの凄く緊張していて、どうやら事務所の人から許諾を取らないで、撮影したことを怒られると思っていらしい。けいちゃんの事務所の人間だと分かるとものすごく謝られた。まあ、

実際に停学処分になっているから、叱られると考えるも仕方ないだろう。

ただ、その点についての誤解をなんとか解いて、録画データを見せてくれないか？ という内容だと分ると、即座に渡してくれる約束をしてくれた。これも怯えながらだったから、ちよつと申し訳なくすら感じた。ただ、今のネット上で画質の悪くて音質も悪いものが流れているから、せつかくの作品をアップロードしないか？ と提案した時は、少し黙って、やってもいいんですか？ と言った。彼はどうやら、けいちゃんの事を考えて、自分たちの撮った内容を世に出すのは、権利的に駄目なのではないかと考えていたらしい。

もちろん、発表してもらわないといけない。その為に必要なら学校に問い合わせもすると答えた。電話口でも喜んでるのが分かる。

その後は大して問題ではなかった。学校側も自分たちにインターネット上に公開させない権利を持っていない事は理解してくれたし、いまさら規制しても仕方ないというのも穏便に済ませられた。

その報告を吉岡くんに伝えたら、嬉々として即座にYouTubeのチャンネルを立ち上げて、「杉並北高校映画研究部」という名前で、一本の動画をアップロードした。

タイトルは『隣の席の君』

拙いけれど、未熟だけれど、稚拙だけれど、ちゃんと伝えたいメッセージはキチンと伝わってくる一本だ。ああ、君は本当に彼女の事が

……

新宿ガールの初期衝動

今日は撮影当日皆で目的地の「新宿駅」に電車で向かってる。そんな中で墨字さんがある話をし出した。内容はスターズに顔出しに行ったというなかなか凄い内容だった。巖さんの件について、あの星アリサさんに会いに行ける繋がりがあるのは普通に凄いが、後半からおかしな様になった。百城千世子ちゃんに会ってから、けいちちゃんの話になったそうだが、この辺りから明らかに誇張が入っていた。お互いの実力をけん制し合っていた会話からこんなふざけた会話になった。

「そこで俺はこう言ったわけだ、だって夜風が言ってたよ『私が千世子なんかには負けるわけないやん、うける』そしたら千世子が鬼みみたいな顔してさ『チヨコヨナギサンクウ!!』ってさ」明らかにお互いを馬鹿にしてる、このヒゲ。

「千世子ちゃんがそんなこと言うわけないでしょ！ 訴えるわよ！」と本気で怒っているけいちちゃんがいた。

「ええくでも言ってたよ」とふざけ通しのバカヒゲがそんな事を言うので「車中ではいい子にきなさい！ ルイとレイを見習って！」とこの二人を注意した。本当にこの人たちは小学生でも守れるマナーを守れない。まあ、今日に限っては私もその一人に加わるのだが……

そういうしていると「クロちゃん、これからお姉ちゃんの仕事って本当？ 全然そんな風に見えないんだけど……」とレイちゃんがそういうので「本当だよほら、カメラ」と私が答えると「クロちゃんが仕事か……夢みたいなこともあるもんだなあ」と純粹無垢な答えを言ってきた。いやはや、そりや子供から見ればそう見えるよね……私もちよつとそう思うもん。ただ流石に注意くらいはしておこう。

私は「本番前に女優怒らせて、どうするんですか……」と至極当たり前な事を言うと「士気を上げたただだよ」と墨字さんが屁理屈を言うので「士気ってそういうもんじゃないでしょ！」と返すと「それはどうかな？」とニヤリと笑った。

そうして墨字さんは「なあ、夜風」と話しかけた。先ほどの事をま

だ怒っているのか「何よ、ヒゲ」と返答すると「お前と千世子、どつちの芝居が上だ？」とド直球の質問をしてみせた。

「な、何その質問、千世子ちゃんは私よりずっと先輩でとつてもすごいし……」と言葉を探しながら、答えようとしているが、少し間が出来た。

「けいちゃん？」と私が聞くと「私と千世子ちゃん、役者としてどつちが上かそんなの……そんなの私が決めることじゃないと思う」と神妙な面持ちで答えた。ああ、本当に士気が上がってるなあと感じる。

そんな中で突然「ところでヒゲ、どうして突然私を撮りたいなんて思ったの？」とけいちゃんが聞いた。そう言えばまだちゃんと言葉にしていない。

墨字さんは素っ気なく「あ？ そりやお前がいい役者になったからだろう？」とカメラを触りながら当たり前のように答えた。

けいちゃんはその言葉に納得が言ったかのように「ふーん」と言っている。もの凄く喜んでるのが表情と声質から伝わってくる、とてもかわいい。

電車のアナウンスが聞こえる「お次は新宿、新宿」とそうすると今まで少しだらけていた二人がピリっと緊張した「本番の合図ね」とけいちゃんが言う。「ああ」と言いながらハンディカメラのセットイングを済ませ、二人は立ち上がった。

墨字さんは「準備はいいな、夜風」と確認を取るとけいちゃんは頷く。

「くだらねえメディア戦略に遅れを取っちゃまったが、お前の芝居を世界に届けるのはこの俺だ」と墨字さんが言う。「うん、よろしく」とイヤホンを付けながらけいちゃんが真剣そうにそう言った。

電車内は騒めきの声が広がっている。

「あれ撮影？ え、ここで？ てかあの子見たことある。夜風景？

あれ本物？」と何人もの声が広がっている。

思わずレイちゃんが「ゆ、雪ちゃん撮影してもっと大勢でやるんじゃないの？」と不安げに聞くので「うん、でも今回は墨字さんの居酒屋コネクションで知り合ったバンドのMVでね、音楽は後から付け

足すから二人だけでいいんだって」と答えた。

「でもカメラマンもクロちゃんがるの?」とレイちゃんは本当に心配そうに言うので「めっちゃ不安げだね、大丈夫だよ、元々墨字さんはカメラ一つで、世界を駆け回ってきた世界有数のドキュメンタリー映画監督だから、人を撮る力は本物だよ」とあの人の数少ない本当に尊敬できる所を私は少し自慢気に喋った。

「で……でもこういうのって許可とか……」とレイちゃんが言うが、ずっと私は立ち上がり、カチンコを持って、レイちゃんが止めるのも無視して、お出口は左側と聞こえた瞬間。

「よいい、スタート!!」とカチンコを鳴らした。そして勢いよく二人は列車から飛び出た。人混みを全速力で、駆け抜けていく。その光景はともアツペンポで、彼女は踊っているというよりもクリスマス朝、プレゼントを目の前に、はしゃいでいる子供のよう。

ただその姿は全力で喜びを表現している最高のパフォーマーで、それをこの新宿駅という大勢の人の前で、音楽から流れる初期衝動に任せて、ただただ身体を自由に開放している。

その姿を墨字さんの抜群のカメラワークで抑えていく。誰もがその光景がとても信じられない様子で眺めている。映画のスタントマンがやる様なあり得ない動きをぶっつけ本番で、しかも一曲分のMVになるようにアドリブでこなしている。ああ、この二人はやはり化物なのだ実感する。

言葉で、この凄さを表現するのはとても困難だが、この呆れかえる様な動きの数々はただただ、音楽の楽しさを体いっぱい表現しようとしている、誰もが持つている原初的欲望。

それが此処まで美しく綺麗に表現できるなんて信じられない。本当に喜びのあまり身体を動かさずにはいられないというその表現は圧倒的だった。

子供たちは「クロちゃん凄く楽しそう! でもクロちゃんどうして、誰にもぶつからないの?」と言っているがそんな事は実は大したことじゃない。本当に凄いのは墨字さんの降ったフレーム内に必ず「夜風景」が飛び込んでいくように映し出している事、墨字さんが「夜

風景」の動きの先を読み始めて、役者と感情を共有し始めているということ。

新宿駅それは一日平均乗車数350万人、世界で最も人間が行き交う駅で撮られたその映像は女優「夜風景」の知名度を決定的なものにすることになる。

ああ、一つの舞踊のように可憐で、幼い子供のように無邪気で、重なる音楽が見事に動きにマッチしている。

ちなみに撮影は完全にゲリラ的に行い、撮影許可なんか取れないだろうから一切取っていない。だから十五分以内にこの撮影はサツサと終わらせた。予め、新宿駅から即座に出られるように、出入口付近に車も用意して駆け込むように、逃げるように急いで、脱出した。ちなみに子供達に真似しちゃダメだからねと言うと「大人もね！ 人混みでは走らない！」ときちんと叱られる羽目になった。

二つの恐ろしく、素晴らしき座組

あの新宿での映像はそのバンドのMVとしてYouTube等の動画サイトに流れて、監督やクレジットに関しては墨字さんの名前は敢えて明記はしなかった。だけれど当然として、写っているのは「夜風景」だというのは見ればわかる。

そんな有名人効果も多少あるだろうが、その映像自体が凄まじい再生回数を稼いで、日本のみならず、世界中で評価されることになった。やはり、あの映像のクオリティがとてつもないのは見れば簡単に分るんだろう。だからスタジオ「大黒天」は、またあの騒がしい電話が鳴り響くことになった。ただこんなにも大きな騒ぎになったのに、黒山墨字の名前を出さなかったの少し不思議だ。

ただまあ、元々あまり名声にこだわる人ではないし、あくまでもけいちゃんを撮りたかったというのが本音なのだからそれでもいいのかもしれない。あくまで、主役は「夜風景」なら自分は重要視しないというスタンスを貫いたのだろう。

ただそうこうしてうちに、とんでもなく大きな仕事が舞い込んだ。これに関してはちよつと何とも言えないことだ。あの「天知心一」プロデューズで、しかもキャストが「百城千世子」「明神阿良也」そしてあの「王賀美陸」が揃えるらしい。

「王賀美陸」についての説明は、簡単に言えば元スターズの俳優で、現在は拠点をハリウッドに移した、世界的な日本人俳優だ。もう、日本で活動する事はないだろうとされているような超大物がこの舞台の為に帰国しているとのことだ。

これをけいちゃんに受けさせるにしても断るにしても、とんでもない座組が整っている。ああ、墨字さんは多分、彼の事をハイエナと言っていたのだと思うけれど、ハイエナを舐めてはいけない。ここまで狡猾に、抜け目なく、計算高い存在が「味方」になりたいといってきた時の対処は本当に難しい。

墨字さんはこの件は、妙に達観した口調で、私に語ってくれた。このキャスティングは、完全に「夜風景」という存在を中心に、最高の

敵方二人と最強の味方を用意したあいつの一世一代の大博打との事だ。初めは敵という意味が分からなかったが、聞いていると恐ろしい内容だった。

「ダブルキャスト」一つの役に二人の役者をあて、一部又は全てを交代で出演させ、上演する手法。そして今回は一つの脚本で、完全に二つの舞台を作り上げて、役者は全て交代させて、その舞台のどちらが優れているか比べるというものだった。つまり、今まで共演してきたあの二人は敵で、あのスターが味方になるということだ。

後日、事務所にてけいちゃんが墨字さんからこの舞台の正式な説明が行われた「阿良也くん！ 千世子ちゃんの共演相手って阿良也くんなの！」とけいちゃんは戸惑っている。どうやらダブルキャストそのものはもう知っていたらしいが、共演者までは知らなかったようだ。

墨字さんはすました顔で「そうだよ言ってなかったっけ？」と答えたと「聞いてない！ っていうか、黒山さんから今回何も聞いてない！」と怒っている。

墨字さんは「今回、阿良也も敵方だよ、千世子とそろってな、怖かったら辞退してもいいけど」といつもの煽る様な口調で言うとなっ、そうやってすぐ私の挑発す……」と怒った口調から、急に少しけいちゃんも黙って、何かを思い出すように、自分の意思を確認するようにこう言った。

「怖いけど、それ以上に楽しみ」と覚悟を決めたように言っただけだ。

その様子に墨字さんは少し楽しそうに微笑みながらテレビを指さし「ちなみにこいつが、お前の共演相手な」とテレビの中の「王賀美陸」に視線を向けた。

ちなみにその時、王賀美は「桃尻だよ、桃尻千世子だよ」と明らかにけいちゃんが激怒しそうな事を言っていた。いや、しそうではない実際に激怒した。

結局、正式に文句の一つでも言わないと気が済まないとか言いながら、この舞台に立つことをけいちゃんは決めた。それは「天知心」のこの意地悪な座組に挑むということだ。

その為に、一度顔見せに行くことになった。ここで、何が起こったの

か、後でけいちゃんに聞いたら、王賀美さんはやはりスターというか、かなり可笑しな人だったらしい。いきなりお姫様抱っこしてくるし、バラの花束は渡されそうになったし、子ども扱いしてくるし、お肉もご馳走してくれたし、まあ総合して非常識な人だという。それが全て本当ならかなりの破天荒な人物だが、ある意味イメージ通りの大物だ。

また、プロデューサーの「天知心一」という人物について聞くと、なんだか少し歯切れが悪い答えが返ってきた。どうも初めは彼について嫌悪感をけいちゃんは隠そうとせずに、その思いを直接言っていたらしいが、その言動を受けて「天知心一」は無表情のまま涙を流したらしい。そしてけいちゃんが喜んでくれると思って、頑張った旨を伝えてきたとのことだ。

ある意味、凄く嘘っぽい感情表現だが、半分は本当なのだろう。涙を無表情のまま流せる人は一定数いるし、それを交渉の武器にする人間は信用できないが、実績として今の日本で考えられる最高クラスの座組を用意しているのも事実だ。

けいちゃんはその事実を含めて、きっちり泣かせた事を謝罪をして、自分が望む素晴らしい舞台で、こんな凄い人たちと芝居が出来るなんて、とても幸せだと、ありがとうと、必ず良い舞台にすると述べたらしい。実際に彼がしたことはけいちゃんにとってはとんでもないチャンスなんだから、そう答えるのも礼儀なのかもしれない。

まあ重要なのはその後だ。実はこの段階では、まだ台本が上がっていなくて、台本はただいま執筆中で、まだ両方の演出家も完全には決まっていない。ただ、基本はある新進気鋭の作家が中心になっているらしい。

ただこの舞台「羅刹女」ダブルキャスト公演は、この四人の人物を中心に作成することはすでに決まっていて、数十台のカメラで撮影し、全国のシネコンや動画配信サイトでも公開予定、演劇であり映像になる、国内過去最大規模の舞台になるとのことだった。

他のキャストはオーディションを終え、ただいま審査中で、来週には稽古に入るらしい。本当にとんでもない舞台になった。

ただ、今回は一つ明確にある策略に巻き込まれた。スターズの運営が「百城千世子」を使いたいなら、演出家に関しては「黒山墨字」をキャスティングしろというものだった。これで、本来ならけいちゃんとう賀美さんの陣営に入る筈だった、私たちスタジオ「大黒天」は分断してしまうことになった。

流石に横暴かと思っただが、この提案はあくまで、スターズ陣営が黒山墨字の才能を買っている証拠でもあり、スターズ主催の映画である「デスアイランド」のキャストに選ばれた時に「お願い」をした過去があり、そもそもけいちゃんが発見をスターズから引き抜いた以上、大きな借りはある。

ここで、この提案を受けなければ、この企画・計画は破綻してもしかたない。受けざるを得ないのが現実だ。それ故に、私たちはサイド「乙」に入り、サイド「甲」のけいちゃん達と事実上敵対関係になった。

サイド「乙」の最初の顔見せの時「演出の黒山だ、色々あって巻き込まれた……が仕方ねえと思って、此処にいるよろしく」と墨字さんがそう言った。ここから、けいちゃん達との戦いが始まった。

天使が悪魔に変わる時

まず初めに墨字さんは「あく阿良也、この後どうすりやいいんだっけ？ 演劇の稽古って飲みにも行くのか？」と冗談か本気なのか分からないことを言って、それに「その前に読み合わせだろ？」と阿良也くんが返した。

「俺とあんたの絡みだ、百城千世子」と何故かフルネームで呼んで「うん、よろしくね」と千世子ちゃんが答えた。流石にこの日には台本が仕上がっていた。

「羅刹女」 夫・牛魔王の女遊び、息子・紅孩児の悲報、日々の怒りを募らせる天の風の神・羅刹女、そんなある日、天竺への旅を歩く孫悟空が現れ、彼女の芭蕉扇を貸せという。羅刹女は夫や息子への思いをぶつけるかのように孫悟空と大立ち回りを演じることになる。というのが演目だ。

基本的には『西遊記』の鉄扇公主（日本名・羅刹女）のどの有名な戦いの模様を演劇として、きっちり落とし込んだ物で、この力強くも悲しい女性の心の模様をどう表現するかが、鍵になるような作品だ。

読み合わせをすることが決まったら、墨字さんの指令で、部屋を真っ暗にし、明かりはロウソク一本。それに火を灯しながら、私は「フフ、修学旅行みたいでワクワクしますね」と感想を言うと「百物語じゃなくて？」と言う風阿良也くんから返ってきた。確かに今からやる事にはそっちの方が近いかもしれない。

「あの……これは？」と沙悟浄役の子、確かスターズの和歌月さんから墨字さんに何をしているのか尋ねた。墨字さんは「あ？ ムード作りだ、読み合わせだつて言うから」と素っ気なく答えた。和歌月さんは分かったような、そうじゃないような何とも言えない顔をしていると、阿良也くんが「……ああ『火焰山』か」とそう答えた。このロウソクだけの明かりだけでの本読みは、劇中の舞台である火山の中の風景をイメージしてもらったためだ。どの程度効果があるかどうかはわからないが、雰囲気は確かにある。

それに一応異を唱える形で「でもこれじゃあ、台本が読めないんじゃない……」と和歌月さんが言う。「お前マジメちゃんだろ、もうセリフくらい入ってんだろう」と墨字さんがからかいながら言った。

そう言われた和歌月さんは「まあ一応……マジメちゃん……」と言つて了承したが、少し引つかかる所があつたようだ。これに関しては、墨字さんの性格上慣れてもらうしか方法がない。後で、謝つておこう。

墨字さんは「まあ百戦錬磨の集まりだ、問題ないだろ、ざつと通しで行つて見せてくれ」というと早速、千世子ちゃんが立ち上がつて、演技を始めた。そういえば阿良也くんの芝居は私たちはある程度は見てるし、知っている。私も墨字さんも「百城千世子」の演技は生で見ただけではない。テレビの中の彼女とけいちゃんから聞いた話だけだ。スターズの天使の演技はどういうものなんだろうか？ 読み合わせが始まつた。

始まつてすぐに、天使のようだという例えが嘘のような怒りに満ち満ちた女性がそこにはいた。確かに役柄上そうするのが正しいのかもしれないけれど、今までのイメージと違い過ぎる。

「ああー……この声は私の中から腹から聞こえる、この猿め！ 私の中に入ってるのね！」その台詞は異様なまでに泥臭く、それでいて実際に今まさに怒り狂い、冷静さのかけらもない、可憐とはお世辞にも言えないその光景。

「ああそうさ、そのうちわを貸せ！ そうすれば出て行ってやる！」そう言つて、阿良也くんは孫悟空の荒々しい野生児らしき、傲慢さ、不遜さを流石の演技力で表現していた。

そうこうしていると千世子ちゃんが呻き声を「うっ」と荒げ「ぐっ」と腹の中で暴れている存在を意識させ「かはっ」と吐き出そうとして「あ……がは……」と辛そうに身もだえている。慌てて和歌月さんが「千世子さん大丈夫ですか……!?!」と近寄ろうとするが「おい、止めんな芝居だ」と墨字さんが止めに入る。

本当にこの光景が芝居だとは見えない。場面的には確かにそういうシーンだが、だがこれじゃあ、まるで経験から芝居を作る方法「百

城千世子」がメソッド演技を行っている。

周囲はこの芝居にただただ唾然とするしかなく、賞賛さえ遅れて言うしかなかった。

阿良也くんが「……ふふふ、可能性が見えてきたな」というと「変身はあなた達の専売特許だと思っていた？」と千世子ちゃんはまだ息を荒げながら応えた。本当にメソッド演技を体得しようとしている。この技術は別に天賦の才努がなければ、会得できないものではない努力次第では誰もが体得しうる物だけれど、諸刃の剣ある事はけいちゃんを見ていれば分る事だ。

墨字さんはそんな光景を目にして「百城、俺は役者の演技方針に口出しするつもりはない」と言い「はい」と千世子ちゃんは応えた。再度確認するように「本当にいいんだな」と墨字さんが言い、周囲は不気味な沈黙で支配されたが「うん、勝てるなら」と彼女は言っていた。

この時、私は少しだけ、何でこんな問答をしているのか、メソッド演技を修得したいならそれでいいんじゃないかと軽く考えていた。これは実に浅はかな考えだった。この後の訓練を思えば、この決断が彼女の今後を決定的に決めた瞬間だったからだ。

後日、流石にこの事はけいちゃんにも伝わっているから事務所にて皆でご飯を食べている最中に、話し合いというか口喧嘩が始まった。「だから、俺がどこでなにを演出しようかと勝手だろうが！」と墨字さんが言う。「だから別に、そこに不満はないって言ってるでしょ！」とけいちゃんが言い返し「天知と王賀美のバカが、バカやってるのも俺には関係ねえ」と言い返すと「分かってる！　ただ私は王賀美さんのお芝居の話を」と言っている。ああ、ほんとに口喧嘩だなあと思っている。急に本気の声質で「夜風、俺は千代子とあれを勝たせるつもりでいるぞ、お前じゃなくてな」と墨字さんが言った。

けいちゃんも先ほどまでの勢いはどこへやら「……分かっている」と一応いうが「わかってねえよ、お前は要するに相談しに来たんだろう、敵である俺に、少し甘いんじゃないかねえのか」と墨字さんが問い詰めるよ

偶然の霹靂

その情報が入ってきたときには大々的にニュースになった後だった。結論から言うと「王賀美陸」が早々に帰国しようというのだ。勿論短期的な急用などではなく、この舞台そのものを下りるために、去ろうとしていたらしい。理由としてはあくまで彼は「新宿でのMV」あの映像を見て出演を決めたらしく、それが叶わない、演出家が「黒山墨字」でないなら、出ないというスタンスを取ったらしい。

どのように「天知心一」が説得したのかは知らないが、それだけで充分に「王賀美陸」にとっては演ずるに値しないのだろう。

一部ニュースではすでに、空港に押しかけて、生中継で「王賀美陸」の一挙手一投足をカメラで捉えようと必死だ。それに伴って周囲からは何らかのコメントを引き出そうと、様々な内容が飛び交っている。やれ、何度目のドタキャンだの、帰国の理由はスターズとの確執だの、舞台はどうなるんですか等の様々なインタビュともいえないヤジの嵐だ。聞きたい気持ちは分かるが、そんな言葉は王賀美さんのこの言葉で吹き飛んだ。

「うるせえなあ、どうしてお前らにそんなこと教えないとならねーんだよ！」

まさに、傍若無人である。しかし、それこそが「王賀美陸」の魅力でもあるし、圧倒的存在感の力強さがこんな行為を許している元凶にもなっている。

そして本当に、ただ目に付いたという理由で「あ、そっぴや忘れてたなあ、天知ちよつと来い」と天知さん呼び寄せると「こいつの名前は『天知心一』いわゆる悪徳プロデューサーと言う奴だ、各社気をつける、以上だ、じゃあなあ」と今の怒りをぶつけるようにカメラに向かつて言い放った。これで、恐らく天知さんはこの業界にはいられなくなるだろう。

そこに竹光くんという、たしかサイド「甲」の猪八戒役の子が現れた。少し離れた地点だからテレビ越しには何を言っているのかは分からないが、何を言っているのかは想像が付く。せつかくのチャンス

を、こんな大舞台を、誰だつて普通は逃したいとは思っていないはずだ。思いの丈をぶちまけているんだろう。

けれど、やはり王賀美さんの決意は変わらないのだろう。先ほどまでの怒気を荒げた口調から優しい口調というか聞き取れない音量で、何かを竹光くんに喋っている。それで、竹光くんは納得してはいないようだけれど、表情から何か大事な事を言っているようだった。

竹光くんはそれでも食いついて、何とか引き止めようとしているように見える。けれどももう言葉はまるで届いていない。

ただそこに「スターズの天使」が現れた。突然の彼女の登場に顔を明らかに嫌そうにそちらに向けるが、とても優し気に「私と遊んでよ、王賀美さん」といつものカメラを意識した口調と声量でその場の空気を持つて行った。ああ、流石「百城千世子」だ。

その後の「桃尻」といういつもの王賀美さんの冗談を軽く訂正しながらいなして「私のこと、名前から覚え直させてあげる、きつと楽しいよ」と彼女はカメラの前ということを完全に意識しながら、誘惑して見せた。それでも、なお立ち去ろうとしている所に、今度は「明神阿良也」まで現れて、止めに入った。

彼は天性のカリスマ性と迫力で「気に入らないなあ、俺もこの女も化け続けている、あんたの本当の遊び相手は『夜風』じゃない、俺たちだ」とぼつちりマイクに聞こえる大ききの声量で言つてのけた。

もはや、ここまで来るとヤラセにしか見えない光景だ。そして駄目押しに、彼女がやってきた。もちろん女優「夜風景」だ。

周囲の騒めきと驚愕と疑いの眼差しは、今回の舞台の主演四人のオールスターにただ注がれていた。

流石に王賀美さんも「……今更、何しに来た、新宿ガール」と尋ねざるを得ないようでそう聞くと「読み合わせの続きを」とけいちゃんは言った。

「……期待できるのか？」と王賀美さんが聞くと、けいちゃんは手を前にしてかざして、芝居に没入し始めた。

「ああ、腹が立つ、腹が立つ、あの男は毎年、毎年、妾のところへ！」その迫力は周りに誰がいるだとか、カメラに撮られているだとか、

そんな些末な事は感じさせない、怒りに満ち満ちた独白だ。

「私というものがありませんが、ああ、この怒り、どうしてくれよう」

そう彼女が不気味に微笑んだ瞬間、雷が落ち、雷鳴が聞こえ、辺りは暗闇に変わった。勿論、ただの偶然の落雷だ。ただ、その光景を見ている誰もが彼女の仕業に思えるほどの迫力が其処にはあった。

「おい、俺だ、孫悟空だ！ 扉を開けてくれ！」王賀美さんが遂に応えた、周囲は大きく騒めいている。そこから、舞台の触りの部分、台本の読み合わせが始まった。ところどころ、王賀美さんが脚本を覚えきっていないのか、アドリブでこなしているが、とてつもない迫力で芝居が繰り広げられていく。

そこには確かに怒りに満ちた人智を越えた女性がいて、それを破天荒な存在感を放つ男性がいて、お互いが常軌を逸した「読み合わせ」という表現のぶつかり合いを行っていた。

もはや、この芝居を見せる為にこれまでの全ては宣伝のためのヤラセだったんじゃないかというほどにあまりによく出来上がっているが、落雷なんか演出で落とせるわけない。演出で空港を停電にできるわけない。全て真実だと考えると本当に恐ろしい物がある。

この映像はすぐさまニュースになって、放映されてこの舞台の宣伝に大きく影響を与えることになった。と同時にサイド「甲」の圧倒的芝居の完成度も知れ渡ることになった。

この事件は正直、舞台を運営する側からすると結果としてはなんとか丸く収まったが、サイド「乙」の人間として考えると、初速のアドバンテージは完全に取られた印象だ。けいちゃんが有利になるのはいつもなら嬉しいけど、今回ばかりは違う。

ちなみに後に天知さんから、今回の顛末を関係者一同に伝えられた。なんと、ニュースになった映像の殆どが事実で、あの場でけいちゃんが登場しないと、この計画自体なくなる寸前だったらしい。唯一の報道上の間違いは自分は「悪徳」なプロデューサーではないという点に関してのみだという主張には呆れかえった。

これは殆ど冗談の様なものだが、たちが悪すぎる。まあ、元々こういう人だから「王賀美陸」をキャスティングしようなんて考えに至っ

たんだろう。本当に信用「は」してはいけない人物だと確信する。だから、あくまでお互いに利用価値がある間のみ、協力をしよう。

ただ、こうなることはある程度分っていたのなら、何故墨字さんは「スターズ」から直接指名を受けたのか？ もしかするとスターズの運営「星アリサ」と「桃城千世子」のこの舞台に対する考え方は違うのかもしれない。

変身の代価

「ああ、腹が立つ、腹が立つ、あの夫は毎年、毎年、妾のところへ」そう言いながら迫真の演技を「桃城千世子」は危機迫ったような口調で演じている。

単純に凄い、今までの天使のイメージなんてまるでない。流石、スターズの看板女優だと言える。ただ、あくまでそれは「普通」の女優としての評価だけだ……

「ああ、この怒り……」と千世子ちゃんが言った瞬間、そこでふと急に芝居を止めてしまった。

ちよつと間をおいて和歌月さんが「千世子さん？」と呼びかけると、はつと彼女は意識を取り戻して「ごめんなさい、もう一度初めからお願ひします」と謝って再度始めた。

墨字さんは「……ああ」とだけ言って、練習は再開した。だけれど、明らかに雰囲気は可笑しかった。

しばらくして、スターズの役者陣が今日の稽古は切り止めにして、帰っていく時に、墨字さんに少し呼び止められた。

呼び止められた理由はある意味簡単な質問だった。

「柎、お前の目から見て、夜風と百城、どっちの芝居が『羅刹女』らしい？」

それは、いままでけいちゃんを見続けてきた、私にだから聞きたいこと、そして同じことを墨字さんも思っている。もしこれが、ただ演技が上手いだとか、可愛いだとか、魅力だとかという基準ならどうにでも言えただろう。

実際に、千世子ちゃんは元々と演出家いらずと周りから言われるほど、自分自身の見せ方を熟知してる女優だ。ここ最近では、メソッド演技の修得で、表現力を演劇でも充分通用するレベルまで調整している。機械的な可愛らしい天使の仮面ではない、とても感情的な芝居も出来るようにしてみた。

単純な演技力なら、まだまだ技術的な面で、柔軟な対応の出来るプロフェッショナルな千世子ちゃんの方が上だろう。だけれど、あの空

港での芝居を視てしまうと「羅刹女」という異質な存在を演じる力は、やはり異質な存在である「夜風景」に軍配が上がってしまう。

けいちゃんは一度、役にのめりこめ「さえ」すれば後はただただ、周りを圧倒する存在に変わっていく、変身とでもいう様な最強の实在感を手に入れる。だから私は、その答えを簡単には言えなかった。言えなかったという「こと」が答えであるかのように、墨字さんはこう言った。

「百城の芝居は確かに化けた。だがあの手法を、メソッド演技を選ぶということは今まで奴が培った物を捨てるということ、天使であることで得た、地位を人気を名誉を全て捨てるということ、向こうには王賀美もいる、今の芝居ままじゃ勝てる見込みはない、奴の選択正しい、だがだとしても……」と自分で、今の現状を再確認するかのように私に言ってきた。

答えはすでに墨字さんの中にある様だ。ただそうこうして、時間が過ぎていくと、墨字さんのスマートフォンに千世子ちゃんから連絡が来た。可愛らしいスタンプと「黒山さん、今夜空いてる？」という誘い文句だ。この誘いに乗らない男はいないだろうが、流石にそういう意味ではないのは分る……が、一応、相手は未成年である事を念押しして置いた。

翌日、手を出していないかどうかを確かめる為に全力で、墨字さんに何の話をしたか聞き出した。墨字さんは唐突と語りだした。

「まず、凄いとこに住んでたなあ……俺の生涯年収以上稼いでないが入居できないような高層マンションだった、まあ星アリサが手配したものだったらしいけど、あと、明らかに一室ヤバイ音というか、足元を這いずり回る音が響く部屋があったな、何かを飼育しているだろう、あそこに入る勇氣は流石になかったなあ」と千世子ちゃんの意外な一面が見て取れたが、ここからが本題だ。

次に百城は今の状況を良く分かっていて「今、自分がやってること、まさに背水の陣で、勝っても、負けても、今の立場は失うことになる、そしてここまでも勝てる保証はない、黒山さんも悩んでくれているんだよね」とゆったりとしたトーンで、事実を確認するがごと

く喋ったとのことだ。

「俺はここで、コイツは夜風とは違う頭のいい『ガキ』だと、全部わかって、わかった上で、それでも全て捨てて戦う気である。此処で俺は本当に、気が変わった。あんまり乗り気じゃなかったが、本当に勝たせてやりてえと『夜風』じゃなくて『桃城千代子』を……。」と墨字さんは思ってしまったらしい。

そうして百城は「私ね、ずっと見てきたの『夜風』さんのことずっと」とそう言っただけでテレビ画面に「夜風景」の生み出してきた今までの映像の全てといってもいいようなものを表示して喋り始めた。ゆっくりとそして徐々に力強く、そして怒りに任せて、彼女のいつもの状態から切り離されて、感情の赴くままに独白した。

「十年、私が築いてきたものを『夜風』さんはたった半年で追い抜こうとしている。最初の出会いはモニター越しで、何て自分勝手な芝居かって思った。でも彼女は成長した。わかっている彼女を成長させたのは私だということ、わかっている彼女は天才だけど、私はそうじゃないってこと、私はただ人より少し器用なだけの普通の女の子だということ、女優だつて憧れた人に煽てられて始めただけ……この世界に選ばれた『主人公』じゃないわかってる、でも、やっぱり負けるのは悔しいんだよ、悔しい……！」この時の表情は後から聞いたら、羅刹女の演出で最もイメージした時の顔だったという。

山野上の書いた羅刹女は怒りの物語だ。炎のように自分の内側を燃やすとも嫉妬とも自己嫌悪ともつかぬ怒りの物語。だから墨字さんはこう思ってたんだ。自分の内側と向かい続けた夜風に有利で、その逆をし続けてきた百城には不利なそういう舞台だと。

ただこの言葉で、この感情の表れで、墨字さんは決意したらしい「天使を捨てる覚悟はいいな『桃城千世子』もつと夜風を妬め、愛せ、憎め内側の炎で身を焦がせ百城、俺が倒させてやる『夜風景』を」そう言っただけだ。この本当のその感情の炎だけは誰にも負けない。だから、本気で勝ちに行くつもりだと、だから終、協力してくれと言われてしまった。この時の墨字さんの目は久しぶりに本気の目をして

「王賀美陸」来日より三週間、空港騒動より二週間、年越しを得て舞台「羅刹女」は本番まで二ヶ月を切ろうとしていた。舞台「羅刹女」は活劇であり殺陣を要する。サイド「甲・乙」共に全体は殺陣師の指導のもと立ち稽古を始めていた。

私はそんな中、サイド「甲」練習場に足を運んだ。「あの、休憩中ใช่ไหมせん。けいちゃんちよつといいかな？」えつと驚く稽古につかれてうつむせに寝そべってるけいちゃんがそこにはいた。

けいちゃんが確認するように「黒山さんが私を？　今、稽古中よね、本当にお邪魔しているの？」と聞くので「うん、どうしても連れて来いってごめんね」と私が謝ると全体脚本担当兼サイド「甲」の山野上さんが「いえ私もぜひそちらの稽古を見学してみたかったので」そしてサイド「甲」の沙悟浄役の朝野さんが「敵情視察ってやつですね、ワクワクだ」と言つて完全に来る気満々だ。いや本当は、けいちゃんだけ来てもらう予定だったんだけど、流星に空氣的に断れない。まあいっか、生の「王賀美陸」拝めまし……

ただ、こちらの真意をまるで読み取れないで、けいちゃんが「私も千代子ちゃんと会いたかったの！」と言つてきた時は、少し心が痛んだ。

稽古場の前まで来たときに「……ごめんね、けいちゃん」と私は先に謝っておくことにした。きつと見たくないものを今から見ることになるから。

その言葉に少し驚いた後に、何かの物音に動揺したようで、ドアノブを持ったまま開けようとしなない。「どうした？」けいちゃんに王賀美さんが言う。それに意識を取り戻したのか「あっうん」といつてそうしてドアを開ける。

そこには圧倒的な殺陣を繰り広げながら獰猛な野獣が二体、木片を振り回していた。

「羅刹女よ！ 寂しいなあ！ 悔しいなあ！ なあ、あんななぜ今一人で戦っているんだ！ あんたの旦那の牛魔王のオジキはどうした!？」と野生児というか天然の怪物というか、才能の塊のような力強い演技は流石だ。

「え？」とけいちゃんが漏らした理由は別だろう。きつと、この中でも変身してみせた元天使、愛らしい偶像、可憐という言葉はこの子の為にあつたというべき少女の変貌っぷり故にだろう。

「黙れ、この猿！」そう擦り切れた声を荒げ、感情の赴くまま怒りを発露し、ただこの情動に身を任せていた。きつとけいちゃんには、本当に人が変わったように見えるだろう。

「喉が潰れてるな」と平気な顔で冷静に王賀美さんが言った。私は「千世子ちゃん全然休んでくなくて、墨字さんもずっと千世子ちゃんに付きっ切りだから」と一応保身のような事をつい言ってしまうと「そんな…：ひどいわ！ 喉が変になってしまうので稽古させるなんて」とけいちゃんは食ってかかってきた。

私はここでも続けて「潰れてもなおできる発声法があるんだって阿良也くんが…：声質は多少変わるだろうけどって」と完全に保身にしかならない事を言った。

けいちゃんは「そこまでして…：！」と驚きというか悲しみなのか、よく分からない表情で、感情を抑えていた。

私は墨字さんに言われた「夜凧も王賀美も化け物だ、休ませてやるほど余裕があるか、それで負けた時泣くのは誰だ、優しさを履き違えるなよ、柊」という言葉を思い出した。そうだ、保身に走っても、結局私はこつちの道を選んだんだ。どつちが勝つのが良いかという問いに「百城千世子」を選んだんだ。

急に墨字さんが演技を止めに入った「待て百城、また芝居に迫がなくなっている、目の前の敵に、孫悟空に声をかけるな、お前の敵はそ

ここにねえだろ!!」とこの状況でも一切妥協無しに徹底的に指導している。

流石、墨字さんだ。けいちゃんが来たから、たとえイビリのように見えても、あえて厳しさをみせる！ 私のように保身になんか走らない。嫌われ者を演ずるなら最後まで貫き通す気だ。

墨字さん更に「感情を風化させないのは難しい、だから絶えず思い出せ、妬め、愛せ、恨め、そして忘れるな、お前の敵は誰だ？」と言われて「百城千世子」はゆつくりと顔をあげて明らかに一点に集中させた。見つめる先は当然、もう一人の「羅刹女」にだ。

そのとき、その眼を向けられたわけでもない私さえ、肌がぞわっとするような感覚がした。千世子ちゃん、なんて眼でけいちゃんを視るの。本当に墨字さんの本気は恐ろしい。

墨字さんは「悪いな、夜風少し見学して行ってくれ、そこで立つてだけでいい」と本当は悪いと微塵も思っていないだろうことを述べた……けいちゃんは当然、何の返事もできなかった。

私は「ご、ごめんねけいちゃん、でもけいちゃんのためにもなると思うから」とまだ、保身を捨ててきていないが、この状況を変える気はないし、もつと追い込もうとさえしている。けいちゃんがいることで、千世子ちゃんの「怒り」の描写の稽古に利用しようとするわけだ。舞台「羅刹女」が怒りの矛先を夫・牛魔王へ向けているように、千世子ちゃんはそれをけいちゃんに向けている。

この経験は「友達」である「百城千世子」ちゃんから向けられるのは辛いものがあるだろう。だって、こんなのは「友達」に向けていいような「眼」じゃない。

阿良也くんが「恨まないでくれよ夜風、俺たちは役者だ、自分以外全て食い物そうだろう?」と言った。その時、けいちゃんの表情が変わった。けいちゃんの中で、何かの感情が融解したようだった。きつ

と、自分自身も怒りの矛先を見つける必要に気づいたんだろう。

ただ、それでも、この場の誰かに、その矛先を向けるような事は、この稽古中には起きなかつたように感じる。恨まれなかつたという、若干の安心感もあるが、それより「誰」にその矛先を向けるのかが気になつた。

開戦の火蓋

けいちゃんが、サイド「乙」の稽古場に来てから約三週間後、遂に舞台「羅刹女」の発表記者会見が発表された。とんでもない人混みで溢れている。本当に日本最大規模の舞台・演劇なのだ実感させられる人数だ。この記者会見自体が、まるで何かのイベントみたいのようだ。やはり、世界的なスターの王賀美さんや若手の花形である百城千世子ちゃんが出るっというだけでも凄いし、共演は演劇界では名の知れた阿良也くんだし、他の助演達も人気の高い人ばかりだ。勿論、けいちゃんもここ最近では人気も伸びてきたし、実力は当然負けてはいない。

それにしても異様な光景といえる、普通は舞台の記者会見が、こんなお祭り騒ぎみたいになるなんてない。舞台は熱狂で満ち満ちている、その原因としてあるのは、やはり記者会見で色々と騒がれている事務所としてのスターズの問題だろう。スターズ「が」捨てた女とスターズ「を」捨てた男とスターズ「の」天使の勝負、週刊誌もワイドショー大いに煽っている。ただ、この図式的に言えばウチはスターズ側であり、けいちゃんを引き抜いた側でもあるから何とも言えない。

遂にアナウンスが流れた「お待ちせしました！ 舞台『羅刹女』の皆さんです！」会場はちよつとした、いや、かなりの騒めきを立てた。出演役者全員がゆっくりと舞台中央に集まって行く、いやでも主演の四人に目がいつてしまう。観客は歓声をあげている。黄色い声援というのはまさに、このことだろう。半分は奇声だといっていいし、一部はもはや狂乱だ。

この舞台挨拶はインターネット配信もされていて、ものすごい勢い数の同時接続者数だ。もはや、日本というより、世界規模での生配信とさえいえる。

それもその筈、この作品自体がWeb配信で、勝敗を決める本気のダブルキャストバトル、次世代の演劇で作り上げるエンターテイメントなのだから……

ただこの場で、ココまでの人が集まり、もの凄い数のカメラとで、凄まじい注目を集めたら流石にけいちゃんやんは動揺するかと思っていたけれど、そんな素振りは見せていない。むしろ自信さえ感じられる。三週間前にあつたような、不安感やパニックになる様子はない。何かを掴んだのだろうか？

ただそうしていると舞台袖で、山野上さんが墨字さんに向かって「先日は稽古を見学させていただきありがとうございますとございしました。悔しかったです、千世子さんの芝居は素晴らしかった」と丁寧にお礼を言っている。嘘や虚栄を言っている様子はない。

それに「……今はもつと伸びてるよ」と墨字さんは返すが「はい、しかし『羅刹女』は私の作品……だから景さんは絶対に負けません」と強気に山野上さんは返した。

墨字さんは軽く「ああそう……根拠になつてねえけどなあ、著者が誰とかよ」といなしていたが、「知ってますか？ 黒山さん、女は面白いですよ、宝石のように綺麗な顔をしていても、みんな腹のなかに禍々しい炎を宿している」と実体験のようにそう言い、嫌な沈黙の後に山野上さんが「本番まであと一月……楽しみですね」と答えた。

墨字さんは山野上さんを「素人女」と呼んでいた気がするが、今の彼女は本当には妙な迫力がある。例えるならば、トランプで「ジョーカー」を握っているプレイヤーの様な迫力だ。

ただ、そうした発表記者会見は意外というか、予定通り案外あっさり終わった。まあ、ココで波乱が起きる方が大変なのだが、後の事を考えると山野上さんが何をやる気かをもう少し考えて入れれば、けいちゃんやんが何に怒りを「向けて」いるかを考えていても良かったと本当に思う。

そうしてもう本番まで一週間近くというある日、ある朝、スタジオ「大黒天」にけいちゃんやんが現れた。まるで来るのが当たり前のように「朝ごはんまだなの、稽古に行く前にここで食べてしまおうと思つて、

雪ちゃんキッチン借りていい？」と本当に自然に接してきた。

私は「う、うん勿論」と答えたが、約二か月ぶりのそんな対応に驚きを隠せない。

ただけいちゃんはルーティンのように「黒山さん、コーヒー入れる？」とごく普通に振る舞い、墨字さんも「ああ」とごく普通に返事した。

ただ私が動揺しているのをけいちゃんに気づかれて「どうかしたの？」とこれまた何気なく聞いてきた。

私は正直焦りながら「あ、ううん、ちよつと吃驚しただけ……けいちゃんアレ以来、千世子ちゃんの芝居を見てからずっと事務所にきてなかったから」と正直に答えた。

すると「ああ……一応、今は敵同士だから何となく避けてたの……でも思ったの『敵』には慣れておいた方が良いつて」とサラリとけいちゃんが言った。

私はこの精神性変化に驚いてしまったが、墨字さんがコーヒーを片手に「……ふん、余裕だな」と言うと「余裕なんてないわ、だから出来ることは何でもやるの」とそれが彼女にとっての「普通」のように言った。

けいちゃんのこの不可思議な感じは最初は「肝が据わった」という要に思っていたが、なんだかそういうものともまた違う「何か」を蓄えている感覚というか「何か」に感情を吹き込んでいる感じ「何か」の思い出を、ずっとずっと思い出しながら耐えている感じだった。

とても自然な振る舞いなんだけれど「何か」とんでもない不自然な感情を研ぎ澄ませて、限界まで「羅刹女」のために貯めこんでいるみたいだった。

そうして遂にやってきた。劇場は超満員、周囲は人の群れ、チケットは飛ぶように売れ、Web配信もあるのに転売騒動まで起きる始末。

テレビでは、スターズのたしか町田リカという子がレポーターとしてこの現場を紹介している「ご覧くださいこの人の数!!! そう！ 今

日があの話題の舞台『羅刹女』の公開記念日なんです！ 初日となる今日は今、YouTubeで話題！ そして絶賛公開中の「デスアイランド」でデビューした天才美少女『夜風景』を主演に、いわずと知れた世界的大スター『王賀美陸』を助演にした『サイド甲』から初演を迎えます！」と大々的にふれこみをして、Webでの配信やダブルキャストバトルの趣旨や投票方法を伝えている。

テレビのレポーターから情報番組に戻り、番組が用意した論客というかパネラーというかタレントの一部の人達が様々な事を様々な事を勝手に言っている。

Web配信での活劇は果たして「演劇」と言っているのか？ だとか所詮話題性重視のお祭りなんだろうとか、脚本の山野上さんを一時期メディアに持てはやされてた「美人すぎる芸術家」などと揶揄ったりしている。他にも百城はまあいいよ、元々アイドルみたいなもんだから、でも王賀美や明神には仕事選んで欲しいですねとただのゴシップというか駄弁りを見せている。更に「夜風でしたっけ、あの新宿ガール、この子何て、芝居ができるのか怪しいよ、なんとってYouTube出身だ」と凄い馬鹿げた事がある人は言っていた。

観もしないで、よくここまで言える物だと私は感心しながら「此処の放送」部分は後で、SNSで拡散される気がした。けいちゃんの實力は観さえすればその演技力に虜になってしまう様なもので、この人は後で手のひらを返したような評価をするだろう。

ただ、司会者の人は流石にこの発言辺りで、流石に痺れを切らしたのか、話題を無理やり変更し始めた。ダブルキャストバトルについての話に大きく舵を取って、この配信は明確な「甲乙」を付けるもの、勝負である事を説明しだした。前置きにお芝居に明確な「勝ち負け」を持ち込むのは難しいという旨を喋りながら、それでもお芝居は興行である以上、お金が動くし、人が動く、そして明確に数字が見て取れる。そして、今回の企画はその数字によって決まる勝敗を敢えて、明確にしようという物だと面白おかしく伝えていた。

そんなテレビ番組をモニターで見ているなら、サイド「乙」の楽屋に

人が段々と集まってきた。私はルイくんにレイちゃんの面倒を今日は此処で見ることになっている。流石に、今は敵同士とはいえ、けいちゃんの弟妹達をせっかくの舞台当日に入られないのは可哀想だ。そんな理由で、けいちゃんに負担を掛けるのは公平性的にも興行的にも良くない。

そうしてサイド「乙」のメンバーが全員集まった所で、子どもたちにニコッと微笑みかけた、テレビ番組でも有名なマルチタレントの「山寺英司」さんでこっちサイドの猪八戒役の人だ。子供たちは「あのテレビで見たことある」となんだか不思議そうに言っている。そしてこの観客動員を見てか、山寺さんは率直に今の心情を語りだした。「ここまで大きな舞台になるとは思わなかった、初めはきな臭い企画だと思っていたけど、受けてみて良かったよ、バトルするのも良い『真っ当に行けば』千世子ちゃんが、景ちゃんより目立ってくれば、僕らの勝ちってことでしょ」と取り敢えずの感想を言い終わった後に「……と言ってもWeb配信で凶る評価の公平性なんて、怪しいもんだけどね、千世子ちゃんか、王賀美くん、どちらのファン層が観客に多いのかの勝負になりそうで、つまらないね」とある意味現実的な見方も述べた。

それに「演出家が違えば、作品の色も変わる、そう単純じゃないでしょう」とこっちサイドの三蔵法師役「渡戸剣」さんがボソツと呟いた。

その受け答えを聞いて「……お二人は夜風の芝居は？」と墨字さんが聞いた。

「……私は銀河鉄道の時に」と渡部さんが答えたら「あら、じゃあ僕だけ、知らないのか」と少しとぼけながら山寺さんは答えた。

墨字さんは淡々だが力強く「役者を始めて、まだ一年弱、発展途上で実力にムラのある女優だが、経験を武器に芝居する『メソッド演技』これにおいて夜風の右に出る若手女優は現在、日本にはいません」と言い切った。

墨字さんはさらに「夜風が実力を発揮すれば、組織票など意味を持たない」とまで言った。

それにかがいが半分「へえ、君がそこまで言うのかい黒山監督」と山寺さんが言うと、次に阿良也くんが「夜風の実力は知ってるよ、でも前は巖さんが演出だった、今回はそうじゃない、黒山さん、あんと百城の相性は良い、とてもね、一方向この演出は素人、夜風には分が悪い」と演出面からの見方を述べた。

その言葉に「ルイとレイ、夜風の弟妹ですが、最近不安そうに言うんですよ」と墨字さんがソコに付いて言及した。

その言葉にレイちゃんはちよつと顔を俯きながら「お姉ちゃん昔に戻ったみたいなの」と怯えるように言った。阿良也くんが「……昔……」と疑問を投げかけるとレイちゃんは「お母さんが死んじやった時の感じ、笑っていても冷たい感じ……」とトラウマ体験を想起させる様なメソッド演技においては危ない兆候を真剣に訴えた。

その言葉を確認して「ともかく不確定要素が多い、素人とはいえ天知の人選だ、山野上も得体が知れない、そうでなくてもこちらは一度手の内を見られているしな」と墨字さんが言う。手の内を見せたのは自分でやった事だと突っ込みを入れたくなかったが、言ってもしょうがない。

「だからこそ、俺たちの好演が後手に回ったことは逆手に取れる、今日の夜風の芝居を目に焼き付けろ、百城！」と墨字さんが言うとその千世子ちゃんは力よく頷いた。

理屈は恐らく、千世子ちゃんの「羅刹女」は「夜風景」への想いの強さで、演技の色合いが決まる。今日の芝居が良ければ、良いほど、千世子ちゃんの「羅刹女」には「夜風景」への妬みと憎みと怒りと愛が強まるのだと思っっているのだろう。

ただ、そう簡単にはならなかった。

正と負の芝居の攻防

遂にサイド「甲」の上演時刻になった、しかし幕が上がらない。初回からトラブルが起こったのかと思うが、ある足音が聞こえてくる。数十台あるカメラのいくつかは舞台後方へと向ける。その足音と風格は異様だった、この舞台を見ている全員が後ろを気にしてしまうような、突如背後から現れた「それ」にまず私が思ったのはお願いだからこちらを振り返つてこないでくれということ。

画面越し私さえ、無意識に息を殺してしまう様な振る舞い、呼吸を一つ、瞬き一つが「それ」の機嫌を損なわせないようにすること「それ」は観客が役者から目を背けるといふ異常事態、神に命を握られる感覚。

「ああ、腹が立つ、腹が立つ、あの人は毎年毎年妾のところへ、ああ、この怒りどうしてくれよう」そう本当に怒りに身を任せた演技で、あれがああの優しいけいちゃんと同じ人物に見えない程、恐ろしかった。

ただ、舞台の空気は画面越しでも伝わってくる、コレはあまりに一触即発のギリギリの芝居だ、演技自体もそうだが、何より会場全体が強張っている。

さらにその時、会場のある女の子が、ほんの少しだけぐすつと鼻をかんだ。その瞬間「確かに」羅刹女は、そちらの方をくいと眺め、黙らせた。今、まさに客席に介入してみせた……！ 恐ろしい制圧力で、まるで神だと言わんばかりの芝居、このままではこの恐怖で客席を支配してしまう。

そこに幕が上がり、山野上さんの見事な「炎」の背景美術が広がった。そこで少し黙りこくって立ち止まって、怒りを堪えに堪えて「我が子、紅孩児もあの猿のために出家させられたという……愛する子を奪われ……それでも夫は帰って来ぬ……ああ、腹が立つ、腹が立つ」唇を噛み締めながら、羅刹女は舞台上に上がった。

ただけいちやんのこの芝居の影響で、客席は極度の緊張状態にある、掴みとしては凄いけれど、舞台を楽しんでもらえている状態とは言えない。誰かが審査員として勝敗を決める訳ではない人気勝負それがこの舞台「羅刹女」なのにけいちちゃんにはお客さんを楽しませる演技ではない「凄い」と「面白い」は違う。このままでは配信投票では票が取れない。

そう思った時に、突如として現れる、よく知った顔、観客はだれもが思うだろう、やつとあの「王賀美陸」が来てくれた。

「おい、俺だ、孫悟空だ、扉を開けてくれ」そこには絶対的な存在がいた。

これは計算なのだろうか？ 先ほどまで、禍々しい目をした女が、目の前は闊歩し、自分に恐怖と不安を与えてくる、なぜこんな思いをしなきゃいけないんだろう、自分はただ舞台を観に来た筈なのに、当然そんな理不尽に観客は動揺する。そこに見慣れたスターの登場し、ようやく胸をなでおろす。ああ、これを私たちのヒーローがあの恐ろしい女をやっつけてくれる物語なんだと、そう自然に感じさせる見事なストーリーテリングをその立ち振る舞いと仕草、表情、声の張りで見事にやってのけた。

「齊天大聖孫悟空……何の用です」まるで、怒りを隠そうとしない抑揚に孫悟空は「姉御！ 久しぶりだな！ 牛魔王のオジキはいねえのか！ あんたの旦那さんはよお！」そう明るく返答する。

短い沈黙の後「帰りなさい、私は今、虫の居所が悪いのです」そう冷たく返答すると「そうはいかねえよ、俺はあんたの芭蕉扇に用があるんだ！」と強引に要求を通そうと悟空はしている。この時の王賀美さんが出てきてくれたことで、舞台の空気はホっとしている、羅刹女は凍らせた空気を一変させた。

「少し前にへたくそいってよう、俺は今ある坊さんと手下を連れて旅してんだよ、笑えるだろう

、その道中にある、あの火達磨の山……そう火焰山！ あれとても

じやないが渡れねえって、頭抱えてた所よ、聞いたぜえあんたの芭蕉扇、あのうちわなら火焰山の炎を吹き飛ばせるってな！」完全に手前勝手な理屈を通そうとしているが、見ていて安心できる。

「……帰れと言ったはずです」その声は冷たいが、確かに怒りの炎で燃えていて、観客を怯えさせるが「くれねえってんなら腕づくでいくぜ、牛魔王のオジキがいねえってのは好都合だ！」即座に如意棒を取り出すアクションを起こす孫悟空に視線が行く。

「あんな男いなくとも」と刀をスツと抜く仕草にまた、恐ろしい恐怖を覚えるが、即座に「オジキの女だからって、容赦しないぜ、姉御！」そうして大地を蹴った！まるで歌舞伎の見得の芝居。観客の集中を取り戻すためのテクニックを使って演じている。

私が観ていて思うのは、この芝居は綱渡りだ。羅刹女の存在感が孫悟空に優れた時に観客が感じるのは「恐怖」サイド「甲」の「羅刹女」は得体の知れない女の狂気の芝居になる。逆に孫悟空の存在感が羅刹女に勝る時に観客が覚える感情は「高揚」この舞台は待ちに待ったメジャー俳優の大活劇になる。

これは「夜風景」と「王賀美陸」の客の奪い合い、そして必ず「夜風景」が負けなくちゃいけない芝居……

もはや活劇として、大立ち回りを繰り返し、主演が客席に背中を向けるシーンやぶつかり合うシーン、大胆な構成での立ち回りが大迫力で、見せ付けられる。

「ふう……ちと分が悪いだろ、姉御、牛魔王のオジキがいねえとよ」孫悟空はまだそう言って羅刹女のことを煽ってみせる。

「その名を口にするな」怒気を孕んだその一言に、また一気に空気が変わる。

「まあ聞けよ、姉御、これはよ、俺の都合だけじゃねえんだぜ、村の連中はよみんな窮してんだ、火焰山のせいで畑も育たねえと泣いている」この時、確かに「王賀美陸」は観客に一人一人に話しかけるようにしゃべりだした。まるで目が合ったそう錯覚させるような演技、そ

れは観客を味方につけて戦う。そして、最後にはカメラ目線、本当に抜け目ない。

「悪いな姉御、約束しちまったんだよ、お前らみんなをこの俺が助けてやるってな！」静かで冷たい芝居で観客を凍り付かせると思えば、派手で迫力のある芝居で観客を鼓舞する、羅刹女が刀を振るえば観客は慄き、孫悟空が如意棒を振るえば観客は安堵する、そんなことの繰り返し、返しの芝居、本当に休む間もない「正」の芝居と「負」の芝居の攻防。手に汗にぎるってのはこの事だ。サイド「乙」の楽屋でも「日本を捨てたスター」の活躍と「夜風景」ののずば抜け芝居を目の当たりにして、かなり厳しい雰囲気は漂っていた。

ただ、舞台の様子は本当に際どい戦いの連続で、此処までの殺陣をよく練習で身に着けたと思うが、正直これが練習のたまものというような感じはまるでなく、荒々しいまでの「夜風景」の芝居に「王賀美陸」が無理やり食らいついているように見える。

そうして遂に、羅刹女が孫悟空に膝をつかせた、それは「王賀美陸」が膝をついたという絶望感が一気にやってくる場面。

「やるなあ姉御……それが芭蕉扇か」とまだ悔しまぎれに言っているが「ええ……冥土の土産に拜ませてあげたのよ」と本当に冷たい演技は続いている。

「ふっ……優しいなあ」そこで、ニヤつと表情を変えて「変化の術」孫悟空がそう言った瞬間に、スモークが焚かれた。

「消えた！どこに隠れた卑怯者め！」そうして舞台の上でまた、怒りに任せて、怒声を発している。

見事な芝居だった、これだけシンプルな舞台で、それをまるで感じさせないのはあの二人の拮抗した圧倒的な存在感からくるものだったから、この考えはサイド「乙」で一致していたが、ただ、阿良也くんだけ少し違った。

「問題はこの続き、小虫に変化した悟空は羅刹女の腹の中から脅し、芭蕉扇を奪い取る、しかし渡された、芭蕉扇は偽物だ。それに気付いた

悟空は次に、牛魔王に変化し、羅刹女を口説き落とそうとする」この阿良也くんのこの説明だけでは何が問題なのか分からなかったが、続けて「王賀美は演じ分けをしない、なぜならそういう役者だから」そう定義付けた。

その言葉に続けるように墨字さんが「ああ、何を演じても『王賀美陸』これが通用してきたのは奴が映画俳優だからだ、映画にはカメラワークがある、引きがあり、アツプがあり、カメラが役者の芝居を手伝う。それが常に役者に新鮮な印象を残すだが、ここは舞台、生身の人間が眼前で演じ続ける。それじゃあ、観客は王賀美の存在に慣れ始める」その説明を聞いて、ようやく理解できた。此処まで印象強く、強引な孫悟空から、役割としては真逆な優しく、労わるようで、誘惑する牛魔王という存在を確かに演じ分けるのは確かに困難だ。

舞台では、変身した小虫が羅刹女を苦しめ、どうにか芭蕉扇を手に入れるシーンまで、進んでいたが、ココまでは確かにこの演技トーンで良いが、この後は果たしてどうなるんだろう。

「悪いな姉御、ありがたく借りていくぜ、あばよ」そう捨て台詞を吐いて、舞台は一旦、幕を閉じるが、この後がまるで予想できない。どう演じ分けるつもりなんだろうか？

視点の逆転

再び幕が上がり、羅刹女の一人語りから始まった。

「ああ、なんと屈辱、許せぬ、許せぬ、許せぬ、許せぬ、あの猿め、しかしあの芭蕉扇は偽物、それに気付いた奴は再びここへ戻って来るだろう、その時こそ奴の最後、フフ、目玉をえぐりだし殺してやる」この恐ろしい羅刹女の怒りの描写の始まりで、またしても一瞬で客席が恐怖一色に塗りつぶされてしまった。

この場面からの次への流れ、羅刹女が牛魔王に化けた孫悟空に愛を騙られ、まんまと本物の芭蕉扇を渡してしまう場面、それをこの巨大な怒りに燃える存在相手にどう演じるか？

「ああ、美しき我が妻、羅刹女よ！ どうしたのだ、この荒れようは！」王賀美さんは本当に祿に演じ分けもせず出てきた。

それどころか、さっきの孫悟空よりも粗暴に見える、サイド「乙」とは対極の芝居だ。まあそれはそれで、一見して孫悟空が化けた姿だとわかる演劇的な演出としては機能はするが、大丈夫だろうか？

グイッと身体ごと羅刹女に近づけて抱きしめるように「何があった、申してみよ、愛する妻よ」まるで、弱さを見せない。それどころか上から垂らすように演じている、その傲慢さは「王賀美陸」のまま、感覚的に感じるこのままでは全然駄目だ……どうしても「羅刹女」に視線が行く。

牛魔王に向かって、顔は見えない中で「何があったか……フ……何をいまさら現れて……」そう言って恨む事を言う羅刹女の迫力は、こちらを向いてに語り掛けている王賀美さんよりも、圧倒的に「羅刹女」の悲し気な背中に目が行ってしまう。

ここで「王賀美陸」という存在は一気に色がなくなっているのを感じる。ここからは「羅刹女」の一方的な芝居の時間だ。

なぜ突然、王賀美さん失速したのか？ 理由だけなら簡単に指摘できる。勢いを増す「夜風景」の芝居、そして今までであった派手な活劇を終えて、勢いが一旦止まる展開、演じ分けの希薄な王賀美さんに

徐々に芝居が観客が慣れる。この場面は始めから、孫悟空を演じる上で、難局だったということだ。ただ、それは理屈でしかない。答えが、どうすればいいかは私には解けない難しい問題だ。

牛魔王はそれでも尊大に「私はお前の身を案じているのだ、答えてくれ」傲慢な態度で言うが「ふふ、私の身を？」まるで羅刹女には効いていない。

「ああ、何がおかしい」ああ、不可思議な光景だ、あの「王賀美陸」が無視されてるようにさえ見える、まるで素人のナンパだ、滑稽にすら見える。これでは戦局的に勝手に自滅したことになるのだろうか？

「孫悟空!!」……奴がお前は傷つけたというのか!?!」大仰な芝居で強引に進めようとしているが、その言葉を聞いた途端「……傷つけた?」とすつと身を引き、羅刹女は「さあどうでしょう、果たして私は誰に傷つけられたのか?」そう言っ、言葉の裏にある、怒りを露わにする芝居を見せている。

そこで急に「王賀美陸」は羅刹女をお姫様抱っこしてみせた。あまりに急なアドリブで、らしさはあるが舞台のタッチとはあっていない。

「羅刹女よ一人にしてすまなかつた! 私居ぬ間にあの猿め!」もはや明らかに軽薄で、浮いている芝居になっている。

「あなた、私もう少しで、あの猿に殺される所だったのですよ、それを今頃になって」画面には牛魔王の腕の中で、顔も映っていない、羅刹女の台詞の方が恐ろしいと感じる。そんな声質で喋っていると「私はもう二度とお前を離さなぬ」そういつて牛魔王が顔を近づけ、口づけしようとした所を、強引に羅刹女が抵抗して腕から転がり落ちた。ああ、もう脚本が破綻してきた。観てられない。

「私はずっとあなたを待っていました、あなたはどこにいましたか、その時誰といましたか、そんなにあの女がいいのですか……」羅刹女はもはや悲しみに訴えかけるような、台詞さえ口にしてているが、それに孫悟空は尊大な態度で「何を言う、私の一番はお前だ、愛する妻よ」と不遜な態度で答え、さらに「ところで、芭蕉扇は無事か？」と唐突に話を變えてきた。

流石に羅刹女も困惑したように「……なぜ今、芭蕉扇なのですか？」と聞くが「え？　ああ、久しぶりに拝みたくなっただ、どうなのだ」ヘラヘラと笑ながら言った。

「……無事です、あの猿には偽物を渡しましたから」とイラつきを隠さず羅刹女は答えるが、即座に「さすが聡明な我が妻、ほら持ってきてくれ」と自分勝手な態度に出る。ああ、ムカつく。

さつきまで、目も合わせられないくらい、恐ろしかったのにあれじゃあ、羅刹女が

「可哀想」そう思った時、羅刹女は感情を抑えた表情のまま、涙を流していた。

私は周囲に確認せざるを得なかった「あの……私だけじゃないですよね……これなんかいつのまにか、もしかして私たち……羅刹女に同情してませんか……？」楽屋でも周りが、流石に可笑しいことになってきた、どよめきがあった。

手元に目的の物が、来ると途端に「ほう……これが芭蕉扇か、ハツハツハ」そう高らかに笑い声を上げて、牛魔王から孫悟空に変身を解いた「今度こそありがたく頂くがぜ、アバヨ、姉御オ　!!」そう言つて「王賀美陸」は出鱈目に自分勝手なキャラクターとして舞台から去っていった。

ここで、物語の色は完全に変わる。この物語を羅刹女の情に訴えるのではなく、観客の情に訴えるために、彼はあえて嫌われに行つてのがようやく分かった。

墨字さんが楽し気に「出鱈目に好かれるのも、出鱈目に嫌われるのもスターの甲斐性だ、やられたよ、ここから観客は夜風の味方、主人公交代だ」そう言っつて、この物語の解釈そのものを変えた芝居を褒めている。

ここで、一旦舞台の幕は下りるが、この後どうするのだろうか？

そんな疑問を阿良也くんが周囲に投げかけた「もはや羅刹女じゃなくて、悟空達が敵役って感じだけど、そういえば向こうの役者の人達ってどんな人がするの？」あまりに自然に聞いたが、千ちゃんは「え、嘘、そんな今更、新人の武光さんともかく『白石宗』と『浅野市子』ですよ？」と驚いているが、その答えに千世子ちゃんが「阿良也さん、家にテレビないから」そう軽く答える。

「ええ、俳優なのに」千ちゃんは分かりやすくカルチャーショックを受けるが「いや映画は見るよ、たまに」と阿良也君は答える。

私はイヤなんで、それを千世子ちゃんが知っているのか？ の方を気にすべきだぞ、千ちゃんと思っつたが、とりあえず、舞台の方に集中した。

ブオオンという照明が付く時独特の音が舞台に広がった。

舞台にはとても巨大なセットで作られた「木彫りの火焰山」がそこには在った。おそらく山野上さんの彫刻で、さつきまでのシンプルな舞台と打って変わって一層、禍々しい芝居なりそんな雰囲気醸し出したセットだ。そんなところに羅刹女がまたしても舞台後方から現れた。

「ああ、火焰山が燃えている、いつもより強く……！ ああ、私の芭蕉扇を煽っているな、しかし正しい使い方を知らないために、却って炎に勢いを与えている、風向きから奴の居場所が分かる、なんと愚かな……」相変わらずの力強い迫力……だがさつきほどまでとは客席の空気が違う。もう誰も本当の主人公である「羅刹女」を恐れていない、

それどころか、彼女を応援さえしている。

ただ、炎の火焰山の中、静かにそこに白い法衣を身に纏った人物が現れた「白石宗」演じる、三蔵法師だ。「あの猿が言っていた坊主か……あれを手懐けるとは只者じゃないな」警戒するように羅刹女は話しかけるが「悟空は無暗に炎を煽るばかりです、教えてください火焰山の炎の消し方を」そういつて淡白な声で、冷静に相手している。

当然、羅刹女はそんな態度に怒り「大概にしるよ、人間」そう怒鳴りつけるが「あれが無礼を働いたなら、謝ります」まるで、恐れることなく、ただ事実を言っている。

「もう遅い、私の怒りはどうなる」再度、怒鳴りつけるが、その答えに「……ああ、あなたは火焰山の鎮め方は知っているのに、自分自身に宿る炎の進め方が知らないのですね」そう返答して見せる。声のトーンも、調子も、ずっと一定で子守歌のような静かな芝居なのに迫力、とは何か違うけれど、妙な説得力がある。

「盗人が、説教か！」感情のままに、羅刹女は怒気を発した。もの凄い迫力で、並みの役者なら推し負けるような演技だが、三蔵法師は違った。

「あなたの敵は本当に私ですか」そう諭すように語りかける。まるで、羅刹女が怒りを露わにすればするほど、本当に苦しむのは誰か、そういった問いを、鏡のように、彼女の怒りそのものを跳ね返せるみたいな演技だ。

三蔵法師がすっかり場の空気を支配している。先ほどまで、大立ち回り繰り広げ、圧倒的な存在感を持つ羅刹女を相手にだ。

阿良也くんも「並みの役者ではあの発言に説得力伴わず、茶番にさえなり得る場面だ、凄いよあの人」素直に賞賛している。千ちゃんは「あんな影薄い人なのはどうして……」そう何気なく言っつて、ちよつと常識のない発言にハラハラする。

墨字さんは「芝居つてのはそいつの生まれ持った性格や雰囲気があるのまま武器になるからな、例えば『白石宗』はもともと『善人役』ばかりあてがわれる役の幅の狭い役者だった、理由は一つ善人ぽいか

ら」と解説を始めるが、千ちゃんは割り込んで「でも白石さんって」その返答に「ああ、今じゃ任侠映画御用達のヒーロー俳優だ。優しい笑みで、強面を相手にする、あの異質の恐ろしさは真似できるものじゃない、つまりあの人はよ、誰が聞いても、その言葉に正しさを感じさせぬ役者、正論つてのは時に暴力より強いもんだ、勞せず羅刹女を苦しめさせられる、唯一の人だよ」そう、持論を展開した。

少し思うところがあつたのか、戸部さんが『勞せず』というのは少し違う、当時自らのイメージ変更を望んで随分、事務所とやり合つたと聞いている。十年前、丁度、王賀美が渡米した頃だ、我々役者にはゴールもなければ、正解もない、彼にも何か想うところがあつたんだろう」と彼なりに追加で、情報を補足した。

私はあなたを救いたい、三蔵法師のその言葉が「羅刹女」を戸惑わせている。間の作り方までも綺麗だ。三蔵法師の説き伏せる様な口調は続く「気づいているんでしょう、敵とは常に心の中にあると、沈めて楽になりませんか」それに「……一体、一体どうやって」と羅刹女が言いかけた時に、突如「あぶねえ、先生！」そう言つて、二人の間に猪八戒と沙悟浄が武器をもつて割つて入つた。

「やはりこいつが羅刹女！ 片付けられなかつたのね、悟空さん！」と沙悟浄が荒々しく言い「先生あんなの悪い癖だ！ 目を離したらすぐになくなる！」猪八戒も三蔵法師にそう言つて返す。舞台は一気に静的な芝居から、また動的な芝居に戻つていく。

「貴様！」羅刹女のドスの効いた声が響き渡り、観客は突然の敵役の登場に驚きと不安の表情を見せる。

三蔵法師は「何をしてるんです二人とも！ 私は彼女と対話を」そう言つて、なんとか元の話し合いに戻ろうとするが、猪八戒はその名の通り、猪突猛進に羅刹女に挑んでいく「沙悟浄、先生を頼むよ！ こいつはオイラがやる！ いい女だ！」そう言つて、突進する。

羅刹女は裏切られた憎しみから「坊主、私を騙したな！」そう叫び、殺陣を振るう。こうなると、三蔵法師の声は戦っている二人には届かない。

猪八戒は強引な動きからやられに行っている。派手にやられればやられるほど、羅刹女が目立つ、そう思つての事だろう、とても献身的だ。倒れ方的にも真面に受身も取っていない、主演の凄さを際立たせるために体を張っているのが伝わってくる。

沙悟浄はそんな彼に激を飛ばす。「猪八戒！　でしやばつて何です、そのザマは！」それに減らず口で「美女の技を受けるのはまた一興！」と返し、また羅刹女のに襲いかかるが、明らかに防戦一方だ。流石に途中から沙悟浄も戦いに入るが、それでも拮抗しているとはいえない。

活劇上の演出なのだろうが、一對二の戦いに此処まで、差が開くのを自然に見せるのは本当に末恐ろしい。迫力と実力が違い過ぎる。

「よくもよくも、よくもよくも、くだらぬ甘言で、私を惑わそうとしてくれたな、私の炎を、この怒りを、鎮めて楽になるだど!?　くだらぬ、くだらぬ、許せぬ！　許せぬ！　なにより、そんな境地に一瞬でも、焦がれた自分自身が許せぬ！」感情的なまでの台詞回しとそれにダイナミックに合わせた活劇は止まらない、猪八戒と沙悟浄は殺陣は上手いが、それを徹底的に圧倒する羅刹女の芝居が本当に際立っている。

沙悟浄は流石に「ここは一度引きましよう！　さあ立って　！」と言うが、羅刹女は煽り「逃げろ、逃げろ、まとめて殺してやる」そう言ったが、結局、その場では追わなかった。

そして羅刹女が一人、独白する「猿の手下は問題ではない、卑怯な手さえ使われなければ猿も問題ではない、倒すべき『敵』がいること、のなんと幸福なことか……フッフ」ああ、「羅刹女」は孤独だ、たった一人で戦っている。ありもしない「敵」を探して、こんなにも悲しく孤独な芝居はどうやって、決着をつけるのだろうか。

演技の崩壊

舞台は再度舞台は戦いに入った。「やい、羅刹女!! 先生を守りながらつてのがいけなかつたんだ!!」猪八戒がそう意気込み「これで終わりよ!」沙悟浄が武器を構えるが、「お前たちはもう良い、飽きた、猿はどこだ」と羅刹女は本当に退屈そうに、そう聞いた。

その言動に怒ったのか、猪八戒は強引に攻撃しに、いやヤラれに行く。その動きは寸止めではなく、あえて自分に当てさせに行っていた。沙悟浄も勢い良く、強引に襲いかかる。先ほどまでの殺陣と迫力が違い、動きが見違えるようだ、本気で演じているのが分かる。

阿良也くんはこの光景を見て「……これだよ、夜凧の怖いところは、共演者を本気にさせてしまう。たった一度も本気になれなかつたまま、消えていく役者が大半のこの世界でだよ、これは驚異だよ」それは、彼らの事を言っているのだが、過去の自分自身に対しても言っているような気がした。

舞台の後方から大きなダン、ダンという足音が響いてくる。その方向を見ると火焰山のセットの上に孫悟空が現れた。「姉御オ! せっかく見逃した命! 飛んで火に入る夏の虫とはあんたのことだな! そんなに俺が恋しかつたか!」流石の迫力で一気に、観客の視線を注目を集めている。

「しかし気に入ったぜ、芭蕉扇、今ならあんたの気持ち分かるよ姉御! 扇げば扇ぐ程、燃え盛る炎! こんなに愉快なことはない! 俺たちは皆、腹ん中に炎を宿している! これは外に出さねえとやべえもんだ、さあ始めようか、殺し合いだ!」そう言つて、この狂乱の戦いの中に割り込んでいった。舞うように流れる活劇の芝居は本当に素晴らしい。敵も味方も一步も引かない勝負、これは確実に観客の心を引き付ける。ウチの芝居とは随分と違う、皆この戦いを楽しんでいるようにさえ見える。

阿良也くんは「ああ、狂気の芝居だねコレ、でもさあこの後つて」と

この展開の後に付いて言及しようとしたが、割り込んで墨字さんが「ああ、この後の展開が実現するイメージができねえな」と感想を漏らした。

「羅刹には死闘の末、全てを許し自ら火焰山の炎を鎮める『許し』とも『諦観』とも取れる感情の変化が求められる中で、あんな狂気に身を委ねた芝居をして、果たして炎を消すなんてあいつらを『許す』なんてできるのか」

そうだ、この芝居では台本が共通しているから、最終的な終わり方は共通である。故に此処から、最終的には自らから炎を鎮める芝居、まるで自分の怒りの炎を鎮めるように、そう演じなければならぬ、到底、今の「夜風景」には出来るとは思えない芝居だ。

そこから、孫悟空、猪八戒、沙悟浄、羅刹女それぞれ四名、一様に戦いを楽しんでいるような芝居が繰り広げられる。まるで、敵味方関係なく、全体である状態を体現しているように、そう燃え上がる火焰山のように戦いは繰り広げられる。

「楽しそうね羅刹女！ この劣勢！ 自分の命が尽きようとしているのに！」そう沙悟浄がこの勢いに乗って言ったが「ふ！ お前たちには分るまい！ 私のこの境地が」そう言ったが、孫悟空が即座に「分るさ！ 好きなように暴れるのが、面白い！」

「それだけじゃない、お前達は『虚無』の恐ろしさを知らない」そう言って顔を歪ます羅刹女に「はあ『虚無』だあ！ へっ！ そりやなんだ!?! 食えるのか!?!」その言葉に皮肉るよう猪八戒は返した。

するとその言葉の返しに、猪八戒を強引に力づくで押しつぶす。馬乗りのような体勢で「坊主の言葉に、怒りの炎を鎮めるなどという甘言に私は惑わされた！ あの刹那！ 私は恐ろしかったのだ！」そう叫び名ながら周囲をなぎ払っていく。一気に形成が狂い始めた。

羅刹女は沙悟浄を抱き抱え、長剣を押し当てようにながら語った「この怒りを失えばいったい私に何が残るのかと」そう絶望を独白していく。

「私は幸福だ、私には殺すべき敵が……お前たちがいる、薪があれば炎

は尽きぬというものお前たちのおかげで私は……」そう言つて羅刹女は動きを止めた、そこからは一方的な活劇に変わつていく、悲し気に羅刹女は暴れ狂うが、もはや相手は疲労困憊、次第に言葉少なくなり、孫悟空達を全て組み伏せた後「…… 終わりか？」怒りの矛先を向ける相手がなくなり、どうすることもできなくなつていた。

まるで抜け殻みたいだった。

そうして突然「ああ、そうだわ！ まだ坊主がいるじゃないか！

まだ！」芭蕉扇を奪い返したのに、また水を得た魚みたいに怒りの感情を噴き出していた。

「いるよなあ、ああいう奴」そう墨字さんは羅刹女のこの言動に、変な感想を言った。流石に私は「何ですか、突然……というか、いませんよあんな怖い人……」と返すと「いるよ、どこにでもグチグチと、年がら年中、やれあいつが気に入らねえ、仕事にいらねえ、政治家が気はいらねえ、口を開けば不平不満誰かのせい、学校じゃ順番みたいにイジメの対象が移り変わり、？華街じゃ毎晩喧嘩だ、ネットを開けば他人の悪意で埋め尽くされている」と持論を述べた。

阿良也くんは「そうなの？ ネットつて」と千世子ちゃんに聞くが「エゴサしたら分るよ」とごく普通に返すが「えごさ？」という略語の意味を分つていなかった要だった。というか千世子ちゃん、エゴサーチするんだ……

「怒り続けることで、自意識を保ち、もはやそれが手前のアイデンティティになつている、羅刹女はどこにでもいる平凡で愚かな人間だ、だからこそ奴は怒りを失うことを無意識に恐れている、自分でなくなつちまうと思つているからだ」墨字さんはそうこの物語を解釈している。分かりやすい読み解き方だ。ただ、私にはこの芝居の「羅刹女」と今現在、役者「夜風景」の姿が微妙に、そして確実にズレて見えた。

そうして、舞台では最後の一人である三蔵法師が、ゆっくりとした足取りで、羅刹女に向かつていく。「あの時の言葉をもう一度口にし

てみる坊主！ 仲間のこのザマを見て尚、口にできるか！ 『怒りの炎を鎮めろ』と！ まだ口に来るか！」客席は怒号する声で、溢れる。感情が際立った芝居、そして本当に精神的にも危うさを感じる芝居。

「答える坊主！ 私を許せるのか！」本能的怒り、狂気すらも感じる。「お前なら怒りに飲まれずにいられるというのか!!」それは自らの怒りを煽り、許してみると命ずるその醜悪な姿は何と形容したらいいか分らない。

「お前の仲間を殺す！ お前の目の前で！ 坊主！ 私を許しているものなら許してみろ」怒りの動向がさらに続く、三蔵法師がなにも言わないうちに、転がっている猪八戒に対し剣先でなぶり、悲痛の声をあげさせる。「言え！ 私を許すと言ってみる！」

台本上ではそう、羅刹には何度も何度も彼らを刺して、問う。それでも三蔵法師は彼女に「あなたを許します」と言うことになっている。意味的には、この事実をきっかけに羅刹女は心を動かし、牛魔王や孫悟空への怒りを封じ込め、忘れることによって炎を鎮めるのだろう。だけれど、今のこの状態ではその解釈では納得できない、その心の動きを信じられない。そういう迫力と言動で、此処まで演じてきたのだ。

「どうした、坊主！」三蔵法師が言うセリフは決まっている「羅刹女よ、あなたを許します」しかし、その時の表情というのは演出は決まっていない。

怒りに満ち満ちた表情で、耐え忍ぶように怒りながら、憤懣する姿を見せている、その姿は羅刹女に鏡として、自分自身の姿を映し抱かせた。

羅刹女がたじろいでいる。これじゃあ言葉と感情が逆……いいの

かだろうか？　こんなこととして疑問に思っていると戸部さんが「禁止されてるのセリフの変更のみ、ト書に表情の指定もしてはなかった、だがなぜ」と疑問を口にした。

「泣いてる赤ん坊を泣き止ます方法って知っているか？」　墨字さんは唐突にそんなことを言い出した。独身が突然何を？

「同じように泣いている赤ん坊を見せてやるんだよ、てめえと同じ感情に陥った人間を目にしたら人は我に返るんだ、自分自身の醜さに気付いて」この話が本当かどうかは分らないが、言いたいことは分る。自分の感情を伝えたいのだ。

三蔵法師は「立ちなさい三人共、倒された振りをし、彼女を殺めるつもりでしたね……それは許しません」そうすると「……阿保抜かせちやんと死にかけたよ」そう言っつて孫悟空達が立ち上がった。

羅刹女は「貴様……」と言うが、手を出す様子はない。

孫悟空は「やめだやめだ、武器を捨てろ、お前ら」そう仲間たちに言い出した。猪八戒は「な……何を言っつてやがんだ、旦那」と動揺しているが、そんな反応を無視してこう言い出した。

「散々暴れて殺しかけ、殺されかけやっと思っ出した、生きてるうちが華だ、楽しかったよあんたとの喧嘩は俺はあんたみたいな女となら永遠に殺し合いたい、だから殺したくも殺されたくもねえ、なあ、羅刹女よ、火焰山の炎鎮めてくれ、後生だ」語りかけるように観客を惹きつける「王賀美陸」の芝居……だがこれで通じるのだろうか……

猪八戒は突然、ドンと足踏みをし「オイラはまだ負けてねえぞ！　かかってこい羅刹女!!」そう大見得を切った。

孫悟空が「黙つてる猪八戒」と言うが、彼女の意識を彼らに向ける事「には」成功したようだ。最後に孫悟空が羅刹女の肩を持ち「さあ羅刹女」と語りかけた。

舞台では羅刹女が、何も発さない芭蕉扇を持ったまま、舞台の中央へゆつくりと進んでいく「分かったわ」物語はついに終わりを迎える

ようだ。

だが変だ……画面越しでもわかる。役者「夜風景」から、ただの「人けいちゃん」になっている。完全に怒りが、感情が、芝居が、解けている。

墨字さんが淡々と「自分と役との境目を限りなく、ゼロにするのがアイツの芝居だ、それを捨てた、ただ人形みたいに台本通り動くつもりか」そう落胆する口調で言った。

その時突然「桃城千世子」は立ち上がり全力叫んだ「ふぎけんな……ふぎけんな、ふぎけんなよ、完璧なアンタに勝たなきゃ、意味がないんだよ……！」これまでの彼女の努力を、自分を追いつめていた姿を、これまでの仮面を壊していた姿を、キャリアを天秤に賭けている姿を見ていたサイド「乙」の誰もが、この感情の発露に何も言えなかった。私でも分かる、嘘偽りの芝居で、乗り切ろうとしている。もう演じられないなら、たとえ嘘だとしても、その心がなくなるとも、終わりまでただ動こうとしている。

羅刹女が、芭蕉扇を大きく振りかざし、物語が終わろうとした、その瞬間、孫悟空が羅刹女の手を取り、強引にその「行為」を止めた。すると羅刹女は芭蕉扇を床に落とし、崩れるように跪いた。感情の糸が切れた目には涙を浮かべている。

芭蕉扇を仰ぐのを止めた？ 物語的にはまるで、意味が分からない。これは、明確な台本の無視だ。サイド「乙」での動揺も凄いことになっているが、そこで阿良也くんがこう言った。

「ただ、止めたんじゃない、舞台を捨てて、夜風の芝居を守ったんだ」

とても長い数秒の沈黙の後、羅刹女が、目頭を拭い自ら立ち上がった。そうしてもう一度芭蕉扇を持ち上げて、今度こそ、大きく振った。

それは、舞台の上の「火焰山」の炎を振り払うのではなく、舞台上での「羅刹女」の怒りを振り払うものではなく、役者である「夜風景」の何かを振り払う姿だった。

天使を見つめる顔

今回のサイド「甲」の芝居のなんとも言えない結果に、皆、動揺が隠せなかった。アレは王賀美さんだけじゃない……あの時舞台にいた全員で止めたんだ、そういう芝居だろう。

つまりそれは「プロ失格」だ。ただそれでも、あの最後の場面は本当に「風」が吹いた気がした。

しかしこれは勝負、Webでの視聴者投票の為の配信映像は編集などの都合上、初日のものが使われる予定の筈、つまり今日の芝居さえ良ければ、明日以降の出来は勝敗に関係しない、この辺りの事があるから、あんな無茶苦茶な芝居をして見せたのだろう。これは恐らく主導は山野上さんの考えだが、そう動くとは分り切って天知さんが仕掛けた結果だろう。明らかに、全て分った上で、初日に全力をかけてきた形だ。そう今日されよければ、明日以降どうなってもいいって考え方だ。

本来なら役者の手綱を握るべき演出家が、強引に精神的を不安定にし、一時的に怒りの感情をドーピングさせて、演技の質を上げた様なものだ。どうやったかはこの時は知らなかったが、後に真実を知った時は、この座組を組んだ、あの天知の野郎に一発拳を食らわせないと気が済まないと思う程、腹が立った。

配信動画には初日のものは使われる、つまりサイド「乙」の勝ちは決まったようなものだ。一応楽屋では、そういう発言自体は出たが、手放して喜べるような雰囲気はなかった。

そんな所に墨字さん宛てに電話が掛かってきて、外に出て行った。その時の電話の相手の名前がチラッと画面に写っていて、それは「天知心」だった。だから、ついその後を付いて行ってしまった。会話内容を盗み聞きしようというよりも「天知心」本人に一言文句が言いたかったからだ。

会場の外に出て、人々が帰っていく中で周囲もあまり気にせず、二人は道ほど真ん中で喋り出した。

「サイド『甲』に関しては配信動画は二回目公演のものを使う。舞台上で泣き崩れてしまったんだ、サイド『乙』の公演が過ぎれば、つまりに明日になりさえすれば、アレがトラブルなのだと明白になる『夜風』さんが『王賀美陸』に辱められた舞台を世界に発信できないからね」そう、冷たく淡々と事実を告げるように天知さんはそう言い切った。

「山野上は今日に全てを賭けていた筈だ『夜風』達もその覚悟に答えた……それをなかつたことにするって？ ふざけんなよ、天知」出来るだけ感情を抑えているようだが、充分に感情が漏れ出ている。

ただそれでも淡々に「この舞台に、この布石に一体いくらかけたと思っている『本来の目的』を忘れるな、黒山監督、私たちは演劇人じゃない映画屋だ」そう言う彼は本当に冷徹だが、確固たる意思の元に挑んでいるように見えた。

「映画屋の前に一人の『演出家』なんだよ俺は……」その返答にこんな理想論のような言葉で返したが、ただ本当にそれをこの後実現して見せ始めた。

まず初めに、墨字さんは面子を揃える所から始めた。なんとこれから、明日本番を控えるまでに、本気で再度演出を作り直すつもりだ。そうして、サイド「乙」の全員とそれに星アリサさんと手塚監督まで呼び寄せた。ただ、千世子ちゃんも墨字さんが出掛けていた途中で、劇場を抜け出したらしく、星アリサさん経由で、居場所を確認することとなった、居場所はGPS的には杉並区だった。ただこの二人を呼び寄せている最中や千世子ちゃんを迎えに行っている最中に、どうしても今回の初回公演でのサイド「甲」の羅刹女の評価が気になり、エゴサーチをしてしまった。

正直、評価は二分化していた。羅刹女の迫力や王賀美の印象的な登場シーンは高い評価だったし、三蔵法師の論するような語り口や猪八

戒・沙悟浄の勢いに溢れた殺陣は受けていた。ただ、反対に、心理描写の点での視点変更、誰に感情移入して良いか？ はたまた、誰も彼も自分勝手であったように見えた等があったが、しかし一番大きなはこれだ。

「なぜ羅刹女は泣いたのか？」

この疑問は誰も正直、上手く言語化出来ていない。王賀美の芝居に驚いた説や、悟空達の侮辱に屈した悔し涙や、怒りが収まらない事を自覚して諦観した涙等言われているが、とにかく、この点に関しては統合性のない無茶苦茶部分として評価が固まりかけていた。

ともかくスマホのGPSを頼りに恐らく居るであろう公園に行くと、一人夕日を浴びてブランコに揺られていた「百城千世子」が居た。その姿ははつきり言って、とても絵になる。

墨字さんはそんな彼女に声を掛けた。視線を少し上げ、微妙な沈黙の後「稽古はなかったんじゃないの？」と答えるが「ああ、でも気が変わった、付いてこい」そういつて物理的に担いだ。

「黒山……あんた殺されたいの？」集合場所で待っていた星アリサさんが、見かけた瞬間そう言って。そりゃあ、あの「百城千世子」を米俵でも担ぐように、背負って運んでいればそう言われても仕方ないだろう。

彼、曰く「あ？ しかたねえだろ、こうしねえとついて来ねえんだ」そう真面目なトーンで言うから、阿良也くんが「はは、俺もスマホを買おうかな、カメラって、こういう時使うんでしょ」と悪ノリを続けた。

手塚監督は先ほど同じような目にあったからか「墨字くん、僕は君のそういう非常識なところが嫌いなんだよ、ああ、やあ千世子ちゃん」と嫌味半分で言った後、媚びを売り始めた。そんな姿に「夜にグラサンのお前もよっぽだよ」と突っ込みを墨字さんも入れるが、そんなことはお構いなく、私は思わず独り言で「うわあ、なんちゆう光

景……」と思わず言ってしまった。

千世子ちゃんは「……どういうつもり？」と至極真つ当な問いを投げかけるが「だから稽古だよ、てめえの作品を見直すの勉強だろ、喜べ百城、公開までまだ18時間もある。十分すぎる時間と面子だ、誰がどう見ても文句なしの圧勝の舞台にするによ」そういつて墨字さんに半強制的に、連れてこさせられた先は映画館だった。

観る映画は当然「デスアイランド」

「俺はこう見えて喧嘩に負けるのが大嫌いなんだよ、誰にも『不戦勝』なんて言わせるつもりはねえ、誰が見ても文句なしの圧倒的な違いを見せてやる、行くぞ」そういつて意気込むが、映画の看板に向かつて、自分自身が美しく写ってる方を向いて「こんな笑顔を貼り付けて、猫被って、ずっと天使の名前だけでやってきた。どういうつもりで黒山さんが、アリサさんや手塚監督まで呼んだのか、知らないけど、遅すぎたんだよ。造花は生花には勝てない」そう言い切った。

そんな言葉を受けて「まあっーことで、ガキがやっとな相応の拗ね方を覚えた、ちゃんと親が叱ってやれよ」と連れてきた二人に言うが、手塚さんの方は完全に星アリサさんの前で委縮している。

なんとか委縮した態度を笑い飛ばそうと「いやー相変わらず、勝手なやつですねえ」はははと笑ってお茶を濁そうと頑張っている。

そうして手塚監督から「ほら千代子ちゃん、君の分のチケットだよ」明らかに不機嫌そうにチケットを受け取りながら「……今朝だつて公開前に一緒に舞台挨拶もあったよね、本編だつてもう、何度も見てる」と至極真つ当な態々、今見るべき出ない理由を述べた。

「うんだよね、分る」半分顔を引きつらせながら、手塚監督は対応しているが「呆れたわ、千世子、私が教えてきたもの、全部忘れたようね、まだ見ていないものがあるでしょう」と星アリサには何か考えがあるようだった。

映画館は満員御礼だ。ついさつき上映館の拡大を決定したつてと

手塚監督が言う、明らかに舌打ちをした後「良かったな」と素っ気なく墨字さんが言う。「あれ？ 墨字くん今舌打ちした？」と軽くじゃれ合っている。ただ、誰の目に見ても、相当参ってるのが分る程、千世子ちゃんは苛立っていた。

阿良也くんが「俺が舞台役者だからかな、映画館つてさ舞台よりワクワクすんだよね、おもちゃ箱の中に入ってみたいでさ」そういつてはしゃいでいる。その反応を見て「ジョバンニ、おぎよーぎ悪い、ジョバンニ、こつちはバター醤油味だよ」そういつて、夜凧家の子供達が阿良也くんの相手していると、ポップコーンを摘まみながら「そういえばあんたの作品、初めて観るよ」というと関心なさげに「そう」ただけ千世子ちゃんが答えた。

そうしてようやく、劇場の明かりが落ち、物語が始まった。私の目から見えるのは、流石手塚監督作品という所だ、予算のかけ方が、他の日本映画と比べて段違いだ。本当に潤沢な資金繰りから作っているのが伺える。

ガタつと音が後方に聞こえて振り返ると突然、千世子ちゃんが立ち上がって、劇場を後にしようとしていた。ただ阿良也くんが腕を引き止め、元の席の方に引き寄せた。「見えないよ、邪魔」その言葉の真意は分らない、そうして訥々と「なるほどなあ、まるで人形だ、計算された表情、場面にも心情にも即しているように思えない上つ面の芝居、醜い現実の中に非現実的な虚像か……うんやつぱり鼻につくよ、これを極めたせいで、あんたはこんなにも皆に愛されるようになったんだね」そういつて彼は今、千世子ちゃんが見ている「画面外」そう画面の反対側、観客席に視線を向けさせた。

「まだ見ていないもの」恐らくそれは、劇場に満員の観客、それが一心不乱に画面に集中するあの視線たちと顔立ち。そうか、見せたかったのは、映画を見ている観客の反応。

エンドクレジットが流れ、ようやく物語が終わった。そうして渡戸さんが「それでこれが一体なんの稽古になるんだ、黒山くん」と真面目に聞き出した。まあ、そりゃあ聞きたくなるよなあと思っっている

「す……すみません」そう亀山監督が代わりに謝っている。

墨字さんは「社長、百城お芝居はどうだった？」とニヤけながら聞くと「完璧だったわ、当たり前でしょう『クライマックス』を除けばね」その答えを聞き出すとさらにニヤけ顔で「おい、デイスられてるぞ、お前の映画」そう手塚監督に言っている。相変わらず、性格が悪い。

ただその言葉に阿良也くんが反論した「わかっちゃいないな、星アリサ、一貫して偶像を貫いた女の表情に感情が灯る、その一瞬の変化が美しいんだよ、この映画は」そう評した。

その発言に手塚監督「ど……どうも」と何とも言えない返答をするが「それ以外は、あの瞬間を際立たせるための退屈な時間だったけどね」と切れ味満点の評価を下し「……あら」としか言えなかった。

ただ星アリサさんも黙っていない「逆よ、千世子の武器は現実離れた美しさにあった、手塚はもともと技術を引き立たせるための演出に長けていた、だから起用し続けた」と言い手塚監督は「ど……どうも？」と頷くしかできなかった。

「それをラストで崩すなんて、作品のテーマからも、千世子の需要からもズレている。いち雇われ監督に許されないはずのない愚行よ」そう強く言い切り、今度は手塚監督は何も言い返せなかった。

そして星アリサさんは『夜風景』の台頭もここから始まった」と言い出し、もはや誰も何か言えるような空気ではない。私は、ただただ、うわあ……他所で二人つきりやつてくれ……と本気で、真面目に怖かった。ちなみに子供達は「怖い映画だったねー、お姉ちゃん死んじゃった」と素直に感想を漏らしている。そういえばレーティングはPG12程度だったけ……

「でもヒットした」そう口火を切ったのは墨字さんだった「キャスティングの方針のせいで、原作ファンから嫌われ、自分とこの役者に見せ場を作るために台本も不自然、映像レベルじゃあ海外大作には劣り、演技方針もバラバラ」とこの映画の悪いところを列挙し始めた。

流星に、その映画の監督に「君ね、ハッキリ言い過ぎ」とまで言わ

れたが、止まらなかった。「でも売れた、なぜ売れた？」そう投げかけた。

「珍しいわね、売れたことがないから、売れる作品を嫌悪してる、あなたが数字を評価するの？」そう星アリスさんが煽って見せると「あ？

やんのかババア」と即座に煽りに乗る。

「言うまでもなくヒットは千世子のクライマックスのお陰よ」と言い切った所で、阿良也くんが「あんたどっちなの、意味わかんないところ巖さんぽいなあ」と言うと「目新しかったから受けたのよ、天使と新しい顔がね、ちなみにアイツぽくはないわよ」後半の所を強く否定しながらそう言った。

「確かにあの時貴女は『夜風景』を圧倒していた、でもそれが何？』『あの路線』を続けていけば飽きられる、この世界じゃね」あの感情的クライマックスに対して、何らかの嫌悪感を覚えているのを隠さずに言った。

ただ私は『あの路線』って……ある意味今の……千世子ちゃんが体得して見せた、あの芝居、けいちゃんの武器「メソッド演技」のことだろうか……

「じゃあ意図的に、あのクライマックスを作り上げたとしたら？」そう墨字さんは言い出した。そうして千世子ちゃんのプライドに「炎」を灯す、明らかな選択肢を突きつけた。

「気づいたか？ 何のために天使オタクを二人も呼んだと思ってるんだよ、言っただろ、圧勝するには十分な時間と面子だ。まあちと徹夜コースになるけどな、後はお前次第だよ」

ここから、彼女は「羽化」する。

呼び方の違い

サイド「甲」の芝居が終わって急遽、墨字さんが、芝居を改変させたいと言いつ出した。当然反発意見も出た。特に千ちゃんも猛反発をしていた。

「前日にそんな付け焼刃みたいな真似、通用をするわけじゃないです！それに千世子さんの芝居は十分すごいです！」なのにどうして急に「そう言つて、至極真つ当な正論を述べるがそれはこの人には意味がない。

「和歌月、それは俺が決めることだよ」ドスの効いた声の真剣そうな墨字さんは久しぶりに見た。稽古場で見せる熱の入った指導ではなく、冷淡に言う口調だ。意思の硬さが伝わってくる。

「急遽演出を変えるなんか、よくある話だ、本番前日まで出演者を発表しないなんて演出家もいる」そう言つて戸部さんはこの決定に冷静に受け止めている。「はは、あつたね巖さんが偶にやるんだよ」と阿良也くんは懐かしそうに言っている。

しかし勿論反対意見は他にもいる「だけど、たった半日で芝居を変えるのが、リスクなのは確かだよ」と山寺さんは事実としてそう言つた。

その返答に「基本的に変えるのは『百城』の芝居だけです」そう無茶な注文を付け「それ以外の皆さんには傾向通りの芝居をお願いします」と明らかに有り得ない様な事を言いつ出した。これが、あの二人を呼び寄せた理由だった。

とても長くて濃密な夜が開けた、私は意外と演劇人はよくタバコを吸うらしいということを知つた。サイド「乙」の大人組は殆ど喫煙所で、休憩を取っている。一つの仕事納めのような物なのだろうか？

少し覗いてみると、皆程よく疲れた顔つきをしていたが、嫌な疲労感は見えない。そんな空気の中、星アリサさんがこんな愚痴を零した「徹夜なんて、いつぶるかしら」

戸部さんは少し何か思いつ出すような表情をして「あんたとは巖さん

の舞台で共演して以来ですね、嬉しいですよ、また同じ稽古場で過ごせて」と言うと「私は二度とゴメンよ、戸部君」と半分笑ながら答えた。その答えに手塚監督は軽くを笑っている。

ただ山寺さんを少しボーっとしている「どうかしましたか山寺さん？ お腹でも空きました？」そう手塚監督が言うと「いや、黒山君はいつからあの演出プランを考えていたんだ？ 急ごしらえとは思えない……」とこの状況を上手く受け入れられていないようだった。

「そうだな、たった数十時間でここまで俺たちの芝居を変えた、それも最小限の工夫で……あれで本職は映画だと言うんだからな」戸部さんは褒めるようにそう言うが、私はそれは少し違うと思っている。

だって「黒山墨字」が、無策で敵に「夜風景」という最強の駒を渡してしまうわけがない。初めから「天知心」に警戒はしていたんだ。何かあって当然だ。まあ、それが此処までのモノになるとは思っていなかったが……

テレビ番組ではまた嫌なニュースをやっている。舞台「羅刹女」の関係のニュースは流石に嫌でも、目にしてしまう。見なければいいという話もあるかもしれないが、自分の所のタレントへの取り扱いが関係しているから、全くのノータッチを貫くのも何とも言えない。

「リッキーことを王賀美陸がまたやらかした!？」話題の舞台『羅刹女』の初回上演中リッキーが主演女優・夜風景の芝居を妨害！ 彼女はその場で泣き崩れ、客席は一時騒然だったとか！」そう扇動的なニュースにパネラーのタレントの一人が「相変わらずですね、リッキーは本当に酷いですね、決まっていた映画の話もこれでパーになったと聞いてますよ」と無責任に責め立てている。

王賀美さんのあの演技のをそう捉えるのは本当に不本意だし、そもそもこのタレントは初回公演を見たのなら、あのラストにのみ触れるのではなく、全体を通して、どう観客に羅刹女が観られていたか述べるべきだ。

まあ、そんな事は些末な出来事だと割り切るしかない。ギリギリまで、今出来る準備を行うだけだ。カメラ位置の調整やアングル、画角、

どのカメラがどう作用するか、綿密な打合せは私と千世子ちゃん、で充分行ったし、後は本番で、私がインカム越しに微調整予定だ。

ある意味、これは後手番の特権を存分に生かさせて貰った。サイド「甲」が先行だから、かなりの部分が予測出来た。見せ場になるカメラは、かなり想定出来たのは強みだ。

さあ、本番だ。

舞台が始まった。いや突然、暗闇に包まれたと言った方が正しい。暗転かとも思う様な演出だが、それにしてもあまりにも時間が長い。誰かが、停電かと思う様な絶妙なタイミングで、その声は響いた。

「ああ、腹が立つ、腹が立つ」真つ暗闇の中から声がする。そしてまた違う地点から「あの人は毎年、毎年、妾のところへ」その声がする。移動した気配や音はまるでしない。

現代社会で暗闇を強制される機会なんて普通はないから、嫌な演出だ、暗闇っていう物は人の想像いたずらに掻き立てる。そしてそんな嫌がらせて方を知ってる性格の悪い演出家は、喜ばせ方も知っている。

丁度観客の恐怖が臨界点に達しようとした瞬間、光が差した。それは観客席の中央、舞台へと直線で結ばれる通路にいる一人の女性に向けて当てられていた。そしてその女性は扇で顔を隠されていた。「我が子、紅孩児もあの猿のために出家させられたという、愛する子をも奪われ……それでも夫は帰って来ぬ……ああ、腹が立つ、腹が立つ」その台詞回しは淡々とそれでいて、滑らかに、感情を伝播していく。ただ顔を、見せないっていう、それだけでも人間の興味を誘うそして「怖い」とか「見たい」という感情を観客に持たせる。

この演出は元々、初めて「夜風景」が「彼女」を見たときに覚えた感覚の再現だ。「彼女」に覚えていた印象それは「綺麗、とても綺麗……なのに顔が見えない」というもの。

「彼女」は客席を走り抜けていく、幼く、無邪気で、いたずらで、それでいて可憐であった。それが、いかに、観客を魅了するか、理解して

いるからこそできる振る舞いだった。

自分自身の役割を、研鑽された技術を、スターズの戦略で作り上げられた、可愛らしさの象徴のような存在、天使のように、という言葉が陳腐にならない美しさが、そこには在った。

偶像の天使「百城千世子」

舞台上上がり、ついに扇をおろす時、あまりの美しさに誰もが魅了した。「ああ、どうしてくれよう」笑ながら、怒りながら、嫉妬しながら、彼女はそう言った。

墨字さんは「大衆様に教えてやれ、百城『天使』も『悪魔』も呼び方が違うだけってな」そう息まいた。本当に、この人は大言壮語を実現するためになりふり構わない時がある。

「ああ、腹が立つ、腹が立つ、どれ……また火焰山の炎を煽りにでも行くか、燃え盛る炎を眺めていると不思議と心が落ち着くから」大きな扉のセットの前でそのような言葉を言う。

相変わらず、綺麗なのに、違和感がある、いつもと変わらない筈なのに、とても「怖い」と感じさせる。演出のなせる技だ、闇から現れ姿を隠し、美しい芝居に反した恨み事を吐き続ける。

見慣れた天使の芝居が不気味に働いている。天使を天使のまま、悪魔のように演出している。墨字さんのなせる演出の妙技だ。役者の特性の理解と使い方が見事だが、これだけじゃ終わらない。

「おい、俺だ、孫悟空だ、扉を開けてくれ」大きな扉の向こうから、大きな声でそう言っている。「斉天大聖孫悟空……何の用です」そう言っただけで少しづつ自動的にスモークと共に扉を開いていくが、誰もいない。

そうして、スモークが晴れていくと徐々に見えてくる。猿のような、野生児という言葉が本当に似合う、ほとんど四足歩行で歩くよ

うな、背が低すぎてスモークで初めは見えなかった「明神阿良也」孫
悟空が現れた。その姿はまさに美女と野獣だ。

両方の仮面

その二人の異質さは確実に強く舞台に働いていた。「姉御……久しぶりだな、牛魔王のオジキはいねえのか……あんたの旦那さ」明らかに気味の悪い演技、獣の動きというのか、人間の皮を被った猿のような、独特の存在感がそこにあった。

「帰りなさい、私は今、虫の居所が悪いのです」そう優しげな表情ではあるが、明らかかな怒りが感じられる。

「そうはいかねえよ、俺はあんたの芭蕉扇に用があるんだ」一触即発の空気が流れた。美女と野獣、野生のリアリズムの芝居と人工的な天使の芝居、対照的な演技故にか、全体をより際立たせている。

そしてそれはより「羅刹女」が美しく見える。

「何が造花は生花に勝てねえだよくだらねえ、てめえがてめえで築いてきた努力を否定しちやあ世話ねえな、お前の努力が誰に勝てねえって？」 そう言っつて墨字さんは楽し気に千世子ちゃんの事を皮肉混じりに褒めていた。相変わらず、口が悪いが全くもってその通りだ。

確かにメソッド演技というモノにおいて己の感情は武器になる、だけれどこれだけじゃあ「夜風景」に及ばないかもしれない、けれどそもそも「百城千世子」という存在であるというそのものが、武器なのだ。それに気づけば話は変わってくる。

「くれねえってんなら腕づくでいくぜ、牛魔王のオジキがいねえってのは好都合だ」まるで野生児そのもののような衝動的な芝居はなんと「羅刹女」にも伝播した。

「あんな男になくとも」そう言っつて四足歩行の猿のような構えをし、刀すら抜かず、獣のように交戦を始めた。

「そうだ百城、飼い慣らせ『天使の仮面』も『腹の中の悪魔』もどっちもお前だ」 そう言っつて、墨字さんは楽しそうだ。この演技プランはファンは卒倒ものだろうけれど、彼らは幸い度し難い、だからすぐに

また思う 「もう一度見たい」と、天使のもう一つの顔をそう何度も何度も……

彼らの活劇は、爪と牙の攻防であった。まさに化けた姿、獣そのものと言っていていいだろう。いつもの千世子ちゃんとは全く違うからこそ、強く惹かれる。

「そうだ百城、殺す気でやれ、人目なんて気にしてる暇ねえぞ、ただし、見せ場は観客の観たいもん観せてやれ」そう言った直後、丁度攻撃を食らった、瞬間、表情が切り替わる。先ほどまでの獣の姿から、美女の姿へ。悪魔から天使へと変貌する。

「ちと分が悪いだろ、姉御、牛魔王のオジキがいねえとよ」煽る孫悟空にまたしても表情が変わる。「その名を口にするな」刀を抜きながら、怒りに満ち満ちた、恐怖の姿へと変貌を遂げる。

天使のように美しく、悪魔のように恐ろしく、この二つを永遠と繰り返す芝居、サイド 「甲」で行なった「夜風景」と「王賀美陸」二人で行った、対局の芝居を一人やってのけている。見事に天使の仮面と悪魔の仮面を意識的に見せて、魅せている。

勿論、それだけじゃない、あつちとは画面映えが違う。後手番の有利性を存分に活かさせてもらう。千世子ちゃんは「計算通り」自分からフレームに収まっていく、舞台の上からでも冷静にカメラのアングルがどこを向いているか理解している。今日の朝までに画角まで、ほぼ全て把握している。

原作者が「甲」にそつちにいるなら、こつちの「乙」は映像作家だ。映像に関してはそつちの演技の後なら研究出来る、見せ場をどのカメラに担当させるか、なんて当然決めている。そのために徹夜で仕上げてきたんだ。

にしても千世子ちゃんはやっぱり恐ろしく画面映えするなあ、普通やれって言われて出来るものじゃないんだけど、カメラを意識しながらあんな芝居、流石スターズの天使……

「ああ……なんという屈辱、許せぬ、許せぬ、許せぬ、許せぬ、あの猿

め、しかしあの芭蕉扇は偽物、それに気付いた奴は再びここへ戻って来るだろう、その時こそ奴の最期」場面的には怒りに苦しむその瞬間のはずなのに、両手を広げ、怒りを楽しむその様は、天使のような神々しさすら感じられた。

昨日の今日でよくもこんな完成度にまで持っていけるものだ、むしろ、天使の仮面の使い方こそ本領発揮だから、水を得た魚なのかもしれない。彼女からすれば十余年続けてきた事と新たに学んだ技術を繰り返してるといふ事なのだろう。

墨字さんは「山野上の馬鹿といい、どいつもこいつも本番で役者を変えようとしやがる、時間の取れない映画じゃねえんだぞ、どんだけ稽古期間あつたと思ってるんだ、勿体ねえ、稽古で変えろ、稽古で、せつかくの演劇だろうが」そう言つて、また強い演技プランを見せ付ける。

それは共演者達、猪八戒や沙悟浄といった、羅刹女にヤラれる役どころ、その芝居が強ければ強いほど、千世子ちゃんに目が行く作りになっている。対等な芝居ではなく、主演を際立たせるために共演者を景色にした構成に仕上がっている。

花園にいる天使、戦場にいる天使、景色が変わって際立つの景色そのものではない、天使そのものだ。ここはけいちゃんとは圧倒的に経験の差が出た場面だ。相手を使って、自分に注目を集める技術は段違いだ。

ただ、この作品の阿良也くんの牛魔王の演じ分けでみせてきた、二つの顔を使い分けていた「百城千世子」の芝居の意味、彼女はそう牛魔王の前ではずっと美しかった。

そう「夜風景」のように、彼に怒りを見せことなどまるでなかった、つまり「乙」の羅刹女は牛魔王を本当に愛している、故にどれ程悲しかろうと辛かろうと、恨みたくとも恨みきれないでいる。

その思いを、感情を、なんとか忘れようとしている。それ故に殺し合いに身をゆだねることによって、何とか平静を保とうとしているという歪な構成。それ故に羅刹女の狂気の芝居が、活劇が、色鮮やかに

写る。なぜなら、それは本質的には意味のない悲しみの戦いだから。

遂にクライマックスが来た、孫悟空が大見得を切る「散々暴れて殺しかけ、殺されかけやっと思ひ出した、生きてるうちが華だ、楽しかったよあんたとの喧嘩は俺はあんたみたいだな女となら永遠に殺し合いたい、だから殺したくも殺されたくもねえ、なあ、羅刹女よ、火焰山の炎を鎮めてくれ、後生だ」殺し合いに溺れることに救いを覚えた、羅刹女は孫悟空の話に乗ることにする。

舞台では羅刹女が、芭蕉扇を持ったまま、舞台の中央へ進んでいく「分かったわ」とそう言い、物語はついに、終わりを迎えるようだ。

最後、火焰山の炎を沈めて、終幕が台本だ。同時に本来なら、決定的なものになる。サイド「甲」の敗北と王賀美陸への非難が、しかしそうはしなかった。

羅刹女が、芭蕉扇をゆつくりと大きく振りかざし、物語が終わろうとした、その時、孫悟空が羅刹女の手を強引に取り、その終わりという「行為」を止めた。そして羅刹女に向けて孫悟空はいや「牛魔王」は微笑んだ。それ故に芭蕉扇を床に落とし、崩れるように跪いた。感情の糸が切れ、目には涙を浮かべている。

そうこれは、この物語の新しい解釈、孫悟空という存在なら気付いてるはずなんだ、羅刹女の二つの顔と正面から向かい続けた、彼なら惚れた存在への思いが、殺し合いなんかで忘れられる訳がない。

つまり、このシーンをトラブルじゃない「演出」として魅せることに、捉えること解釈の余地が生まれる作りになっている。これは、墨字さんが頭を下げた結果だ

サイド乙の現場で皆を集めて、頭を下げ、最後の芝居を変えたいと正直に述べた。勿論反発もあった。こんな直前にだとか、自分たちにも台本を無視しろということかとか、サイド『甲』での帳尻を合わせるためにか等どれも、ある意味正論だ。

ただ墨字さんはそれらの意見を受け止めた上で「いや単にそうする

と思ったんだよ、孫悟空なら」と言う視線は一点に集まり、独特の空気が流れた。そういうことなら、決めるのは俺たちじゃない、と言わんばかりに阿良也くんは無言の圧力が押し掛かっている。

「……『孫悟空ならそう思う』か……なるほどそうくるか、じゃあ頭を下げるのはズルいな、黒山さん、あんた案外人たらしだね」はにかみながら、阿良也くんは了承した。

墨字さんは「この物語『羅刹女』は『怒り』の物語じゃねえ。てめえの気持ちが認められない女が『孫悟空』に背中を押される、そういう『救い』の物語だ」そう定義してみた。

百城千世子の演技で舞台には、また確実に、風が吹いた。ただの見せかけの芭蕉扇にそんな力はなくとも、ガラスの向こうに彼女が入ようと、確かに風は吹いのを感じた。

その鮮やかな終幕に舞台は殆どスタンディングオベーションに近い状態になっている。

この結果のため息交じりに「はあ……一夜漬けにしては及第点か……明日で詰めれるとこ詰めねえとなあ」そう墨字さんはボヤいている。この人にとってはこれが及第点なのか……とも思うが、とりあえずこの結果に安堵した自分がいた。これで、けいちゃんが矢面に立たされるようなことは無くなったから……

黒い思惑

天知の今回の企画「羅刹女」の誘いに乗った理由は、俺がある映画を撮りたかったからだ。正確に言えば、一度、俺が降りる事になったあの企画を真に「復活」させるためだ。それは俺が、無理して何とか初監督作を二十歳で撮り、その後、世界各国を飛び回りドキュメンタリー作家として映画を撮り、日本では評価されない作品を作っていた頃……二十代後半の頃だ。ある小説が「映像化」されるといふ話が持ち上がった。

作品のタイトルは「マクガフィン」書いたのは「松野龍也」という小説家だ。

その事実の何が伝えたかったって言うと、コイツが一応、作品作りにおいて「のみ」は、師匠のように慕っていた人物だったから、この「映像化」の顛末について解説がしたい。コイツの書かれた小説群は殆ど私小説というか自伝的と言ってもいいような自分自身の話について、自分が体験してきた内容を本当に赤裸々に書いて、自分がいかにして最低最悪な行為を繰り返したかということ表現した物だった。

なのに、どの作品にもコイツの顔が見えない。そう、不可思議な存在として物語の中心にいるのだから。しかも、どう読んでも自分の経歴、女癖の悪さや人格の悪さを描いているのに、まるで何を考えているのかが掴めない。

そもそも文体として自伝的作品でありながら、自己の分身であるだろう存在はまともに喋らないし、独白もしない。ただ、周囲の人物からその人物像が炙り出される。

唯一あるのは、淡白なあとがきだけで、しかもそれすら徹底的に、物語の客観視と作者の現状を適当に書いてあるだけ。そんな小説家のコイツの代表作がこの「マクガフィン」だ。

その内容の奇抜さ・可笑しさ、その空虚な「中心人物」というのがまさに彼自身・作者本人で、この「マクガフィン」というとんでもない設定だった。

この明らかにヤバそうな作品に、何故かは知らないが、俺は心奪われ、監督として参加した。そしてまだ、新米プロデューサーだった天知もこのプロジェクトに参加していた。

この物語で描かれていたのは自殺願望を持ったある男がどうやって死ぬか、それともどう生きていくかという話だ。これを彼の事を知っているある女性達が、彼について語っていく。もう生きる希望がない男が、死ぬのか、それとも生きるかという問題について、笑えない冗談交じりに本気で取り組んでいる話だ。

基本的には、ある女性達の視点から語られるが、ただそれさえも怪しい。そもそも、何故、彼女達はその情報を持っているのかというのすら、不可思議にボヤかされているからだ。

そして一丁の拳銃を手に入れたらしいところから話が大きく変わる。その拳銃で「誰か」を殺そうとそうして、その後「誰か」が死んだというラスト。そう「誰か」を撃つて、物語が終わる。自分自身の命を懸け金にして、手に入れたい死というものを描いた物語だ。

小説では、最後の描写は「誰か」の墓参りに行くシーンで終わっていて、ある男が死んだとされるようでもある。ただそれを知りえるためには、その前の段階で一度その撃つたという事実を知るために「誰か」が帰還していないと成り立たない。それ故に「誰か」が「信用できない語り手」であることが如実に表されている。

だがこの「映像化」の話は途中で頓挫した。途中までなら俺が作成した脚本も構成もキャストイングも進んでいたし、むしろ順調だったとすら言える。それなのになぜうまくいかないか、それはどうしても俺が用意した「ラスト」にスポンサーが納得しなかったからだ。この描き方に拘ったせいで俺は、この作品から結局下りることになった。

俺が用意した「ラスト」は簡単に言えばある男の代わりに女性達の一人が死に、その女性の文体を借りてある男が書いているから、そもそも本編では、死んでいないという「ミスリード」という「ラスト」に持つていくという物だった。

この作品の発表からすでにこの考察はされており、完全に原作を無視した解釈という分けではない。ただ、あの開けた作品に一つのピリオドを打つという選択をしただけだ。

ただ、この「ラスト」はスポンサーから嫌われた。難解であるという理由と映画として映える為に、この作品の「ラスト」として最後に「ある男の死」が観客の観たい物だという分りやすい答えを用意することになった。

実際に俺はこの問題で、途中で監督・脚本から降ろされ、この作品は「映像化」してしまった。そう、実際に別の監督と脚本でこの作品は世に出され、ほどほどのヒットの映画になった。そして、この「ラスト」があまりにも説明しすぎていた。

実際にこの男の死体を、語り部である女性達の前に登場し、本当に画面に「映して」しまったのだ。そこで、全て終わった。

この「映像化」してしまった映画を、再度、撮るには違う「国と言語」でやるか、時間を「数十年単位」で置いてやるしかない。ただ、このほどほどのヒット作で、それをするのは映画という莫大な金のかかる事業上、資金面的に不可能だ。

だから、俺は絶望した。もうこの作品を日本で撮る方法はないのだと……けれど、諦めてから話は可笑しな方向に転がった。作品が出来上がってから、数年後、原作者から「マクガフィン」の本当の中身、すなわち「ラスト」を俺と天知に伝えられた。それは、事実上、この映画を再度撮らないかという無茶な提案だった。その提案に、俺は引かれはしたが、あまりにも「映像化」に必要なピースは揃っていない

めに、天知は「無理だ」といつて直ぐに手を引いた。

だが俺はその計画を本当に水面下で、ひっそり進めていた。だが、それは当然のように困難を極め、何年も懐で温めているだけの企画になり、諦めていないだけの形骸化された夢となっていた。そんな時に、原作者の本名を本当に偶然知った。

それは、ある新人女優オーディションで、とある逸材を見つけた時だ。その人物が偶然、原作者の娘だった。名前を「夜風景」という、そのほんの少し後に原作者の本名は「夜風龍也」というのだと知った。その時まで、松野という苗字がペンネームだとは知らなかった。

そこからは、破竹の勢いだった。まるで、物語の中の出来事のように、トントン拍子で、彼女は女優の道を駆け上がっていき、有名になっていく。その為に俺は何だって行った。そしてその話が天知の耳にまで届いた。

だからこの企画「羅刹女」の話が来ることになった。天知はとうに諦めていたと思っていたが、この座組からそれは違っていたのは良く分かった。当時、キャストイングはされていたが、途中で離脱した「王賀美陸」それにこの作品の中心に「山野上花子」という存在を連れてきていることから、本気だということが分る。

この芝居での出来事そのものが、番外戦術が、座組が、再度「マクガフィン」を撮影する動機づけになっている。

例えば、視聴者投票の為に「山野上花子」の行ったであろう行為が、宣伝に変わる。そしてそれは「王賀美陸」の優しい暴走に繋がり、「夜風景」の迫真の演技は意味が逆転する。

そして、その対称に「黒山墨字」という存在が演出家としている事に、大きな意味が産まれる。

全ては俺の映画に必要なピースだ。そのために不都合なものは俺が全部払い除ける、その為にまずは「羅刹女」の成功だ。ここでつまずいたら俺の映画が最低五年は遅れる。そのために、百城には勝ってもらおう。

夜風にはまだまだ成長してもらわなければいけないんだよ、百城、お前はそのため不起爆剤だ。しばらく夜風の一步先を歩いてもらうぞ。

千秋楽と打ち上げ

三日目サイド「甲」二回目公演、どうやら「乙」の芝居に触発を受けて新たな解釈を加えて来たが、羅刹女を掴みきれないままで、本番を迎える。良くも悪くも突き抜けない、その芝居は王賀美の存在感と拮抗が取れず不本意な形で終わる。

四日目サイド「乙」二回目公演、千世子ちゃんのさらに精度を上げた、その芝居は高い評価を得ることに成功する。

五日目サイド「甲」三回目公演、王賀美さんの存在感抑えようとし、立ち回りを工夫したと思われる芝居に仕上がっているが、根本的解決には至っていない。

六日目サイド「乙」三回目公演、千世子ちゃんの新しい芝居が板につき始め、自他共に認める程の完成度に至る。

遂に昨日始まったネットプライムでの配信も、既に視聴回数に差が出てきている。一応、サイド「甲」の初日公演は一部で高く評価されているがやはり……厳しい。

それでも、それでも「夜風景」は折れなかった。

六日目の公演が終わった後、けいちちゃんと山野上さん二人が共に「乙」側にやってきて、凄まじい事を言つてのけた。流石に墨字さんも「今、なんて言った」と聞き返したが、内容は変わらない。

「千世子ちゃんが、どうやって羅刹女を演じているのか、教えて欲しいの」そのあまりにも強引な主張に、困惑している千ちゃんがいるが、どうやら本格的になりふり構わなくなったらしい。

その主張に対して千世子ちゃんが「私たちのメリットは？」そう至極当たり前な事を聞くと山野上さんが「私たちの羅刹女を教えます」堂々と答えた。

墨字さんは少し呆れながら「Win-Winだろって面しやがつて」と言う、確かに今の現状からするとこちら側としては受ける必要はない。けれど、勝負を諦めたからそんな事を言いに来たようではな

いのは二人の佇まいを観れば分る。

墨字さんが「食えないな」とその言葉とは裏腹に少し口角を上げた風に言い、千世子ちゃんが「うん、怖いよね、でも利用しよう、私たちが」そう言い返した。この返答にけいちゃんは素直に「ありがとう」と言つて結局、かなり話は丸く収まった。

そうしてサイド「甲乙」共同稽古が開始された。互いに互いの芝居への意見を交え、双方の芝居への演技力向上に努める。それは確かに双方に大きな意味と効果をもたらすが、それでこの差は縮まつていないというのは恐らく両者の陣営ともに感じていた事だろう。それ故に、サイド「乙」側から反発が起きなかつたというのもあるかもしれない。

ともかくそうして、舞台は公演されていった、そしてこれは後にけいちゃんから聞いた話だ。サイド「甲」の千秋楽の日、千世子ちゃんを楽屋に呼んでずつといてもらったんだそうだ。特に、何をすることもなく、目を瞑つて、彼女に向き合つていたという事らしい。

それに多少、千世子ちゃんも疑問を覚えたが、いつかのお返しだということだということだ納得したそうだ。ただこれはお返しというか、やれることは全部やりたいという意思だつたとのことだ。

ただその場で、千世子ちゃんに衝撃的な事を言われた。その時の事は鮮明に覚えているらしく、心地よい沈黙のなかで、緊張と集中と自信が心をゆつくりと満たしていたときに、その言葉は千世子ちゃんから放たれた。重大な事を敢えて軽く打ち明けるように……

「負ければ全てあなたに奪われて、勝てば一生女優を続けられる、そう信じていたの…… 馬鹿みたいだよ、そんな単純な話じゃないのに、忘れていたんだよ、舞台が終わつても勝負は毎日続くんだつて、どうせ私達はしわしわのおばあちゃんになつても役者だから」あの憧れていた存在から、そんな言葉を貰えるなんて考えて入なかつたし、嫉妬してくれるなんて思つても見なかつた。そして最後の言葉……

その言葉は、人生で最も言われて嬉しかつた言葉だと私だけに教え

てくれた。

サイド「乙」の千秋楽から一日、ネットプライムでの配信が始まって二週間、町で「羅刹女」の話を聞くことが増えた。世間ではなかなかの噂話になっている。

「夜風景」の怒りに満ち満ちた演技と「王賀美陸」の羅刹女最後のシーンの意味、意味深なサイド「甲」の独特の空気感、それと遂になるようなサイド「乙」での見事な魅せ方「百城千世」の二面性を存分に見せ付ける様子と「明神阿良也」の見事な一人二役の芝居。

主演の人々以外にも白石さんの演技の幅や若手のデスアイランド組の活躍っぷりが評価され、面白いことになっている。

ただ投票の結果以前に、視聴回数が違うので、どちらが勝利したかは語るだけ野暮だが、私としてはまさに「甲乙つけがたし」という結論でこの話の勝敗は締めくりたい。

それにこの一件以来、スタジオ「大黒天」への仕事のオファーは増え続けている。これは墨字さんが演出家として、けいちゃんが主演として大活躍したからだという証拠なのだが、ただ、今日の私はそれどころではない。

そう今日は舞台「羅刹女」の打ち上げなのだ。ただ、そこらじゅうに「混ぜるな危険」っていう感じの組み合わせがゴロゴロしており、一触即発の匂いがプンプンしている。正直、今日此処に来て美味しいお酒が飲めるとは思っていない。

なので、とにかく私はひたすらにこの場では道化に徹して、無理に誰かに話を広げさせたり、物真似させたり、とにかくこの場から去りたい一心で、テンションを無理に上げてい過ぎていた。案外、皆は上機嫌に振舞っていた。あくまで勝負事だとして、後腐れがあっても可笑しくなかったが、どこか割り切っている。これも両陣営ともに共同稽古して、全力を出し切った後故にだろう。ともかく、なんとか、一触即発の危機は訪れる事はなかった。

そうしてやっと落ち着いて来た頃、墨字さんの横の席に千世子ちゃんが「ここいい？」と尋ねて座った。そして本当に珍しく、あの千世

子ちゃんが墨字さんに率先してお酌をしている。そしてお酒を飲んでいる最中に「私たちもおしまい？」なんて聞いていた。

墨字さんはその一言で、かなりむせ返って「お前、マジいろいろ気をつけるよ、そういうの」と完全に虚を突かれた様子だった。

ただ千世子ちゃんはその同様に追撃するように「気づいていたよ、あなたはずっと私を通して夜風さんを見ていた、次はあなたを私に惚れさせる」きつと本気なのだろう。鋭い口調が物語っているが、墨字さんは反論に「惚れてねえ役者の演出なんてしねえよ」お酒が入っているからかそんな台詞を平気な顔をして言う。

すると王賀美さんもその席に近寄って「おい、黒山墨字、内緒話か」陽気に話しかけて、いる。それに墨字さんが「なんだよ次から次へと」そう軽口を叩きながら、この三人が話し出した。

内容は、挨拶から始まったが、お酒の影響からか話は真剣な方向かう。そろそろ未成年組を家に帰す話から、流れるに王賀美さんの口から明確に千世子ちゃんに対して「褒める」言葉が繰り出される。きつと、スターズにいた頃から知っている存在なのだろう。故にこの勝負の決定打になった相手を賞賛したのだろう。

そして最後に王賀美さんは「次は映画なんだろう、黒山墨字、俺たちの準備はできてるぜ」流石の自信を持って言う。「……ああ、待つてろすぐに動き始める」そう言うて、墨字さんはけいちゃんの方を見ながらそう呟いた。

それから少しして山野上さんが「モテモテでしたね」と墨字さんに唐突に呼び掛けてた。ぱつとみて俯き、酔いつぶれているように見えていたが、どうやら違ったようだ。その声に少し驚き「起きてたのかよ」と返答すると真面目なトーンで「ありがとう、黒山さん」と俯いたまま言う。

その反応に墨字さんは「何がだよ、酔っ払い相手の相手はごめんだぞ」と言うが、山野上さんはそのままの体勢で一気に胸の内をさらけ出した。

「私はもう二度と演出をすることはありません、それどころか……」

絵も小説ももう書きたいと思えないんです、もう創らなくていい、もう創る理由がない……。やつと自由になれた」そう言い切り彼女は顔を上げ、爽やかな表情を見せる。

「……ずりいな、お前だけ」そういつて自分だけ創作という苦しみから抜け出した、彼女を見つめ墨字さんはお酒を飲み込んだ。

広告と商品価値

けいちゃんの千秋楽のその後は、ハッキリ言っただけでもない人物の世話になることになった。なんとあの「スターズ」の星アリサさんが直々にけいちゃんを女優として、面倒を見るという物だった。一応、舞台「羅刹女」の墨字さんの功績の借りを返すとのことらしいが、それにしても直々に面倒を見なくてもいいのではないかとも思うが、どうやらそうけいちゃんの場合は単純ではない要だった。

例えば分かりやすい例として大手の広告・CMに関して、そのマネージメント能力なんかにとてつもない重要な意味を持って、けいちゃんの役者としてのプライド・心構えに、大きく影響を与え、成長させた。

このような広告の仕事は今までのようにバックボーンがしっかりとした芝居ではなく、具体的な物語上の説明のないたった数十秒の世界で、何を演ずればいいのか？ 何が正解なのかという点について、けいちゃんには理解出来なかった。いやしたがらなかつたという方が正確なのかもしれない。

その時に手綱をしっかりと握って、私が代わりにコントロール出来たかという絶対が出来なかつたと言えるだろう。それをアリサさんはしっかりとこなしてみせるということだった。

実例としてあるスポーツ飲料のCM、浜辺を走る夜風景は「大嫌い」と叫び、その後、妹役の子からスポーツ飲料を受け取り、勢いよく飲みこむという演技をしたことがある。

この一連の流れが、けいちゃんには理解出来ないという。確かに、此処に物語性はほぼ存在しない。何に対して怒り、何で走っているのか、何故スポーツ飲料を飲んで喜ぶのか？ それが彼女にとってはとても大きな問題だった。

ただ、この問題に正解は初めから存在しない。そう、この規模のC

Mになると企画は組織で作るのが一般的で、一人の作家が全てをコントロール化に置いていくわけではない。利害が一致した目には見えない大勢の人の理想象・妥協点・それに折り合いを付ける芝居が求められる。

こんな芝居は普通の役者には、求められていない能力であり、例えば求められたとしても「正解」の姿は誰の中にも想像ですら存在しない。故に、誰もが妥協点を探り合う。それが普通だ。

ただ、それを自身のプライドからけいちゃんは「ごめんなさい、私は自分で納得の出来ないお芝居はできない」と啖呵を切ったとのことだ。しかしそれをアリサさんは見事にまとめ上げた。

「俳優であるあなたの都合は私達に関係ない、プロを名乗るなら意地でも求められている芝居をやりなさい、それが大衆のスターになるって事よ」それはけいちゃんの意味を完全に跳ね除けるような言葉、一聞したら「人形として、感情を殺し、ただ演じる」という意味に聞こえるかもしれない。しかしこの言葉はそういう意味ではない。

「この世界での戦い方を覚えなさいって言ってるのよ、つまりCMの意味を答えなさい、覚えなさい、宣伝……つまり紹介、人が人に何かを紹介したくなるのはどういう時？」と本質を問いかけて、自分自身で答えを見つけさせるように導いた。

それにけいちゃんは少し悩んで「自分が『好き』なものを『好き』になつてもらいたい時？」と実直に答えたそう。それこそが、存在しない「正解」限りなく近い回答。

それこそが、唯一の「役作り」だと言う風にアリサさんは導いていつてくれた。この答えにはけいちゃんは納得できたらしく、このスポーツ飲料を好きになるという「役作り」を行った。

そのために、自ら考え、数十年前に作られたこのロングヒット商品開発をした人達にまで、直接電話をかけ、何故このような味なのかと聞き出し、好きになるための努力を惜しまなかった。こんな愚直で非

効率的で、傍から見れば馬鹿のようにすら見えるの事を大まじめに取り組むのが、けいちゃんだ。ただそれでも良い芝居は必ず人の心に残る。その行動を一つの「商品」としてパッケージングしてみせたのがこの事例だ。

俳優というのは、所詮は商業活動である限り、俳優は「商品」である。そこに、嘘をつけない役者・俳優が、この世界に足を踏み入れたら、様々な矛盾や理不尽が襲い掛かってくる。しかし反対に、嘘のつけない俳優というキャラクターはそれはそれで「商品」になりえる。

この業界は本当に小さな世界、基本的には小さなパイの奪い合いではない。故にその大御所のスターズの社長直々に、嘘のつけない俳優を育成しているというのはとてつもない速さで噂話として広まる。そこに「商品」価値が見出す企業が出るのは必然であり、結果を残せば更に加速度的にその「商品」としてのキャラクターは強く広まっていく。

その勢いは異常なまでだった。ある意味「スターズ」という事務所の力を借りたブースト効果であったとしても、彼女の知名度は一気に世間に浸透していった。更にそこに、折り紙付きの実力と愚直にすら見えるキャラクター、さらに嘘が付けないから、惚れ込んだ「商品」以外仕事を受けないという人物像が拡散していく。

別に、下手にブランディングしていなくても天性の魅力がそこにある。あの「スターズの天使」の嫉妬を買うだけの実力が初めから存在しているのだ。故にタレント性や存在感も有って当然であり、能力・器量も良く、いい意味で裏表がない。そこに更に人のために懸命になれる人間は無条件で他人を惹きつける。元々彼女にはスター性があったんだ。

この才能があまりにも秀でていたから「スターズ」は取らなかつたと墨字さんは解釈していた。扱おうとしなかつた、というのはなんとなく理解できる。最初の頃のむき出しの原石だった、けいちゃんの頃はお互いを傷つける諸刃の刃で「肉を切らせて骨を断つ」といった芝

居しかできなかつたからだ。故に様々な人々と様々な役柄を演じてきた事を通してようやく、人間として自己のキャラクター性を表現できる存在になったのだと思う。

こんな方法というか売り出し方は「普通」はあり得ない。何処かでセルフブランディングしたり、キラクターを作り出したり、順応したりしなければならぬ。ただ唯一それは特別な存在「本物」であれば許される。

この売り方はあつという間に、芸能界に「本物」が現れた話に変わり、即座に大人達によつて様々な策略が仕掛けられる。知名度の爆発は多角的にそれでいて、急速に訪れる。これに「スターズ」という看板は彼女を守るには必要だった。私と墨字さんでは、芸能界の裏での駆け引きは出来なかつただろうし、その為の実力はなかつた。

その為にアリサさんは尽力してくれたのだろう。恐らく、借りを返したいというのは事実だろうがそれだけではないのだろう。始まりのオーディションの時に、自分が「夜風景」という才能を見込んで入ながら、あえて手放した事に対する償いの意味もあるのだろうと勝手に思っている。勿論、私の妄想だが、全くの的外れではないだろう。ただ、それにしても勢いはあまりにも急速だ。何が起こっているのか分らない程の速さでけいちゃんは一躍有名人に成りあがっている。下手すると本当に、この国からけいちゃんを知らない人間がいなくなるんじゃないかと思えるほどだ。

だって町中の看板に「夜風景」の看板が広がり、辺り一面を埋め尽くしている。こんな状況を墨字さんは予測して、アリサさんに頼み込んだとしたら、ここから先に何があるのだろうか？

女優業と監督作

四月入学式の日、夜風景は全力で有名になっていた。何故そんな事を私が知っているかというSNSでトレンドニュースになっていたからだ。入学初日に気兼ねなく、新一年生たちと一緒に写真を撮り、会話を行つて、囲み取材の様な状況を自然に作り出し、そのせいで数百人規模の新入生が入学式の会場に遅刻させたという事実がニュースに記事になっていた。けいちゃんの写真と動画付きでSNSに上がっている。

これもけいちゃんの良さなのだが、そこまで甘いファンサービスは流石に何とも言えない。まあ、学校側はもはや何も言えない状況だった。学校側とはすでにスタジオを通して、一度芸能活動を認めたらえで、それが原因で辞めさせるといふのは学校側としては出来ないという事は確認済みだ。ある意味では可哀想だが、それでもこっちはけいちゃんを守る必要がある以上、一度許諾をした方が悪い。まあ、入学願書が前年度比の二倍以上になったという噂を聞くに、宣伝効果は大きく出たのだろう。それが、公立校として良かったかどうかは知らないが……

ただ、此方側としてもここ最近の活動はどうにかしなければいけない。基本的にはまだ問題はないが、けいちゃんを「スターズ」に預けた後、墨字さんが仕事場にまだ一度も戻ってきていない状態で、何かの準備をしている。これは非常に困る。

本来なら、マネージメント業務以外もこっち側で面倒を見ないといけないことは多い、実際に、有名になった事から引越し等のセキュリティ面の話は進めたが、お母さんとの思い出があるからと言って取り止めにしたりにしてアリスさん共々、困ってしまった。まあ、あと一年間はあの学校に通うわけだから一応、またその時期が来たら話し合おうという事になった。

ただ本題である「女優業」に関しては本当にてんてこ舞いだ。この一気に上がった知名度から、けいちゃんへのオファーが、常に来てい

る。舞台の「銀河鉄道の夜」の後のように電話線を切って、強引に何も受けないという判断も、けいちゃんの状態を考えるに得策ではないし、個人の判断で全てを対応する訳にいかない。それに今のこの状況これ以上「スターズ」には甘えられない。

だから近況報告を墨字さんと交わすときはとにかく忙しい。基本的にこちら電話をかけた時は繋がらないし、メッセージやメールは送っても反応はない。故に極稀に電話が掛かってきた時は何としても思いを伝えようと必死になって受け答えするが、殆ど墨字さんの要望を聞くだけの一方通行の会話に終わることが殆どだ。

故に今回会話も仕事の話は「MHK」のあるオーディションは一応受けるようにしたという事実確認のみで、それ以外のせつかくこんなに来たオフアートをどうすればいいか？ という問いかけを全て無視していいという強引な回答を駆け足で言われて、即座に一方的に切られた。勿論再度、掛けなおしても繋がらない。

また勝手に切ってあのヒゲ……とそんな事を思いながら、スタジオ「大黒天」ドアの前に来た時、中からガタンガタンともものすごい音がして、急いで開け様子を確かめると戸棚がひっくり返っていた。そしてくしゃくしゃの資料の中で、けいちゃんがひっくり返っていた。犯人は一目瞭然だ。一応「何してるの？」と聞くと「……別に？」と悪戯がバレた子供のような反応をする。さすがに「別にとって……」呆れながら答えるわけいちゃんが、あるものに目がいつていた。それはDVD、ちなみに監督の欄には「黒山墨字」の文字。

「それ探していたの？ 墨字さんの映画」そう答えると驚いたような顔つきをした。探し物がようやく見つけた様な仕草をしているから「興味あるんだ、墨字さんの映画」と言うと明らかに挙動が可笑しくなったが、その反応が可愛かったから何となく意地悪な事を言ってしまった。

「千世子ちゃんの演出、凄かったもんね、それじゃあ流石に気になってくるよね、墨字さんの事、言ってくれたら良かったのに、いいよそれ

持つて行って」と恥ずかしがるけいちゃんが見たくてそんな事を言う
と「な、何のこと？ ルイに頼まれてアニメ探しに来ただけなんです
けど？ 黒山さん？ ああ、あのヒゲのこと？ 最近見ないわね」と
全力で誤魔化しにかかるが、全然隠しきれていない。むしろ、あまり
にも棒な演技過ぎてワザとやっているんじゃないかとすら思う程だ。
その何とも言えない空気の後「じゃあ、じゃあ、お邪魔しました」と
言っけていちゃんはそくさと去っていたが内心は、この子本当に役
者か？ と思う程だった。

ただ、もし本当に墨字さんの映画が見たかったのなら、事務所まで
探しに来た理由も分る。墨字さんはいくつかの賞を取っている世界
的に評価された監督だが、日本で評価されているわけではない。故に
商業用のDVDになっていない作品が殆どで、購入することやレンタ
ルショップで借りる事は困難を極める。

ちよつと虐めすぎたかなあと少し反省をして、業務連絡と一緒に墨
字さんへ、追伸としてけいちゃんが墨字さんの映画を見たがっていた
という話を付け加えて置いた。

この話に限って言えば、墨字さんは迅速に動いてくれた。けいちゃ
んを誘って、即座に映画を観に連れて行ってくれた。後に考えれば特
別だったのかもしれない。墨字さんだって、結局人間だ。自分の作品
に出す為にけいちゃんをここまで成長させたのに自分の作品を気に
られなかったら、それは辛い事だろう。

現在墨字さんの作品が上映中の作品は都内のミニシアターで一つ、
何度目かの再上映でタイトルは「たんぼぼ」という作品。黒山墨字監
督作品の初作品だった筈だ。

確か、かなり奇妙な映画だった事は覚えている。一人の女性の日常
をただ淡々と描いて、切り抜いて映し出す不可思議なスタイル。しか
し、その女性の顔が一度も映画内でフレームに収めることがないし、
それが指摘されるまで気づくことは殆どないというどうやって撮っ
たか分からない作品だ。ちなみにエンドロールで、この仕組みに気づく

人は多い、何故ならエンドクレジットに主演の彼女の名前まで丁寧に描かれて「いない」からだ。

墨字さんにこの作品を見てから、どうやって撮ったのかや彼女についての関係を聞いたが、一度もまともに教えてくれなかった。

さて、この作品はどう評価されているだろうか？ 今回のこのミニシアターの上映は「羅刹女」での評判に便乗して依頼が来ていた物だが、基本的にいままでの結果から興行的にはあまり成功していない作品だ。根強いファンはいるが、あまり黒山墨字作品は大衆に受けが良くない。映画は相性だ。故に合わなければしかたないが芸術的というかアート・フィルムというかそういうジャンルは、刺さる人以外ためには創られていないことが実感できる内容だが、逆に言えば、刺さる間性を持った人間にはとことん刺さる。今回の場合はそれがけいちゃんだった。

その時の感想は一種の惚気話のように何度も聞かされた。多分、けいちゃんにとつては何度も何度も頭にこびりつく様な映画体験だったんだろう。聞かされた話によると、全員が席から立ち上がったも、自分は立ち上がれずにいて、その映画の余韻を味わっていた。

そして墨字さんに答え合わせをするように「あの主演の人はきつとお芝居をしていなかった。観客に何かを表現しようなんて少しも考えていなかった、なのに表現できていた。表情が見えなくても彼女がどんな気持ちか分かった」そうあの物語から読み取れた内容を必死に伝えようとした。

「友達が言ってたの、自分に惚れてくれた監督に惚れ込まれるなんて役者冥利に尽きるだろうって、この作品はそういうラブレターみたいな映画だったんだと思う。だからこの役者さん幸せだと思う、今日私、この映画に出会えて良かった」そんなとても気恥ずかしい事を墨字さんにけいちゃんは言ったらしい。それだけ、この作品に彼女自身が惚れ込んだだろう。

そうすると墨字さんは珍しく安堵の吐息をもらしたらしく「はあそ

うか……いやほつとしたんだろうな、お前に振られる可能性も考えていた、いくら映画の好みは相性だつてもよ、できれば望んで俺の映画に出て欲しかった、少し安心したよ」そう珍しく弱気な発言をしたとけいちゃんから聞いた。私を知る限り、子供っぽい冗談の様な弱さをワザと見せる事はあつてもちゃんとした弱さを人に見せる姿は殆どないから、本当に重大な要件だったということが、伝聞の様子から伺える。

「黒山さん、私これから自分の出演する作品は自分で選びたいの……いつ私で撮ってくれるの」その場の勢いとは恐ろしいものがあるが、けいちゃんはこんな事まで言つてのけたらしい。

墨字さんもその言葉にちゃんと向き合つて私にも言っている展望の一部をけいちゃんにもこの日伝えた。

「これは十五年も前にハタチのガキだった俺が取った自主制作映画だ。国内じゃ誰にも相手にされなかったが、なぜか海外で持ち上げられてよ、未だにちよくちよく上映してもらつてる。流通はさせるなつて俺が止めてるけどな……当時の俺にはこれが精一杯だった。一人の女の美しさを描くだけで精一杯だった。今はもう違う、世界のことを少しだけ知つた、撮りたい映画じゃない、俺が撮らなければいけない映画が見えるようになってきた。そのための力がまだ足りない、俺にもお前にも、でもすぐそこまで来ている」

「都会の若者だけに知られている役者じゃだめなんだ。田舎のジジイやババアにも知られているようなそういう役者じゃないと、最後の総仕上げだ夜風、オーディションで役を勝ち取つて来てくれ」そう言つて、未来への展望を語つた。

それに二つ返事で「分かつた、任せて」とけいちゃんは答えたらしい。

ただこの時、墨字さんが思い描いていた「映画」というのは結局、キレイな形では実現しなかった。けいちゃんがその「映画」に出演したからなかつたからだ。

オーディションでの奇策

本当に最近の私はすっかりマネージャーだなあ……はあく自分で映画撮りてえ!!! 誰か無利子無担保無期限で、出資金一億くらい出してくれないかなあ〜と馬鹿な妄想に耽りつつ、無駄な緊張をしないように、今は「MHK」のオーディションが行われてる部屋の前で、長椅子に座りながらいちゃんを待っている。

この「MHK」での「大河ドラマ」のオーディションに「のみ」に絞って「夜風景」をプロデュースする方針に決まったのは、墨字さんの独断だった。この事には流石に同じスタジオ「大黒天」のスタッフとして初めはあまり納得は行っていなかった。もちろん「大河」の場合、確かに時間的制約で、長期的に時間を取られる事があるのは事実で、それ故に他の大きな仕事を取ってきて、ダブルブッキングで出られなくなる仕事もいくつかはあるだろう。

まあ、その分「大河」の方が知名度は抜群で、作品の作りこみもお墨付きであることが殆どだ。それによって民放の作品よりギャラが安くても、結果的に役者はこっち側を選ぶ場合が多い、それによって倍率が圧倒的に違う。

それなのに、この作品一本に絞って、この大切な売り込みの時期を被せるのはどうかとも思う。受かるならその戦略で問題ないかも知れないが、正直に言えば「オーディション」は実力と確率論で出来ている世界だと考えている。

オーディションで「実力」が有れば受かりやすくなるはなっても、確実に受かることはない。所属タレントを決めるオーディション等や配役がある程度ばらける仕事なら、まだ実際の実力に見合った結果が決まるかもしれない。

ただ「大河」レベルまでになると監督や脚本家のキャスティングの趣味嗜好、それに配役との印象に合うか、他のキャストとの全体的なバランスに政治的なマーケティング戦略、それぞれが複雑に絡み合っ

て結果が決まる。それは実力勝負のテストではなく、それぞれの「相性」の問題にすり替わってしまう。

それ故に「実力」はあくまで、受かりやすくなるだけのもの、それも「夜風景」という今のブランド力では、それを考慮されず判断される可能性もあり、それなのに墨字さんに何か執念めいたものを感じる。

絶対にこのドラマに「夜風景」を出したいという何かだ。けれど、その理由は私には思いつかない。確かに今年の「大河ドラマ」は「キネマのうた」という戦後の映画界を支えた女優というものではあるので演じたいという思いはあるだろうが、そこにそれほどまでの、執着を覚える理由は墨字さんにはない筈だ。

ただ墨字さんは「夜風景」なら受かるという前提から話を始めていくように感じる。それが、何とも不気味だ。

それでも、けいちゃんはその頼みを墨字さんから直接伝えられ、真剣にこのオーディションに立ち向かった。その方法は正直に言えば、彼女なりに「真面目」に考えた方法だろうけれど、それを「奇策」と言わずに何というか私には分らない。

方法としてはオーディション前から「芝居」をして「別人」を演じて見せるというもの、普通は思いついてもやりはしない。オーディションで本読みやエチュード芝居をする前の段階から「別人」を演じ分けるなんてことは普通ありえない。それも多くの役を演じ分けができるの見せるためにといい理由でこんなこと「大河」のオーディションでする馬鹿はそうはいない。

この「奇策」の為にけいちゃんがどうやって、役のバラエティを増やしたかと言うと、阿良也くんアイデアを借りたらしい。技法としては適当に人の真似をしまくれればいいんだそう。仕事、目視、喋り方、歩き方、笑い方、全てがその人の感情のあらわれだと、そう彼は

言ったそうだ。

まずは隣の席の「彼女」から模倣を始めたらしい。「彼女」は誰かと話すときは相手の目をまっすぐ見る、いつも姿勢がピンとキレイに立っていて、笑みを零す時は口元を隠す、考え事をする時は軽く爪を噛む癖がある、形を真似れば感情が見えてくる、そうして彼女を追っていくと、見えてくるものはまた違ってくる。

阿良也くんの技法ではその後はいつもの食い方・演技方と同じだ、相手の生まれた時、住んでいる家、いつしよにいる友達、その中でどう生きていくかを観察すれば、いずれ自分の中にあるはずのない役の記憶が見えてくる。けれど人は一面だけで生きていくわけではない。

始まりは隣の席の「彼女」を夜の繁華街でを見かけた時からだ。どうして、こんな時間にこんなところにいる？ どこへ行くか？ 気になっただけでいっていきとその「彼女」は学校では見せることはない姿、トイレで化粧を変えて、姿形を変えた。夜の繁華街で、で歩く「彼女」は、学校での清楚な姿とはまるで違い、夜の装いへと変えていた。きつと隣で歩くデート相手の男性のために……

ここから、この技法は真価を發揮した。当たり前の前提として、人は相手によつて態度や性格が変える。たった一人を真似るだけで、何人もの人を演じられる。そうやってけいちゃんは一心不乱に誰も彼もを模倣し始めた。最終的にオーディションの時にまでに十人以上の人間を表面的にでもトレースして見せた。そしてそれぞれがいろんな顔持つてるからその倍以上の役を演じ分けられるようになっていた。

そうやって、けいちゃんは私や弟妹に何人もの人物を演じ分けて見せてくれた。これは正直にいつて、付け焼刃だ。この中にけいちゃんに「しか」出来ない演技はどこにもない。この演技が正しいのならけいちゃんが演じた誰か、それこそ隣の席の「彼女」の演技が評価されるのなら、オリジナルの「彼女」を起用すれば済む話だろう。何人に演じ分けられようが、本質は変わらない。

ただ今回のテーマに限って言えば、意味が変わってくる。今回求められている「オリジナル」は女優であり亡くなっている。故に求められるのは他者を演じられる存在。何色にもでも染められる可能性を提示出来る者が強い。

これは、通常のオーディションでは「奇策」だろう。けれど、今回に限っては十分に意味のある演じ分けだ。ただ、それでも勝ち取れる可能性は絶対ではない。ここまで墨字さんは計算していたのかどうかは知らないが、確かにこれが出来るとしたら、分の悪い賭けでない事は途中から理解出来た。

どうやらけいちゃんの達のオーディションは終わったようで、周囲の「マネージャー」風の人達が所属タレントに何か喋りかけている。「阿笠みみ」や「日尾和葉」といったすでに名の売れた女優もこのオーディションに挑んでいたようだ。さすがにレベル高い。

ただ、どうやら何かあった様子で、ムカついたり、悲しんだり、すでに合否が決まったかのような振舞いだった。

そんなところに背を伸ばし緊張を解けたように呼吸して「ああ、楽しかった」と笑顔全開のけいちゃんがやってきた。私は何があったか何となく理解し一応「けいちゃん、お疲れ」と声をかけた。ただ、先ほどの二人とはずいぶん違い幸せそうな顔してる。

「うん、久しぶりにお芝居したから気持ちよかった」とこのオーディションの為に仕上げてきた事を存分にやってのけたのだろう旨を言ってきた。

そこに、オーディションで一緒だったのだろう元アイドルの「新名夏」がけいちゃんに声をかけた。傍から聞いていると何の会話なのか良く分からないが、一つだけ確実なのは絶対にけいちゃんがオーディションの最中にあの「奇策」を披露し、それで何か流れが変わっただろう事だ。ただけいちゃんはその「奇策」を披露したこと自体を特別だとはどうも思っていない様子だった。

「ねえ墨字君いないの？」本当に唐突に喋りかけられ、振り向くと「環連」がいた。今回の「キネマのうた」の主演女優でビッグスターだ。本

当に急にだったから頭の中はエクスクラメーションマークとハテナマークで埋め尽くされた。文章にするなら「!!環連!!! ???環連???」ん？ 墨字君……?」といった具合だ。

ただ、けいちゃんはオーディションの最中に会っていたようであり驚かないで「黒山さん？ 今日に来ていないわ」と言った。その返答に「そっかあ残念、じゃあ現場でね」と軽く返し立ち去ろうするが、さりげなくけいちゃんに合格を知らせた。

その後ろ姿を見たけいちゃんが「たんぽぽさん？」と呟いた。その瞬間、環さんの足が止まった。それに私は驚愕の声というより、カエルでも踏んだような鼻濁音を声にしていた。

環さんは少し恥ずかしそうに思い出を語りだした「ああ、あの映画、墨字くん観せたんだ、すごいな ……名前どころか顔も映してない、それも十五年も前の私なのに……よく気づいたね。あれが私だって知ってるのは当時のスタツフだけだよ……そっかあ…… バレたかあ、恥ずかしいなあ」とそこまでは気づかれた事に対する思いだったんだろうけれどここから違った「たださあ、それなら気づいてるよね？ 当時の私には今のあなたの足元にも及ばない、でもね、あの二年後には名実ともに今のキミを追い抜いている。私、遅れ咲きなんだ」この空気は明らかに可笑しい、あの「環連」がけいちゃんを煽ってる？

「若さが妬ましいと思ったのは初めてだよ、どうしてか分かる？ 景ちゃん」とても馴れ馴れしく、ずいっと顔を近づけて彼女はそう言った。逃げるようにけいちゃんが「分からないわ」と答え、距離をとる。「だよね、所詮映画は一期一会、子供の役は子供にしか、少女の役は少女にしか演じられない」そう言って煽った口調が続くので、流石に私が「あ、あの環さん、墨字さんとはどういう」そう言って何とか話を聞き出そうとするが、先に割り込んで環さんが喋り出す。

「私が後、十歳若かったら、墨字君の隣にいたのは私だったんだよ、君じゃなくてね、景ちゃん、妬いちゃうなあ、私だけ妬いでいてムカつ

くなあ、どうしよつかなあ……そうだ仕返しに墨字君には憂えて貰おう」そう言つてこんな事を言った。

「墨字君に『本当は環に撮りたかったけど仕方ない、夜風で我慢しとくか』……つてね」もはや彼女の口からは侮辱の領域にまでなつた言葉が鋭くけいちゃんに向くが「無理だと思う」そうけいちゃんは即座に返した。

「あはは、そう？」環さんはいたずらに笑つて今度こそ立ち去つた。

ただ、墨字さんが何故このオーディションに拘つたのかは明確に分つてしまった。国营放送の「MHK」の「大河ドラマ」だからけいちゃんを出したかつた訳じゃない。「環連」が主演女優だからだ。

終わりの始まり

けいちゃんはスタジオ「大黒天」のキッチンで、トントントンと恐怖をかき立てるように包丁で具材を刻む音が響く。その音の異様さは誰に対しての当てつけなのかが、明白でも充分怖い。私がけいちゃんに料理を手伝うと言っても即座に「いい」と食い気味に応えられる。その様子にルイクンもレイちゃんも不安そうだ。子供たち曰く、けいちゃんは最近ずっとイライラしていて、何だか恐い印象を与えていた。

流石にその様子に「何かあったのか？」そう墨字さんは私に訊ねた。怒っている理由はきつとオーディション時の事だと分り切っているから思い切つて「環さんっていったい、墨字さんとは」そう言つたところで「ゴン！」と明らかに話を横切るように、テーブルの上にお鍋が置かれた。

「お鍋できました」明らかに高圧的にけいちゃんはそう言つた。「あ……ありがとう」とビクビクしながらお鍋を受け取るこしかできなかった。

そんな態度を何故取るのか分からない様子で「なんでそんな不機嫌なんだよ、オーディション通つたんだろう？　それも主演の少女時代の役だ、こんな良い話もねえ、よくやったよ」そう言つて墨字さんが割とべた褒めしてもけいちゃんは喜んだ顔をしない。むしろムスツとした口調で「……そうね『あの人』の少女時代の役ね」と返事した。「あの人？　ああ、環な」墨字さんは惚けながら言う、いやもしかしたら真剣なのかもしれない。「……うん」とけいちゃんは明らかに機嫌悪そうにしながらそう言っているが、墨字さんはそれで話を終わらせてすぐにお鍋をつまんでいる。時々「うめえ」と言いながらモグモグと食べている。このヒゲ、空気読めよ……

明らかにけいちゃんは苛立っている。よくもまあ、こんなに鈍感に対応できるものだ。気になってはいるのにこつちから聞くような事はしたくないということなのだろうけど、ああ本当にめんどくさい。

「しかし偉くなったよな、環も」そう墨字さんはボソツと言った。けいちゃんも急に反応を変え「へ……へえ、そうなの？ まあ、べ、別に興味ないけど？」とものすごく分かりやすい反応をした。どうやら「興味はないけど話したいなら聞いてやる」というスタンスに移ったようだ。この子、役者かホントに……

ただその反応に特に大きな反応もせず「ああ、そりやそうだろう、大作映画の主演を張るような連中が何十人も出演する規格外のドラマ、それが『大河』だよ、その主演を張れるようになってしまったんだからな環は、この前までガキだったのよ……」ああ、完全に感傷に浸りながら喋っている。

その様子に「……ふーん」と相槌をうった後、ぼそつとけいちゃんは「じゃあ、私じゃなくて環さんを主演に映画を撮ればいいのに」と言ってしまった。どうやら、墨字さんには完全には聞かれていないらしく、すこし首をかしげて「何か言ったか？」とけいちゃんに呼びかけるが「……別に」そう言っただけで分かりやすく子供っぽく拗ねている。

ああ、今はそういう状態なのか……まあ、あんな風に煽られたら当然なのかもしれない。あくまで客観視するならば、どれだけ演技が上手くても、この子はまだ高校生の女の子なんだ。精神的に弱いところがあつて当然だ。

それ故に明らかに実績と知名度がある人から、あんな事言われたら自分は本当に彼女の「代替品」なんじゃないかっていう不安に駆られるのも充分わかる。でも、それは明らかに間違いだ。けいちゃんにはけいちゃんの独自の色があつて、私が知っている環連という女優にも独自の色がある。それは明白に違っている。年齢の問題を抜きにしてもだ。

私がそんな事を考えていると自分の中で答えを無理ひねり出したように「要するにその環さんの人気に乗っかって有名にして貰えばいいんでしょ、分かってるわよ」ああ、何て卑屈な発想になってしまったんだか、けいちゃん……

ただそれに墨字さんは「乗っかる……？　なんかお前、勘違いして

ないか？ 環に乗つかるんじゃないねえ、環から奪うんだよ。確かに奴の少女時代を演じるお前の出番は前半の数話だけだ、だが裏を返せば環より先に視聴者に認めさせられるのもお前だ。それを利用してお前のすべき事は何だ、考えてみる」どうやらようやく墨字さんはけいちゃんの変な様子に気づき、今回の出演の意味を考えるように促した。

けいちゃんはここで冷静さを取り戻したように、態度を変え、今回の目的は何かについて考えたようだ。そして少し間をおいて、なかなか強烈な事を言った。

「大河の『主演は私』だと、初めの数話で視聴者に刷り込ませること」無茶苦茶な内容だが、間髪入れずに「そうだ、それがお前の仕事だろうが」と墨字さんがあっさり肯定する。続けて「そうすりや、その後の本編を担う環の視聴者は『お前の影』を見続ける」と言うときいちゃんは頷きながら「そっか……環さんの活躍は全て私の活躍になる」この時の声がだいぶ元気になっているのを感じる。

「そうだ、環の五分の一の撮影期間で『大河の全て』を奪う作戦だ」この二人の会話がまるで海賊みたいな野蠻さを感じるが、どこか現実味があるようでやってやれないこともない雰囲気なのが微妙に怖い。いやまあ、私もその乗組員として行動する予定ですが……

だいぶこの場の雰囲気は良くなって、ちよつとふふつと笑いながら「それってとっても楽しそうね」とけいちゃんが言うと「そうだろうが！ なにイライラしてんだバカ」墨字さんが揶揄いながら不機嫌な事を指摘すると「イライラなんかして全然してないわよ、イチャモンやめてくれる？」そう完全に開き直っていたのと同時に完全に機嫌が直っていた。

夕食が終わった後で、墨字さんがスタジオの下の銭湯に行っている間、私はけいちゃんを屋上に呼んで、一応機嫌が悪かった原因だろう

事を直接聞いた。

「気になるならちゃんと聞けばいいのに、環さんのこと」この事は私自身ある程度は気になっている。もしけいちゃんが聞きにくいのなら私が代わりに聞いてこようかと思いつきながらこの問いを投げかけた。けいちゃんは首を横に振りながら「ううん。別にそういうんじゃないの、分かっているの、あの人は私を怒らせるために、煽るために、ワザとあんなこと言ったんだって、あの言葉が安い挑発でも、黒山さんと昔にどんな仲でも、私は役者、関係ない、売られた喧嘩は買うだけ」そう言い切った。

いやいや、喧嘩買っちゃってるけど、めっちゃ意識してるじゃん……やっぱりちゃんと撮影になる前に呼び出しておいて正解だった。なぜなら墨字さんはまた居なくなるからだ。

今日本当に突然そう私に伝えられた。いやまあこの人の行動が突然じゃなかったことの方が少ないんだけど。私はまったく聞いていないと反論したが、笑ながら「そりゃあ、言っていないからな」と平気で言い「仕方ねえだろ、そろそろ俺も動き出さねえとな」きつと映画に纏わるスポンサー関係や企画について根回しをしに行くのだろう。

私は最近の自分の扱いに辟易していたから意地悪な口調で「そういうのって『普通』は私も同行させますよね？ 私はなんですか？ 映像制作ですか？ 助手ですか？ それとも『マネジャー』ですか？」後半はかなり語気が強くなっていた。

そんな私を見て真剣に「悪い、今は『夜風』を頼む、お前の出番はもう少し後だ」そう珍しく真面目に真摯に墨字さんは答えてくれた。

この言葉を受け取ったから私はもう少しだけ、けいちゃんに尽くす。きつとけいちゃんはいずれ日本映画会全体の財産になる、つまりは巡り巡っていつの日か、私の財産にもなるという事だ。

まだ『大河』の顔合わせまでは時間は一週間はある、けいちゃんは今にも環さんの元に行つて、敵情視察をしたいという話が上がったが、私はそれを止めた。

「悪いけど、冷静になって……売られた喧嘩は買うのはけいちゃん
自由だけど、女優『夜風景』貴女が演じるのは『環連』じゃなくて『薬
師寺真波』なんだよ」出来るだけ諭すように言ったせい、けいちゃ
んは衝動的に怒る事も反論することも出来ず、目の前にある「役」に
向き合っていない自分に強引に向き合わせた。

もしもこの時に、この敵情視察という話を私が真面目に請け負っ
て、環連の元へ行っていたら話は違っていただろうか？ いや、そ
もそも明日の夜には事件が起こること変えられなかつただろう。だ
から、今日六月十七日水曜日はスタジオ「大黒天」にとつての最後の
晚餐だった。

その翌々日の朝、小説家「夜風龍也」が死んでいる所が見つかった。
場所は中野区の路上で、頭部にある大きな弾痕と近くにある薬莖から
拳銃によつて、とても至近距離から撃たれた事が推測された。

また警察の周囲の聞き込みによると夜中の二十時ごろに銃声かと
思われる破裂音を複数人確認され、後に死体解剖から死後硬直・胃の
内容物の消化具合等々によつて、おおよそ銃声が聞こえた時刻だろう
という結果が出た。

ただ、弾痕は右側頭部から入り、反対側に綺麗に貫通している。
よつぽどの親しい人が不意を付くか、自らの自殺でもしないとこのよ
うな裂傷にはならない。それに、銃声は聞いていても叫び声のような
ものは誰も聞いていない。

更に、現場には拳銃こそないが、それ以外の物、財布やスマートフォン、免許書等の身分確認出来るものが揃っており、また彼の使いこま
れたカバンもあった。中身は小説家である自身の著作物に関する契
約書類だった。それは自身が死ぬことを想定していたかのようにほ
ぼ完璧に作られていて、自身が死んだら、遺族にわたる権利関係をご
丁寧に、何重にも用意して、自身の娘の元に迅速で渡るように仕上げ
ている。

小説家が亡くなれば、その権利は遺族に譲渡される。それには勿

論、小説に関する著作権、自身の作品の映像化権が含まれる。

なんで、こんな事を私が知っている・語っているかというところ、警察に状況を知らされ、隣にいる小説家の娘、つまりけいちゃんの「アリア」を聞かれているからだ。

時系列と知らない物

少し時系列を整理して考えよう。事件が起こったであろう昨日の事、六月中旬の木曜日は特別にけいちゃんに何か予定があった訳ではない。

その前日に「環連」の元に行つて墨字さんの事を聞きに行くかどうか、という話自体は上がっていたが、私がそれを止めたからそんな予定はないし「大河」に出演する関係上、学校の単位が危うくならないために今のうちは学校にちゃんと通っている。もちろん平日であるから学生であるけいちゃんは、出席簿の上でも周囲の人物からにもその日に杉並北高校にいたというのは明らかだ。ただ、部活動「映像研究部」には顔を出してはいない。

これは「映像研究部」自体が、そこまで厳格に毎日活動している部活でもないのと、けいちゃんがやはり役者として活動している都合故だ。

ただ、それでもその日の授業の終わり、ホームルームをこなして帰るまで時間、おおよそ午後四時までの時刻には確かな「アリバイ」がある。

ここから先の時刻は普通に自宅に帰宅し、台本の確認作業やスマートフォンを用いて今後「薬師寺真波」を演じるに当たつての予習や復習作業、それに幼い弟妹の面倒、家事や食事、入浴といったごく一般的な事を行った。そうこうして午後の九時までに弟妹達を寝かしかけた後に、台本を読んで、少し調べものをして寝付いたということらしい。

証言能力として幼い弟妹は難しいし、そもそも「アリバイ」として家族間の証言は絶対とは言えないにしても、スマートフォンを検索履歴の完璧な偽装はそれなりに専門知識がある。確かに、証言に一致するように「薬師寺真波」に関連する検索が散見され、午後六時頃に複数件、午後九時頃にも複数件ある。

これは当然、携帯端末上の操作ではあるが、弟妹達に指示させて行ったり、複数犯で行ったとはあまり考えにくい。そもそも、事件発覚時に即座にけいちゃんの自宅に警察が事情聴取に向かった時刻が事件発覚の数時間後の午前七時半頃で、けいちゃん達は普通に出掛けようとそう「学校」に行く準備をしていた。これで、殺人事件の犯人ならとてつもない神経であり、推理小説に出てくるような人物になる。

ちなみに、杉並北高校から現場まで行き、そこから自宅まで返ってくる間に現代の街並みに無数設置されてある監視カメラに「一切」映らずに移動する方法は警察にも思いつかないらしい。故に、この事件における犯人はけいちゃんではない。

ただ、今まで碌に連絡を取り合っていない間柄でも、血の繋がった「父親」の死はけいちゃんに多大なショックを与え、即座に「保護者」であるとされる関係者に連絡がされ、私が呼ばれた訳だ。

ちなみに私自身は昨日は事務所に居て、仕事をこなしていた。方々の芸能関係者に仕事依頼のお断りのメールを送っていた。けいちゃんに関連で大量に送らなければならず、出来るだけ業種ごとに定型文的にならないように断わるのは一苦勞だ。これに合わせてけいちゃんのスケジュール調整やマネージメント作業、広告等での契約内容の変更・更新手続きで、かなり大変だった。まあ「大河」の出演に合わせて、契約の変更・更新手続きが発生するのは嬉しい悲鳴ではあるのだが……

それで結局、昨日は一日事務作業に徹していた。事務所からは一階にある銭湯を借りた時にしか出ていない。ただこの時刻は午後七時四十五分頃から八時十五分頃だった筈だ。あまりはお金儲けを考えて居ない立地のせいか、そこまで混雑していないし、番頭さんとは顔なじみで、その日もいつも通りに通っていたという証拠は提出できる。

それに、複数の連絡をインターネット上とはいえ行っているという事は、パソコンのIPアドレスなんかから十分に時刻の割り出し可能だろう。それに監視カメラから、スタジオ「大黒天」の車か私自身が、現場付近に行っていない以上、私はこの事件には関係はないというのは説明するまでもない。

ここまでは警察も充分想定内だったようだ。ただ、けいちゃんの家で、幼い弟妹を別室で待機させ、落ち着かせてからの話し合い、此処からが本題だった。今回の事件は明らかに「夜風龍也」の関係者の犯行であり、拳銃を撃つたのが本人か他人かはともかく、行いたかった理由はどうか考えても「著作権」であった。

でなければ、何故あんなに良く出来た「著作物に関する書類」それも相続人に渡るような書類を持っていたのかが、分らない。小説家という職業で生計を立てれるレベルの人物が何故、自らが死んだ時に作用するような物を持っているのか、更にそれが偽造されたと仮定しては何故、実の子供に権利が行くようになっていくのが不明だった。それでは、正規の手順とさして変わらない。それも、今、飛ぶ鳥を落とす勢いの若手女優の手の元に行くのはどう考えても不自然だ。

それ故にこの内容が、今回の「著作権」そのものが事件の中心と考えるのが、普通だろう。ただ、警察との話し合いによって、けいちゃんのお父さんが事実上育児放棄してあった現状、家を出て蒸発していたこと、お金のみは振り込まれているが、一切手を付けていないこと、そもそも連絡先そのものを知らないことが明らかになった。

警察の前で、けいちゃんはかなり緊張と動揺はしているが、父親が死んだという事実を考えればそこまで精神的に困惑しているようではない。むしろ弟妹達が別室で大人しく出来ているか、父親の死というものを受け止められるかというのを気遣ってさえいる。

ただ、この事件に関して、私にはなんとなく犯人というか、誰が拳銃を現場から持ち出したかは誰か想像がついてしまった。そもそ

も再映画化プロジェクトの段階では「松野龍也」という名称、ペンネームを用いて行われていたから気づかなかったが、本名が「夜風龍也」というのなら話は全くの別だ。

この再映画化プロジェクトを完全に仕切っている「黒山墨字」がこの事件になんら関係がないわけがない。実際に一昨日の夜以降、一切連絡が付いていない。もちろんいつも通り、自分勝手な行動のせいや仕事の可能性も捨てきれないが、再映画化プロジェクトの作品「マクガフィン」の設定の一丁の拳銃を手に入れたらしいところから話が急変するという事を考えると、この事実が何か仕掛けているとしか思えない。

ただ、聞かれていない事は警察に答える必要はないと勝手に自分に言い聞かせて、なんとかこの場を乗り切ろう。そうだ、まだ、推論の域をでていないし、決めつける理由や物的証拠はない。とにかく今はこの場を乗り切る事を優先させて、今考えても無駄な事は後から考えよう。

けいちゃん宛てになる権利関係の書類は、証拠品でもあるため、即座に権利の移動は難しいらしいが、コピーされた内容を見るに、これが正式に受理されるなら映画化権も十分含まれる文面だ。

これは「黒山墨字」が最も欲しかったのである「マクガフィン」再映画化権に繋がる。ある意味ではけいちゃんに渡るのなら時間の問題だったのかもしれないが、ただ重大な問題が発生した。けいちゃんはこの権利そのものを欲しがらなかった。その理由はシンプルだ。

「自分たちを見放したあの人の残した物なんか欲しくない。あの人の施しなんか要らない。そんな物なくても私が稼いでいける」そう力強く涙を流しながら苦しそうに言っただけだ。

そうこうして、とりあえずは警察は夕方頃には一旦帰っていった。様々な情報が出揃った為、また明日こちらへ伺うという流れになった。流石に酷く疲れた様子の子のけいちゃんを横目に、スマートフォンで

ネットのニュースを見ると「路上で男性、拳銃にて死亡。拳銃は行方不明」というニュース記事が複数見られるが、まだ本名での報道はされていないが、時間の問題だろう。そしてそれが、小説家「松野龍也」であり、今話題の「夜風景」の父親であることは数日以内には報道されていると考えるべきだ。

私は本当に大変な事になったと思い、今夜はこの家でけいちゃん達が大丈夫かの様子も見たいし、今後の相談もしなければならぬと様々な考えを巡らせ、とりあえずポケットマネーでさび抜きのお寿司でも取るかと思い、電話を掛けようとした時、先に電話が鳴った。相手は墨字さんだった。

私はドキドキしながら、電話を取ると「柊、夜風を連れて『大黒天』に今すぐに来い……ちび達はそのまま留守番させて置け」と一方的に言いいきり、即座に電話が切れた。

いつもはどこか、俯瞰した視点を持って、本気では怒ったり、悲しんだり、嘆いたりしない墨字さんが、剥き出しの感情を抑えきれないのが、電話越しでも伝わってきた。

ただ、何故そんな事を言うのか、どうして今の時点で、夜風家にいるのを知っているのか考えたくなかった。

マクガフィン は拳銃

「松野龍也」が突然、この再映画化計画を大きく変更したい、いや正確に言うと「凍結」したいと言ってきたのは「羅刹女」が千秋楽を迎え、打ち上げをした辺りだった。その理由はこの野郎が思い描く作品、その主演に自分の娘が使われるのは自分の思い描いていた、今作の「ラスト」と明らかに違うと言ってきた。

それまでに自身の娘が女優になり「デス・アイランド」や「銀河鉄道の夜」に出演していた事自体を知らなかっただろうことはまあいい、だがこの野郎のその理屈は最低そのものだ。

人物としての年齢やルックスや演技力ではなく、自分が捨てた「存在」に、この物語のキャラクターが命を賭けるのは納得がいかないとして、コイツは完全に私情でこの話を失くそうとしてきやがった。どうしてそこまでするのか分らない程に……

俺は必死で説得を試みた。娘としてでなく「女優」としての実力そのものを評価してほしいと、今の日本で「夜風」以外にこの役は出来はしないと、あの「ラスト」を演じられるのは「夜風」だけだと嫌になるほど原作者に語る羽目になった。ただ、コイツはとても嫌らしくこの話の盲点を指摘してみせた。

「そもそも『夜風景』はこの映画に出たいと本当に思っているのか？」

その答えに俺は本当は薄々気づいていたのかもしれない。だから、俺が人生を賭けて撮りたいということを「夜風」に伝えていたが、どんな内容の作品を撮りたいということは一切言わなかったし、その脚本が誰が書いた、どんな物なのかも言っていない。

俺は勝手に「夜風」に期待して、俺が言えば全力で演じると考えていた、思い込んでいた。だが「夜風」自身からすれば、自分達を捨てた存在が書いた内容を演じる事になる。

あの「夜風」の感性は普通ではないが、もし普通の感性を持っているなら、それだけは「女優」という存在である前に拒絶したい事なの

かもしれない。

性的に濡れ場を演じる事より、人形として心にもない演技をするより、ゴミみたいな商業映画に出演するより、父親の脚本通りに演じる方が「夜風」にとっては「人間」としての尊厳を踏みにじられる事なのかもしれない。

ただ、それでも人格と作品は別だ。人間として最低でも面白い話を作れる奴が、絶対的に偉い世界に生きているのが、俺たちだと心から信じて疑わなかった。

そんなお互い自分勝手な阿保らしい話し合いが、幾度か行われていたある時、コイツからサシ、一対一での話し合いがしたいと連絡が来た。それは「夜風」が大河のオーディションに受かったと連絡が来た直ぐ後だった。

お互いに予定が空いていたのは六月半ばの木曜日、コイツの都合で中野で、軽食をしながら話し合いになった。俺はどうか「夜風」での主演を望んでいたし、絶対に諦める気はなかった。本来、問題だった再映画化というプロジェクトも話題性的にもスポンサー的にも俺自身の名前・実力的にも、そして「夜風」ネームバリュー的にも確実に具体性を帯びてきていた。もちろん「松野龍也」と「夜風景」が親子であるというのは天知的には十分ネタになる話題だが、公表しないという方向で進めている。そのくらいの配慮は勿論する。

だが、話し合いは平行線というより、すでに暖簾に腕押し、糠に釘、豆腐にかすがいといったところで、コイツはまともにも聞く気すらなかったようだ。もはやと話し合いという名目で、夕方から夕酒を飲む為にいるようだった。

俺の話は全て冗談か、なにかとして酒のつまみに変えている様子だった。そうしてある程度、俺が話し終わったら、唐突に使いこまれたカバンから何かを取り出して来た。正直、こんな物を用意しているなら、もうこのサシの話し合いというものすら真面目にする気はなく、ただコレを俺に渡しに来ただけというのが目的だったといっている。

この野郎「松野龍也」はこの企画から降りると言いだした。そして最悪な事に本名である「夜風龍也」として、作品の権利そのものを娘に前面的に与え、それでどうするか後は好きに決めろとそう言い放った。

そもそも、俺の様な人間から言わせてもこの野郎はどこまで真面目に生きているのか分らないような人間だから、何とも評していいか分からないが、敢えて言うならFワードが歩いているような奴だ。

そんな奴だから、ありとあらゆる自分の持つている著作物に関する権利を「手放す書類」を用意してこられているとは思わなかった。

その場で即座に渡せるように、複数種類の著作物に関する膨大な権利書類をコイツは持つてきていた。それには全て実子である「夜風景」に権利が行くようになっており、娘に判断は全て一任する事になっていた。

この書類は「黒山墨字」が「夜風龍也」とずっと裏で繋がっていたという事実を見せ付けるような物だ。これが「夜風」に渡れば、十分に俺に対する信頼関係はなくなるかもしれない。

そりゃあそうだろう。ハッキリ言つて、この状態で渡されたら「夜風」は親から捨てられ、それでいて、小説家である父親から「作品」すら捨ててでも、関わりたくない人物・関係であるという事になる。

そんな事実を受け止めた上で「夜風」は果たして、俺の言う通りに、この作品を演じるだろうか？ 俺には正直、分からない……この野郎がまるで何を考えているのかが……

とりあえずこの話は保留にしてくれと頼み、その場を後にした。それからまるでいい考えもなく、とりあえずこの近くにある銭湯にでも入るか……とぶらついている途中、突然、かなり後ろから呼び止められた。「松野龍也」の声だった、数十分は考えが纏まらず、ぶらぶらしていた俺を今まで追ってきたのだろうか？

右手を振つてこちらの注目を向けようとしており、反対の手には使

いこまれたカバンを持っている。ただそちらを向いて数歩歩き、適当な事を言おうとした瞬間、その振っている手をカバンに入れ、拳銃を引き出した。形状的に古めかしいリボルバーのようだ。そして拳銃をこちらに向け、無感情に「俺を撮れ」そう言った。

暗がりでも流石にこれでも映画監督だ、スマートフォンだろうが、十分に映像として、ちゃんとしたものくらい撮れる。そうして適当にスマホを構えながら、大昔、ドキュメンタリーを撮っていた頃に何度か「本物の拳銃」を向けられた経験もあったなあと思いつながらコイツを撮影し始めた。

割と良く出来ていたが、四インチのコルトパイソンモデルのエアガンだ。おそらく、こんな路上の暗がりでもなら殆どの人は、本物と見間違えるだろう。ただ、まあこれでも一応、紛争地域で人の生き死にを間近に撮影して来た身だ。有名な拳銃が本物かどうかぐらいはだいたい分る。それにスマートフォンの明かりがあれば、だいたいも確信に変わる。

ただ、モデルガンでも十分に路上で脅す様に扱えば銃刀法違反になる。アイツは何で、路上でそんなもん振り回しているのか本当に謎だった。俺を驚かすには手が込み過ぎている。あの書類の方がよっぽど驚いたし、俺には効果的だ。それでも、茶番には付き合っつてやった。どこか、この行動が、先ほどの書類の提示を効果的に見せるための「演技」のように感じたからだ。

そうして俺が撮り始めるとシリンダー部品を左に振り、回転させ、また元に戻した。そうして自分自身のこめかみに拳銃を向けた……いやいや、銃弾が一つだけ入れるという作業が目の前で行わないと口シアンルーレットにもならない。それに撮影させるのなら、銃弾が入っているかどうかの確認もさせないと見ている方には意味が伝わらない。

「賭けをしよう、外れたら今日見た書類の通り、俺は降りる……当たったら、お前が好きに映画を撮っていい」コイツは芝居がかった風にそ

んな事を言った。

なんとまあ、阿保らしい賭けの提案だ。そんな脳みそ空っぽな事を言う程の馬鹿だとは知らなかった。どうも本当に人間として終わっているらしい。

「どうせ、一発も銃弾なんか入っていないんだろう」と俺は呆れた風に返した。

「いやいや、安心しろ、六発全てシリンドーにちゃんと入ってる」とこれまた馬鹿げた事を言っている。たしかに、それなら安心だな、絶対に当たるロシアンルーレットだ。まあ、エアガンなら一か所にそれくらい球を詰められるがな……

「どうだ、賭けないか？ とんでもなく分の良い賭けだ」とこの馬鹿は撮影しているのに、この茶番を本気にするつもりらしい。俺はコイツにあてられたのかなんだか馬鹿らしくなり、ついこんな事を言った。「六回連続で打つならいいぜ」

それにこの野郎は少しだけ笑い「ああ、交渉成立だな、ただ途中で当たったらその後は打てないがな」と実に下だらない事を言った。

「分ったから、こんな茶番はサツサと済ませろ」そう言っつて、急かしてやった。

なのにコイツは突然、ゆつくりとしゃがみ込み、左手に持っていた使いこまれたカバンを地面に置いたと同時に、右手に持っていた拳銃を後方に投げた。そうしてカバンの中から右手で何かを取り出した。「本物の拳銃」だ……先ほどまで持っていた四インチのコルトパイソンの本物だ。それをこめかみに向けながらこう言った。

「ああ、別に『ラスト』は変えてもいいぞ」そう言っつて、引き金を引いた。

回数は当然、一回だった。

悪人になる覚悟

目の前で人が死んだ、それも拳銃自殺で……そんな状況をただ撮影している。体に染み付いた技能は反射的に倒れた「死体」を出来るだけ綺麗なアングルに映るように無意識的に撮り続けていた。

そして、倒れてから一分以上経つてようやくカメラを止めた。それで真つ先にやったことはコイツの手の中にある「拳銃」のシリンドーの中身を確認をすることだった。確かに残り「五発」きっちり込められていた。本当に、コイツは賭けでも何でもなく、確実に自殺してみせたということだ。それじゃあ、あの無駄な駆け引きは何だったのか……ただ自分が自殺するところを俺に撮影させただけじゃないか……

この時、俺は完全にこの後の行動に何をするか揺れていた。純粋な小市民として、即座に警察に報告し、そのままこの自殺をそのまま明るみにするか……それとも今日の前にある「拳銃」を持って逃げるかだ。

なんで後者の選択肢なんかが、拳がったかというのと、この現在の状況の構図が、コイツの作品「マクガフィン」の中の主人公が「拳銃」を手に入れた時と明らかに類似しているからだ。あの作品では、悪友が酔っ払って自身の悪運の良さを証明するために行った行動にとても似ている。まあ、あちらではオートマチック拳銃だったが、確率的には同じような物だ。確かそのシーンも何かで撮影はされていた筈だ。確か、部屋の監視カメラだか何だったのだが……

人は一生で一度しか死なない、そんな希少な、絶好のタイミングの被写体が、目の前で確かに俺に撮られ、死んでいった。これがコイツの表現したい「ラスト」だった事は嫌々だが、理解せざるを得ない。これはメッセージでしかない。

俺はあの作品を撮ろうとしている。故に自分自身が「拳銃」を手に入れられたら、俺があの作品の主人公のポジションとしての役割を疑似的に与えられたということになる。そしていま、手元には最高の

「切り札」が手に入ってしまった。故に、やるべきことは残念ながら馬鹿な方の選択だ。俺は、その場で「拳銃」を持ち逃げを決意した。

こんな重要なピースは残念ながら存在しない。作家生命を文字通り賭けて、あの野郎が俺に与えたものだ。こんな物本当は欲しくないと思いがりを書いてしまいたいが、それでも撮ってしまった以上、やるしかない、あの死を無駄に出来ないと思ってしまう。ちなみに、後方に投げられた模造品も念の為、確保しておいた。書類は持って帰っても意味がないだろうし、この後の事を考えるとこのままにした方が良さだろう。

ただ、頭がまるで冷静にならず、銭湯にも入っていない。別に何処か返り血を浴びているとかではないが、これからどうしようか？ そう思った時に非情さというか、最も頼るべきではない相手という存在が頭に浮かぶ。ただ、この状況を唯一正しく理解できるのはアイツだけだろう。

俺は「天知心一」という人の皮を被った悪魔に助けを借りた。携帯はたった三コールで繋がり、俺は緊張と動悸の激しい口調で、捲し立てながら現状を説明した。

アイツは、即座にこの状況を一飲みし「成る程、とりあえず、選択肢は二択です。このまま警察に行くか、本当に『全て』を前倒しにして強行するかです……私を頼ったということは後者を選んだという事で間違いないのですね」そう断言した。

アイツのその「全て」を前倒しにして強行するというアイデアは狂氣的だが、残念ながら俺のアイデアとほぼ同じだ。目的の為に今はや突き進むしかない。迎えに来た天知に送迎されながら、俺は即座に計画を練った。撮影はどんな事を用いても実行するとして、そのための舞台装置には「夜風」以外にもう一人必要になる……誰が良い？ 頭には一瞬「環連」の名前が過ったが、俺が選んだのは「桃城千世子」だった。

いや、彼女を強引に連れ出せないのなら、このまま突っ走る意味もないのかもしれない、本来通りに警察に行ける……だけだ。夢は夢の

まま、狂気に身を任せる必要もない。

だが、彼女への真夜中の電話の呼び出しは案外、あっさり繋がりに、意味が悪いほど順調に話が伝わった。ほんの少し、現状を話しただけで、まだ何も知らないはずなのに「天知」以上に俺がしようとするアイデアを言い当てた。

そしてなにも俺の事を恐れていないというより、いつかこういう日が来ることすら、予見していたような声で「私は貴方の映画に出ると決めた、だから例え怖くても先に進む」と正確には何をするのかを分っていないはずなのに、俺を心から信じて、身を任せてくれた。それ故に、殆ど騙すような形になってしまっても謝る事すら出来ないことに心を痛めるが、全ては作品の為だ。誰を傷つける事になったとしても、俺は目的を完遂すると心に決めた。

それでも拳銃自殺した死体は直ぐに事件になり、一日もすれば、十分に拡大し、俺の元に連絡や捜査が来るだろう。撮影そのものに使える時間は事件発覚から二十時間も無い。それで、あるアイデアを思いついた。使える物は何だつて使えばいい、今、目の前は「実銃」さえあるんだ。これで本当に「発砲」すればいい。そしてそれをぶっつけ本番でやるんだ。

ただそうすると、誰がこの作品を世に出せる？　と思っただが、そんな事はもはやどうでもいい。最終編集権を「柊」にやれば後は、俺は檻の中でも、棺桶の中でも作品は完成出来る。そう思えば、何だつてこなせる。命を掛け金にすれば、何だつてこなせるんだ。だから悪人になつてでも、死んでも撮りたいものを撮るんだ。その為になら、全員を傷つけ、騙してしまつていい。作品のためになら……

突貫作業でも、たった一夜だけ取り繕えばどうにかなる。撮影時間は大体一時間、その間にだけリアリティがあればそれでいい、それでこの作品は完結する。あとはこのフィクションの要に入り組んだ現実が十分に脚色してくれるだろう。

そのために無理やりにも、展開を加速させるしかない。死に急ぐ

ような速度で、俺は強引に脚本を練り上げる。そしてそれに必要な「生配信」やインターネット上の「広報」周りの根回しは「天知」が即座にこなし始めた、それも水面下での作業と後で辻褃が合うようにの狡い手段でだ。だが、こういう仕事にはある意味全面的に信頼が置ける。

そして「桃城」には、付ききつりで、今置かれている現状とこれから起こす事、それに対する演技指導とこの作品に元々あった仮台本、この事件が発覚したら「夜風」がしてくるであろう行動の対処と、その時に出来るだけ自然に見えるつじつま合わせを伝えた。これに納得できないなら……と思ったが、基本的には協力してくれる方針だ。ただまあ、話してある事は「模造銃」で行うということになっているからこれで、どう本番で反応が変わるのかは正直分らない。

勿論、こんなぶつつけ本番が作品として価値を生み出すかどうかなんてまるで分らない。だが、それでもやるしかない。あの「死体」がある以上、これ以外の方法で、行う手段は思いつかない。それにもう後には引けない、引くつもりもない。

なんとか午前中までの間に、これらの事の話の大筋をまとめ上げ、撮影現場はスタジオ「大黒天」に決めた。あそこなら多少の機材を追加すれば、環境は整うし、状況的に問題はない。そして午前中の内に、スタジオ「大黒天」に機材をもつて向かった。ただ、スタジオの車は出払っており、柘は今いないと即座に分った。スマホでニュースを調べると流石に、もう事件は記事にはなっている。

順当に考えれば、もう「夜風」には知れ渡っているだろう。そちらに柘は入ったと考えるのが妥当だ。もう時間はあまりないと考えるのが妥当だ。早急に取り掛かるしかない。此処での撮影準備、生放送の準備に取り掛かった。

作品の為になら、悪人になる覚悟はできてる。

劇的でなければならぬ

墨字さんから急に来た呼び出しの連絡は本当にビックリしたけれど、結局私は言う通りにした。だって墨字さんがあんな口調で頼むなんて本気な時だけだ。

けいちゃんはちよつと強引な形で、連れ出す事になった。今回の話にもしかしたら墨字さんが多少かかわっているんじゃないかという風に言っつて、向こうも心当たりがあるから資料を見せるためにスタジオ「大黒天」に行こうと……

かなり動揺していたし、弟妹達の面倒があるから、行きながらなかったが、墨字さんが「マクフィン」という映画を作るために、お父さんと接触している可能性があると言っつと、顔が真っ青になり、なんとか連れていくことが出来た。子供たちには今日は保存食用に買っつてあつたインスタント食品で、適当に済ませるようになんとか言っつて聞かせた。

正直、子供たちは困惑していたが、それよりもけいちゃんの様子が明らかに可笑しい。いやまあ、そうだろう。子供たちはまだ、父親が死んだことはなんとなく分つていても、拳銃で死んだ事は知らない。そんなところに関係があつたと思われる墨字さんから呼び出しがあつたのだ。困惑しない方がどうかしている。

そうして、なんとか車を出して、十分後くらいで、墨字さんからメッセージが来た。ただ、送られてきたのは、とある動画サイトへのURLと「見ろ」という一文のみ。

なんだろうと思っつて、車を一時停車し、おそろおそろとそのURLを開くとそれは生放送中の映像に繋がつた。そこには拳銃を持った墨字さんと椅子に縛り付けられた女性の姿が映つていた。いやこの女性は「百城千世子」ちゃんだ。

頭の中は意味不明のクエスチョンマークで一杯になり、不安な感情が渦巻き、まるで現実感がなかつた。だが、その放送は数千人単位で見ている。始まつてから、まだ三分も経つていないが、明らかに様子

が可笑しい。そう思うと千世子ちゃんが座っている椅子の横にあきらかに弾丸の跡がある。墨字さんが持っている、この拳銃で撃つたのだろうか？ コメント欄が荒れに荒れている。どうやらこの配信は千世子ちゃんのSNSから拡散されていて、実際に「撃った」という場面が、少し前にあったらしい……

そして画面越しに墨字さんが「柎、見ているか？ 見ているなら、すぐに指定された場所に来い……来なければどうなるか分るだろう」と拳銃を振りながらカメラ目線で言っている。

助手席に座っていたけいちゃんが、この映像を見て明らかにどうにかなってしまいそうな表情で、振るえている。

私は先ほどまで、頭の中を支配していた不安とは、もはや別の感情が支配している。疑いと興奮と恐怖で、体は震えている。だが、とにかく急いで、事務所への道のりをスピード違反なんか全く気にすることなく、最短距離で駆け抜けた。ただただ、冗談であってくれと願いながら。

スマートフォンは多分芸能関係者からだろう、電話やメールが大量にきている。だけれど、墨字さんの状況なんか分らない。鳴り止まない電話に私は状況を徐々に理解せざるを得なかった。本当に墨字さんがやってしまったんだ。

これはなにかの作品の演出じゃなくて、本当に実際の事件の生放送になっている。

私はけいちゃんに警察に連絡を入れるように頼んだ。けいちゃんには怯えたように「な、何を言っ、警察に説明すればいいのかまるで分らない」と力なく言う。

とにかく110番を強引にさせ、分っている事を全部伝えてと言った。けいちゃんは、今インターネットの生放送で拳銃を突き付けられている「桃城千世子」はスタジオ「大黒天」にいる筈で、自分たちはそっちに向かっているという事を警察に何とか事情を伝えようと頑張った。正直、かなりいっぱいいっばいで、正しく伝わったかどうか分らない

が、電話を掛けている最中に先にスタジオ前に着いてしまった。

言われた通りに来たが、そもそも今、入って行っているのかどうか分らない。もしかしたら警察を待った方がいいのか？ そんな事はわからない……ただ此処で入らなかつたら後悔することは確実だ。

私たちは殆ど衝動的に、スタジオ「大黒天」に乗り込んだ。鍵がかかっていたから、私は合鍵で開けた。そうして、先ほどの生放送で映っていただろう階層に向かう。そこには墨字さんと千世子ちゃん、そして複数台のカメラが集まっていた。中には見たことがない物まである。あきらかにスタジオの備品ではない。このスイツチャーは見たことがない。

一瞬もしかしたらこれはただの撮影なのかもしれないと思ったが、千代子ちゃんを縛られて椅子に座っているし、墨字さんの手元には拳銃がある。そして、部屋の壁には弾丸を打った後までである。

最低でも、昨日にはこんな後はなかった……ああ、やっぱり本当にこれは事件なんだ。

墨字さんは拳銃をこちらに向けながら「柊、お前はそこにあるカメラで撮影しろ、ちゃんと拳銃をカメラで捉えるんだ」そう言って無理やりカメラで撮影するように言ってきた。

続けざまに「夜風、お前は千世子の横に立て……」ヒリヒリとした口調で、そう言つてのける。けいちゃんはビクビクしながらだが、言う事に従った。

私はなんとかカメラを構えて、この現状を見たとき、ようやく理解した。これは墨字さんが撮りたかった映画「マクガフィン」なんだ。今の状況が作品の内容と、とても似ている。あの原作では完全に一人で、生放送ではないが、ビデオ撮影を使っているという設定だったが、それを墨字さんが代わりに自分自身でやってしまっているんだろう。

それならばあの作品通り、誰かが死ななければならぬ。ただ拳銃の形態が違う。あの作品ではオートマチック拳銃だった筈だ。それが、目の前に構えているのはリボルバー、ということは、あの作品同様、どういうオチになるかわからないという構成に持つて行く

つもりなのだろうか？ まさか、墨字さん自体が弾丸が出るかどうかわからない状況にわざと身を投じているのだろうか……

わざとそういう状況に陥って、作品さながらに確定しない死を演出するという事になる。それが倫理的に正しいのかどうか、なんて気にせず墨字さんは行うつもり何だろう。

ということは、本当に誰かに発砲する気なのか？ 生放送の始めに撃っている以上、実際に持っているのは実銃だ。そしてたぶん、けいちちゃんのお父さんの死に関しても、ある程度関わり合いがある筈だ。そうじゃなければ私の周りで、拳銃で人が死ぬなんて事が起こっていない筈がない。偶然である筈がないんだ。

そうして始まったのは墨字さんによる拳銃に対する説明だった。これがリボルバー式の拳銃であること、装填数は六発であること。その内で二発は打ち込んだこと。そう言ってみせた。そして素早くシリンドーを回転させ、適当に天井に向かって引き金を引いた。鋭い発砲音と共に弾が発射される。天井のコンクリートに、穴が空く。「見ての通り、本物だ、これで残りは三発、ちょうど『画面内』には一人ずつ的がいる……その的を順番に撃っていく、運が良ければ、三人とも生き残り、運が悪ければ三人とも死ぬ」そう墨字さんは言っていて千世子ちゃんに狙いを定めた。

私は何処か、もう感覚が麻痺していた。そして自分勝手にもう、撮る事でしか、墨字さんを救えない。撮りたいとか撮りたくないではなく、黒山墨字という人間に師事した以上、彼の最後を見取る義務がある。そう思い込んだ。

それに、こんな最高の状況はもう二度と訪れない。最高の被写体だ。

偽装工作と裏切り

終たちが来る前の準備段階、俺は様々な機材を天知に持ってきてもらいながら、その中でも一番大事な特殊なスイツチャーをなんとか確保できた。これはリモートコントロール式で、記録されたカメラなら遠隔操作で、切り替えることができる。これを用いて、本番での撮影及びカメラマンとしての「終」が来るまでの時間は四ヶ所の固定カメラのみを切り替えながら放送を行う。このくらいの機械操作なら、手の平サイズの小さなリモコンで隠しながら、十分操作できる。

撮影する箇所のアングルを何度か微調整し、生放送中に左手のスイツチャー等が見えないように違和感を感じないように一部、死角を用意する。最終的には無編集の生放送だから、かなりバレる可能性があるが、このくらいなら流石にどうにかやってみせる。生放送中の事をかなり想定しながら、放送内容を確認する要の小さな液晶画面で一通り、違和感なく出来るアングルを決めた。

そうして、その時間内にこの作品の概要とそれを取り巻く現状を何とか掴んだ「百城千世子」との打ち合わせが始まった。作品設定的に、多少強引にここに来たという「建前」の方がいい。連れてこられ、縛られてるぐらいの方が絵的には面白いと言ったら、彼女は納得してくれた。

映画撮影なんかでも、椅子に縛られてるシーンはよく映ると思う。あれは基本的には安全を配慮して、マジックの技術を盛り込んでいることが多い。役者自身にもしも、何かことがあったらいけないから、傍から見れば、しっかりと結んであるように見えても、結び目が緩かったり、切れ目が入っていたり、そもそも結んであるの一部分取り取って、その部分を役者に握っていてももう何ていう方法がある。

そのうちの一つの技法で、一応結んであるように見えるが、強引に力を入れれば解けるように縛り、その状態基準に百城と何度かどう見えるか試しかめて、多少苦しそうに縛られて見えるように縛り方を工夫した。これで固定カメラからの視点だけで見れば、まず気づかない

要に出来た筈だ。

後は、百城とのアドリブの調整だ。夜風がどう、行動するか？その先の行動を見つめていた。いくつかの「キーワード」を彼女に提示し、それによって方向性を決めていった。彼女は真剣に、行動予測とアドリブ内容に取り組んでいく。今の現状と照らし合わせて、見事に落とし込んでいたが……俺は違った。

百城に言っているのは、あくまでも「松野龍也」という人物が、俺の撮りたい「マクガフィン」という小説を作った人物である事、その人物が拳銃自殺した事、そしてその人物は実は夜風の父親であり、その映像化権が全て実子である「夜風景」に渡る事……此処までだ。コレらの情報を使って、山野上が羅刹女の初演公演でやった事の再演を生放送するという物だと伝えてある。

実際には、縛ってある状況から始めてから、摸造銃と実銃を取り換え、実弾を百城のすぐ横のコンクリート撃ちこみ、反応を待つ。スイッチャーでの切り替えで、生配信を見てる人間にはこの取り換えは気づかない要には出来る。此処で百城が、可笑しな言動を言うか、椅子の縛りを強引に解こうとするんだしたら、その時点で、この計画は別の方向に話を変える。

悪いが、その場合は「百城千世子」には死んでもらう。

これには一応考えがある。百城は摸造銃は知っているが実銃は見えない。この段階で、彼女には演技を強いることになる。それでは意味がない。だから途中までは、摸造銃だと思わせ、本番ギリギリで、実銃と入れ替える。

スイッチャーである程度誤魔化しは効くが、カメラの位置的に、俺の右下半身部分は若干死角になる。そこで服の中にある実銃と摸造銃を入れ替える。服の上から多少膨らみが見えるかもしれないが、まあ、カメラの中だけが「真実」だ。見えないものは存在していない。これでどういう反応になるかわからないが、ある程度の冷静さを

保ったままなら、続行できる。言葉の端々に、百城だけにわかるだろう「キーワード」とアイコンタクトとそして口調、これらで彼女がどうなるか、わからないがそれで突っ走るしかない。実銃を向けられたまま、女優の仮面を演じられるかはまあ、五分五分だろうが、そんな時はそんな時だ。

天知は此処については話の展開上、可笑しい為、幾つかの機材の搬入を終えた後は、インターネット上での円滑な生配信の為に動いてくれた。今日の為に用意したチャンネルも天知が用意した。生放送に使うのは登録者約八千人規模のチャンネルで、実働期間が半年以上空いている。元は百城の出演したTV番組関係の違法アップロードに使っていたらしいチャンネルで、一部権利者削除を食らって、後は投稿者削除した、もはや形だけ残ってるだけの物を使う。

もちろんバックアップにいくつかのミラーでの放送はするが、あまりにデイープな動画サイトだと生放送である意味がなくなる為、拡散作業はアイツに一任した。まあ、最初の放送を百城のSNS上で発表すれば大丈夫だろう。そうやって、なんとか準備を整えた。

スタートの合図は、終に電話をかけた後から、夜風がそこにいることは天知経由で分かっている。終の怯えた声からも入るのは伺える。そしてとにかくそこから、本番が始まった。

空気は張り詰めていた。自分が実際に「カメラ」の前で演技するというのは何とも言えないが、使えるものはとにかく使うしかない。模造銃とすり替え、実銃を握った。

始まりは、問答無用の一発目……銃声とともに壁に穴が開く。だが、百城の顔は「仮面」をかぶったままだ……まさか、初めからこうなることは気づいていたのか……それはどちらかわからないが、とにかく演技を続けるようだ。俺は出来るだけ自然に「キーワード」のいくつかを言っていく。例えば「縄は解けない」や「リボルバーの弾の数」の説明や「助けに来るのは終だ」と言った、視聴者にも説明になるような情報と百城にのみわかる虚実ないませの「キーワード」を

交え語った。

百城は見事に怯えた表情と可憐さを表現してみせる。これが演技なのか本当なのかわからない。ただ、どちらにしても、強引に縄を解こうとすることや生放送を止めさせるようなことを言わない。とりあえずは、恐怖からかどうかは分からないが演技プランに乗ってくれているようだ。

まあどちらにせよ、三十分後には放送は「拳銃」によって、強引に終わってる予定だから、警察が乗り込んで来るまでは十分時間がある。

それで、彼女の演技は素晴らしかった。俺の自身を絶妙に怖がらせつつ、こんな凶行に及んだ目的を語らせる要に誘導する。これが、まるで劇場型犯罪であるかのようなアプローチだ。

そして俺は出来るだけ嘘のないようにして、映画「マクガフィン」を撮りたかった事を語った。そしてそれがどうした撮れないか、またどのような「ラスト」が素晴らしいか？ それを強引に視聴者に伝えていった。そして今のこの状況が、その作品の疑似的な再現である事を伝えた。この説明だけでは少々伝わりにくいかもしれないが、映画には多少の空白も必要だ。調べれば何が言いたかったのか分る要になっっているのが、この作品ではそれがベストな筈だ。

この生放送の大まかな目的が語り終わったタイミングで、スタジオの鍵が空く音が聞こえる。この作品の主演女優とカメラマンの到着だ。

俺は拳銃を向けながら、場面のために二人を必要な立ち位置へと誘導していく。そしてパフォーマンスの為に、シリンダーを回し、天井に向け、拳銃の引き金を引いた。一発目で、出る確率は六分の四だったが、上手くいった。失敗したら連続で撃つだけだが、絵的には一発で出た方が良い。俺が自分のルールには従う要に見えるからだ。

それからスイツチャーで、俺の上半身をアップで映す様に切り替えながら、舞台的な語りをする。ここで、手早くと実銃と模造銃と切り替える。カメラ越しにしか見えていない柵は気づかない要に身体で

隠し、夜風も多少位置的に視認しづらいのとミスディレクションも働いているから気づかない筈だ。ただ、当然百城には気づかれる。

最後の最後で、緊張の糸を切るような行為だ。最後まで、仮面を被れるかは分らない。ただ、ここまで来れば死ぬのは「一人」でいい。それはもう百城ではない。

百城に狙いを定める。そこには、諦観と優しさと嘆きに満ちた天使がいた。それは、演技なのか、俺の意図に気づいたが故の表情なのかもう分らない。ただもうこの時点で「ラスト」は決まっている。

俺は無意味な引き金を引いた。

終幕はあっけなく

千世子ちゃんに向かったの引き金はあまりにあっさり引かれた。そうして、カシヤつとシリンダーが回転する音以外、何も聞こえてこなかった。つまり今回は、弾は詰まっていなかったということだ。

ただ、その事実になんか少しだけ安堵する素振りを千世子ちゃんは見せたが、即座に大切な友達の事を思ってたか、険しい表情で、この理不尽に立ち向かうとしている。

「これで、とりあえず百城は助かった、後二回……次は夜風、お前の番だ」そう言っただけ、今度はけいちゃんに墨字さんは拳銃を向ける。

心底震えながらけいちゃんは「なんで、どうして、こんな事するの……」と本当に怖がり、怯えながら、墨字さんに思いの丈を投げかける。

それに墨字さんは「理由は分ってんだろ、お前の父親の『脚本』だよ」と全く悪びれた様子も見せずに答える。そして、ほんとうにあっさり引き金を引く。

弾は出ない。またしても回転音があるだけだ。この二発連続で出ないという確率は今の緊張状態で、まともに計算できないが、とても運がいい事だけは分る。墨字さんはだらりと腕を降ろし、けいちゃんから拳銃を逸らした。そうしてけいちゃんは本当に泣きそうになりながら、こう懇願した。

「もう、止めて……」

この言葉の意味は一応、二通りだろう、まずは自分達に向かって撃つのはもう止めてと言う意味と「黒山墨字」自身に向かって撃つのは止めてと言う意味だ……

墨字さんはそんな言葉を聞いても全く表情を変えないまま、芝居がかった口調で「それじゃあ『ラスト』だ、弾は残り三発、リボルバーは六発装填式、つまりは確率は二分の一さ」とシリンダーを回転させることなく、軽く笑いながら言った。

そして、拳銃を持ち上げ、自分自身の右頭部に向けて、本当に簡単に引き金を引いた。

鋭い銃声が響く。画面一杯には血しぶきが広がる。映画なんかでよくあるシーンとは何処か違う、現実の事なのにどこか嘘っぽい。チープさすら感じるのに、墨字さんは勢いよく倒れた。

横たわった身体は軽い痙攣を起こしながら血をドクドクと流して、床を汚していく。実感なんてない、それ故にこの光景を私は撮り続けていた。

そうしてカメラで捉えていると生放送が自動的に切れた。時間にするのと引き金を引いてから三十秒程度だろうか？ 生放送自体にある程度のタイマーの設定があつたのだろうか？ それとも、別の何かだろうか？ あるいは、画面を切り替えるスイッチャー等は何処にあつたのだろうか？ 誰かの遠隔操作だろうか？

ただ、私がそんな事を考えている時に、けいちゃんは放心状態に近かったが、なんとか千世子ちゃんに近寄って、縛っている紐を解こうとしている。しかし、そんな事をしなくても、千世子ちゃんは自力で身体を捻り、脱出してしまった。

私たちは呆然とした。そして千世子ちゃんは即座に、墨字さんの右下半身のズボンから一丁の拳銃を取り出した。何で千世子ちゃんは抜け出せたのか？ その拳銃はいったい何だ？ 拳銃は初めから二丁あつたということか？ 訳が全く分らない。

そんな混乱の中、千世子ちゃんは「これ、どうする？」と私達に訊ねる、外からは小さいが、少しずつ近づいてくるパトカーのサイレンの音が聞こえて来る。

パトカーが来たのは、生放送終了後の五分後くらいだった。予想よりもかなり早い。予め、けいちゃんが連絡してあつたとは言え、最初の車の中の電話から考えると二十分以内にスタジオ「大黒天」にこんな大勢で駆け付けられたと考えると驚くべき速さだ。

これは「百城千世子」のSNSから事件が素早く警察内で認識され、それに先のけいちゃんの電話が決め手となって即座に動けた形だ。普通、此処まで早く動く事はない。それでも、間に合わなかった現実にはなにも変わらない。

このあたりからは何というか、私にはちゃんとした記憶がない。私たち三人共とも警察に保護され、事情聴取され、様々な事を言われ聞かれたが、まとも覚えていない。理由としては、事務作業的にこなされる警察の沢山の質問に、あの時の精神状態では全く関心が持てなかつた事と、一時的な心因性健忘症というのもあるだろう。これは、親族のお葬式の準備なんかで、忙しかつた筈なのにその記憶の一時的な記憶がないという現象に近いものだと、思っただけ。

そして、もはや警察における、ただの事後処理よりなんかより、頭の中を占めていたのはスタジオ「大黒天」で隠した「モデルガン」の事だ。それを千世子ちゃんから見せられた瞬間は、私は何も分らなかつたが、その拳銃のシリンドラーを開け、何も入っていない事を確認させられ「モデルガンだよ」と言われた瞬間、墨字さんが何でこんな事をしたのか、分つた気がした。

突発的にその「モデルガン」を千世子ちゃんから奪い、スタジオを一階下に降り、事務所の小道具だらけのゴミ箱同然のクローゼットにねじ込んだ。ここなら、こういう物があつても何ら可笑しくない。実際に、舞台上で使う模造刀や仕込み杖や鉄パイプなんかのごちゃごちゃした物が一杯ある。もし、見つかったら大丈夫かもしれない。

そうして隠しているとパトカーのサイレンが直ぐ近くまで来ている事が分り、私は外に向かう。千世子ちゃんに半分引きずられながら、けいちゃんも出て来ている。二人は何か話し合っている様子だが、何を喋っているのかは分らない。そうして、警察が来た。

私が、警察の応対からあの「二人」よりほんの少し早く、一時帰宅出来たのは一応成人しているということと、墨字さんの目当てであつたのが、明確に彼女たちだつたのが分るからだろう。まあ、けいちゃんの家には弟妹を警察が引き取りにいったらしいから、どういふ状況か

は微妙だ、ただ、当然の事ながら、スタジオ「大黒天」は封鎖状態にあり、本当に寝に帰るだけのアパートに久しぶりに返ってきた。

郵便受けは沢山の公共料金の領収書とチラシで埋め尽くされていた。邪魔くさいなあと思いつながら、殆ど中身を見ないで、紙ごみ用のゴミ箱に入れていくが、一通だけ封筒が入っていた。シンプルな茶封筒で、宛名の書き方には私の名前が普通に書いてあるが、裏書きには「阿佐ヶ谷芸術高校元非常勤」とのみ書かれていた。

私はおそろおそろ、その手紙を開けると中身は128ギガのSDカードと一枚の紙きれが入っていた。そこにはGメールのアドレスと良く分からない八桁の英数字が書かれてあり、そして最後にこんな事が荒々しく書かれてあった。

「映画監督が、最も欲しいのは『金』でも『納期』でも『機材』でもない、当然『編集権』だ、それも最終的な奴をだ。特別にそれを『終』お前にやる、好きにしろ」

その内容を読んだ後すぐに、私はノートパソコンを引き出し、SDカードを開いた。そこには女優「夜風景」を主人公にした「マクガフィン」の脚本とそれに呼応するような様々な動画が置いてあった。そして、他の動画はグーグルのクラウドに保存してある様な事が書いてあった。

私はGメールを使って、グーグルのアカウントログインを試みる。パスワードはさっきの良く分からない八桁の英数字を打ち込んだ。クルクルと回転する読み込みのマークが私の心臓の鼓動を早くするが、無事に通った。そしてアカウント「マクガフィン」にたどり着いた。

もう私は動かずにはいられなかった。此処からは話題性と私の身の振り方的に速攻で仕上げるしかない。もはや時間との戦いだ。今ある「夜風景」の動画データを元に強引に私が映画「マクガフィン」を編集する。

編集に命を賭ける

編集時間そのものは限られていると考えた方がいい。この事件の話題性と警察の事を考慮すると、私が黒山さんからデータを受け取ったと言う事を知られるのは不味い。そのデータを他人に公開する事になるし、下手したら消されかねない。

故に即座に荷物をバックにまとめ、例のSDカードと自身の2Tのノートパソコンとバックアップ要のガジェット、それと財布やキャッシュカード、スマートフォン等を持って、そそくさと出掛けた。時刻はそろそろ二十二時頃、近くのコンビニで一応、栄養ドリンク数本と多少の栄養調整食品を購入し、コンビニATMで降ろせれる一日あたりの限度額一杯の現金五十万程を降ろした。

これで、ある程度の行動は出来るだろうと予測し、大通りからタクシーを拾いとりあえず都心から離れて行きながら計画を立てる。別に完全な逃亡がしたいわけじゃない、とりあえず、七十時間程度時間をあれば何とかなる筈だ。それくらいの時間なら警察からただ時間稼ぎをするだけなら何とかなるだろう。

ただ女性一人が、深夜割増料金でタクシーを長距離行動する理由がまともなものが思い浮かばず「仙台で実家の母親が急に倒れた」とか「高速バスは二時間後にしか予約が取れなかった」という馬鹿げた物しか思い浮かばなかったが、このくらいの方で何とかなるだろうと考えた。ある程度遠方の場合、タクシーは乗車拒否できるらしいから、こんな理由で何とか融通をきかせてくれてありがたい。まあ、仙台まで、諭吉が約十万くらいかかるらしいが、別に構わない。

私は移動時間中はずっとノートパソコンで、SDカードの脚本の指示通りに大まかな編集作業に時間を割り振り進める。根本的に時間がない為、多少簡素な仕上がりになるだろうが、元々の映像の迫力が違うから、大丈夫なはずだ。いくつかの仮の録画データを当てはめつつ、最終的にはクラウド上に保存してある動画素材を使う。

そこで使うのは、今まで私たちスタジオ「大黒天」で撮ってきた「夜風景」に関する映像達だ。それは私がけいちゃんに初めて会った日か

ら言われて来た事、あのシチュエーのウェブCMを撮った日からずっと撮りためていた宝物。

いたって「普通」の女子高生である瞬間のけいちゃん、演技に完全に「没入する」けいちゃん、その演技を約三時間一心不乱に「見続ける」けいちゃん、役に感情移入しすぎて「暴れ狂う」けいちゃん、役というモノそのものに「向き合う」けいちゃん、たかがオーディションの二次審査の為に「本気」を出すけいちゃん、そんな様々なけいちゃんが大量にデータとして存在してる。

そして他人のカメラの向こう側の作品「デスアイランド」や「銀河鉄道の夜」や「隣の席の君」そして墨字さんの「新宿ガール」に、結果的に共同稽古がなされた「羅刹女」といった作品群が、山のように沢山保存してある。彼女を迎え入れた日からずっと私が、やっていた「仕事」の一環だ。これらは、スタジオ「大黒天」のアカウントでクラウド上に保存されている。

その仕上げに、墨字さんから渡されたアカウント「マクガフィン」では、今回の事件で捉えた映像がクラウドに保存されている。こちらの確認作業はスマートフォンで並列的にやっているが、あの時の事件の時に使用された全てのカメラでの映像が映し出されている。

確認して分かったのは、墨字さんの左手には何も持っていないように思えたが、基本的に死角になっており、何かを隠している。おそらく、生放送中のカメラでの映像をリモートコントロール出来るように、小型のスイッチャーを持っていたのだろう。いくつかのシーンでは何かを握っているようにも見えるし、丁度その時間帯は他のカメラからは死角になる様になっている。

そして、あの「モデルガン」についてだ。やっぱりというか、演出のためというか、あの人らしいというか、実際に向かつて千世子ちゃんを撃つ少し前に、入れ替えが行われていた。

絶妙に、カメラの死角とミスディレクションを駆使して、右下半身のズボンの中から取り替えている。ある一台のカメラからだけ、その様子が伺える。ただ、これはけいちゃんは気づきにくいだろうけど、

千世子ちゃんには絶対に分っていた筈だ。あの二人は何故か、通じ合っていたということだ。それはあの「モデルガン」を発見したことからも伺える。そんな無茶な事を隠して協力した理由は憶測になるが、きっと……私と同じ理由だ。

ただ、その後のけいちゃんに向けた時には「モデルガン」のままだ。つまり絶対に実弾なんかでない。それでも、そのことによって、抜群の「夜風景」の表情をカメラに抑えることが出来る。だからその後、作品の整合性を取るために無意味な冗談を言いながら、また入れ替えを行い、自殺したということだ。

ハッキリ言って「狂気」としか言いようがない行動だが、なんとなくそういう危うさがある人にはある。何というのだろうか、ある映像を撮る為になら本当に何だっけというのだろうか、その為に実際に命を賭ける人物だというか、簡単に言えばただの映画馬鹿なのだが、そんな愚直な貴方に私は惚れ込んだんだ。

ただ、明らかにこれらとは別の良く分からない録画データが入っていた。日付順にしたら一番下になり、トップの画面が他のと比べると割と暗いし、容量もかなり短い。何か確かめるように、その録画データを開くと「松野龍也」の自殺の瞬間が映っていた。この映像を見終わった後、ああ、此処で今回の強行に出たのだと思わされる。ただ、もはやこれも映画の為の素材の一つだ。

仙台までに着くころにはもう十分朝日が登っており、適当な病院近くで降りして貰った。タクシードライバーさんは気を使って「間に合うといいな」とかなりしんみりとした口調で言うので、上手く騙せんだなと思ひ、少し元気がないようにお礼を言った。

そして、病院近くにある全国チェーンのインターネットカフェに即座に賭け込んだ。取り敢えず、此処である程度の事はしてしまう予定だ。昔、作った会員権を見せ、オンラインゲームユーザー等のために高性能パソコンあるツインルームを24時間パックで取った。

こういうところにある、高性能パソコンなんかはたかが知れている

が、編集の動画再生用の機器としてならまあ、妥協できる範囲だ。それに下手なホテルよりは回線がマシだし、何より机と椅子とコンセントが十分に使い勝手が良い。私は此処で必死に映画の編集に取り組んだ。元からあと数十時間は、仮眠は殆ど取るつもりもなく、必死で二時間の映像作品に落とし込んでいく。ある程度、SDカードに編集作業行程の大まかなデータが入っていたが、それはあの生放送中からは入っていない。

この辺りは物語的にクライマックスだ。出来るだけ、手を抜きたくない。今ある技術をとにかく詰め込む。時間との勝負だ。

そこから私はいい加減な逃走を行動を繰り返した。適当なタイミングでインターネットカフェから立ち去り、またタクシーを拾い、程ほどの長距離を移動して、また、どこか編集に適した様な場所に行き、必死で編集作業してを繰り返した。そして目標の七十時間以内に何とか形になった。これはもはや「マクガフィン」何かではないが、それでも一つの作品だ。

タイトルを強引に付けるなら「Actresses」彼女の為の映画だ。

ただ、この作品の公開は「女優」である「夜風景」の死に直結する。こんな作作的な編集のあるドキュメンタリーが彼女の名前を傷つけないわけがない。それでも、この悪意ある映像達は「黒山墨字」作品の映画として絶対に必要であり、この映画の「ラスト」には拳銃による「殺人」という行為は大きな意味がある。例え、監督の自死になつたとしても……だ。

そして、この映画を「完璧」に近づける為には絶対に「女優」である「夜風景」の死は残念ながら必要条件だと、理解してしまった。

だから、私は「女優」を編集で殺すという映像作家として、重い犯罪行為に協力してしまった。しかしこれで「黒山墨字」の偉大なる快作は誕生することになる。私は、その「撮影」を協力することになり、そして「編集権」を行使して、共同制作者かつ、この物語の共犯者になつた。

これで「夜風景」という才能ある「女優」の物語は、この「作品」で終わる。きつと彼女のこれから約束されているだろう成功や地位や未来は「黒山墨字」の傲慢な決断で、全て水の泡になって消える。けれど、私は泡になって消える人魚姫の様な「儂さ」を彼女の「ラストアクト」を無駄になどしない。そんな事してはいけない。全て、最高の露悪的なエンターテイメントに落とし込む。

私は編集の最終確認を終え、複数の動画サイトに「Actress」の名前で、この作品を投稿した。タグに出演者の名前は書いておいたから拡散はどうかなるだろう。ようやく全てが終わった。そう思うと一気に疲れが押し寄せてくるが、取り敢えず、適当なホテルで眠ることにする。そして、その支払いをクレジットカードで済ませる。こうすれば、まあ決済記録から、私の居場所が警察に割り出されるだろう。

こんな逃走劇まがいには意味はないのかもしれないが、人々は物語性を楽しむ、私が編集の為に逃走した、という事実がこの映画のスパイスに変わる。

そして、今日「夜風景」は女優生命が断たれた。

黒から天へ

あの生放送がインターネットに流れてからは完全に世間はお祭り騒ぎだったようだ。日本若手女優のトップ二人の実際の命の危機とその蛮行に及んだもの自身の拳銃自殺によって終わった動画。それはあまりに衝撃的な「本物」のスナッフビデオだった。勿論、そんな映像はまともな動画サイトでは即座に削除されたが、こんな内容では雨後の竹の子のように片っ端から、ミラーした動画がアップロードされていき、今の時代に一度流出した需要のある映像を完全に削除するのは事実上不可能だ。

しかも、その映像が意図的に見ている観客を楽しませるための劇場型の犯行であったのならある意味当然の結果だろう。そして、その原因となった登場人物が、スターズの天使「百城千世子」と新宿ガール「夜風景」そして世界的に評価されている監督「黒山墨字」だったのだ。

この座組では、嫌でも先日まで公開されていた日本最大規模の大舞台「羅刹女」が当然連想されるだろう。そのサイド「甲・乙」両者の主演女優が、映っており「黒山墨字」も「乙」の演出家として起用されている。さらに、この凶行を行った動機が、放送内で語られておりその理由が小説家「松野龍也」の小説にして、彼は「夜風景」の父親であるという衝撃的な構造が成り立っている。

さらに、その原因の小説「マクガフィン」という作品は映像化が、元々「黒山墨字」で監督される予定だったと企画されていて、なおかつ「羅刹女」のプロデューサー「天知心一」もこの企画に関わっており、例の事件で、途中で離脱したが「王賀美陸」がキャスティングされていた。

追い打ちに小説家「松野龍也」の作品に、こちらも「羅刹女」の原作・演出家の「山野上花子」が題材になっただろう作品が存在している。こちらは噂では、出版時は不倫関係にあり、夜風家の母親の葬式の立ち合いにさえ関係していたという話だ。

つまり、あの「羅刹女」は完全に今回の事件の舞台となった、黒山率いるスタジオ「大黒天」が中心にあったという事だ。傍から見れば、

芸能事務所「スターズ」のお家騒動とそれを利用した番宣に見えるかも知れないが、真のキャスティングの目的は全て「黒山墨字」の手のひらの上だった。

……という事が、インターネットを中心に徐々に広がっていった。この事実と裏付けの証拠は本当に計算されたように、絶妙に確実に浸透した為、この話題を拡散するある性悪な人物が関わっていたのは関係者からはある程度分っていたが、もはや止めようがなく、この悪趣味なムーブメントは拍車をかけ、そして事件から数日経ったある日、ある動画がアップロードされた。

タイトルは「Actresses」といい、この事件の主演と言っている「夜風景」の物語を初めから映し出したある意味恐ろしい約120分のドキュメンタリー映画だった。この作品はまさに本事件の全貌を見せ付ける内容だ。この「Actresses」を編集し、世に出したのはスタジオ「大黒天」の映像制作であった「柊雪」であり、事件の後、一時帰宅が許された日から数日行方不明になっており、その間にこの映像を殆ど逃亡しながら作り上げた。

この逃走劇さながらの作成秘話も面白いが、この作品の内容、監督自ら見つけ出した原石「夜風景」という才能の恐ろしき、明らかに計算して撮られ続けた内容、出来過ぎた事件の全貌、小説家の自殺、監督の狂気、それらは皮肉となりながら日本で初めて監督「黒山墨字」の名前を大々的に広げることになり、稀代の問題作として認知された。「Actresses」は、世界的に見ても稀有な事例であり、映像そのものの価値と作品の内容とその作品の周囲にある情報と事実が、混然一体となり後世まで語り継がれる圧倒的なカルト映画と評される事になった。

ただそれは倫理的に撮影してはならない領域を表現したために、彼は自らの死という結末を選択し、そして盛大に「夜風景」という才能ある「女優」の名前に最悪の傷を付けた。

故に、だれも彼女を見て「普通」の役者として評価できなくなり、彼

女は芸能界から追いやられた。誰かが、意図的に干した訳ではなかったが、もう彼女には座るべき椅子が無くなっており、この事件の前のタイミングで、彼女に大河ドラマの話があったらしいが、それも彼女のポストは半自動的に無くなっていった。ただ、その話にも主演の「環連」が、実は「黒山墨字」監督の初作品「たんぽぽ」の主演だという噂も経っており、何処までがこの物語の真実なのか分らない状態だった。

そんな状況にあつては、黒山墨字の経営していたスタジオ「大黒天」は当然潰れることになったが、それ故に彼の撮った様々な作品の権利が、完全に宙に浮き、此方もインターネットの海に放流されることになる。

この事件の様々な経緯から、だれもこれらの作品群を法的に守ることがとても困難であり、今まであまり日の目を見なかった彼の芸術的な作品群は、こんな状況故に数多くの人々に衝撃を与えることになった。

彼はその年、世界で一番違法に視聴された監督の名を欲しいままにした。当然、こんな事が目的だったとは思わないが、あの人は確かに歴史に名を刻んだ作品を作った。

それから数年が経過した。私はあの日から、一度もけいちやんに会っていない。何度も訊ねて来たが、全て断った。当然、連絡先も変えた。当たり前だろう。どんな顔をして会えば良いのか全く分らないのだから……それに昔、けいちやんの言っていた「人生で最も言われて嬉しかった言葉」を叶えなくしたのは明らかに私だ。もしも「Actresses」を作らなかつたら、叶っていたかも知れない望みを断ち切つたんだ。

ただそれでも「悪い」と思っている「後悔」はしていない。そして私の罪は現在の法律では、裁くのが難しく、刑が下るまで時間が本当にかかり、良く分からない名前の法律で、結局数年の軽い執行猶予が付いただけだった。まあ、それはただの建前であつて、私は映像業界に復帰出来るはずはなかった。私は立派な共犯者なのだから……

そんなある日、私の元に一通の手紙が届いた。今の私は、年賀状すらまともに届かない天涯孤独で、映像業界から足を洗い、片田舎でドラダラと仕事するしかないフリーターだ。それに事件以来、苗字も名前も変えた。それなのに「柊雪」宛てに手紙が来るなんて驚きだが、その手紙の差出人の欄は「宇津木景」となっていた。その景の字の書き方には見覚えがあった。

私はこの手紙を開けるのはとても怖かった、ただ開けずに捨てるのはもつと怖く、ずつと捨てられず、私の部屋の机の中心で、威圧感を漂わせて鎮座ましましていた。私は一週間以上悩み、遂に開ける事を決意した。その時、どんな呪詛が書かれていようと構わないから、どうか「貴女に罪はない」と言う様な事は書いていないでくれと思いなからその封を切った。

中身は一枚の写真と便箋が二枚入ってあった。写真はあの可愛い双子が随分と大きくなつた姿で映っており、とても元氣そうだ。手紙では、私については僅かにしか書いておらず、それも住所は天知さんから教わったとしか記述がなかった。私に何を考え、何を感じ、何を思ったか？　なんて一切書いていなかった。

基本的な内容は自分たちの近況を簡単に書いたものだった。苗字を母方の方に変えた事、ルイ君は最近サッカーにハマっている事、レイちゃんは児童文学にハマっている事、高校は通信制に編入して卒業した等々が書いてあった。

そして、今はバイトをしながら「小説」を書いており、今度出版されるらしい。その本のタイトルは「没カバーの大について」とかなり変なタイトルで、ペンネームは「宇津木黒」で出版すると書いてある。そこで一枚目の便箋は終わり、あらすじが書いてあるかと思ひ、二枚目の便箋を見たが、白紙だった。

どうやら一枚目で書きたかった事は終わったようで、礼儀としての二枚目の白紙がしてあった、だけだったようだ。私はこの責められない状況に、複雑な思いだったが、あのけいちゃんが「小説」に興

味を持ち、自ら書き、出版まで漕ぎつけた事が信じられなかった。

この感情をどう処理していいのか、分からない為に、もう一度便箋を読み返そうとした時、二枚目の白紙の便箋の裏に何か書いてあるのを見つけた。それにはこう書いてあった。

「大黒天の黒から天へ」

その意味の良く分からない一文が、ただただ優しく、私の涙腺を刺激する。涙がポロポロと止めどなく流れ、せつかくの手紙を濡らしてしまう。ただようやくこの言葉のおかげで、私は償いきれないこの過去に向き合う覚悟が出来た。

物語は、また歩み始めた。